2023 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2023)

目次

1.　各科目についての報告……　2

2.　2023年度 Placement Test 実施報告……　160

3.　2023年度日本語相談室実施報告……　164

4.　2023年度立教大学漢字検定試験実施報告……　173

5.　留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告……　174

6.　日本語教育センターシンポジウム実施報告……　174

7.　日本語教育センターニュースレター発行報告……　175

8.　短期日本語プログラム報告……　175

９．センター員活動報告……　191

10. 2023年度FD記録……　196

2023年度日本語教育センター運営体制

2023年度日本語教育センター会議開催記録

１．各科目についての報告

2023 年度　J0　授業記録

コースの概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞ a クラス：小澤雅、佐々木瑛代、冨倉教子
b クラス：数野恵理、井上玲子、小松満帆
＜秋学期＞ a クラス：小澤雅、高嶋幸太、佐々木瑛代
b クラス：武田聡子、小松満帆、末松史

授業コマ数：週 3 コマ 履修者数：春学期 a クラス 17 名、b クラス 20 名、秋学期　a クラス 20 名、b クラス 20 名 使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場面を提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/（私は）～です/～人です/専門は～です/どうぞよろしく/～さんは～ですか？/はい、いいえ/～さんは？/お仕事は？/お住まいは？/お国は？/N が好きです、好きじゃありません
場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください

レストラン	～、お願いします/N で
許可を得る	N でいいですか/V てもいいですか
依頼する	V てください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/V ます・ました/何をしますか・何をしましたか/V たいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

結果と課題

＜春学期＞

（a クラス）

最後までモチベーションが高く、日本に対する興味や関心が窺え、普段聞いたフレーズについても授業内で扱った文型や語彙に関連させて質問する学生が多かった。他の学生が文が読めない時には、ペアの学生が読むのを積極的に助けている場面も多く、協力的だったので、いつもクラスの雰囲気が良かった。

学期後半は、活用が増えてきて苦戦していたが、活用の練習を繰り返し行うことでフレーズや文の暗記だけではなく、文型も意識できる学生が増えた。

「かな」に関しては、学期を通して学習者の努力とその成長が確認できたが、できに個人差があり、若干名、最後までひらがなやカタカナが定着せず、授業での導入や練習時間の取り方が難しかった。仮名での読み書きができないことで、会話の練習でクラスについてくるのが難しい学生もいたため、ひらがなやカタカナ学習のサポートに加えて、ビジュアルでの状況の提示や、代入練習以外のワークなども取り入れるなど、今後さらに工夫が必要かもしれない。

そのほか課題はあまり見られなかったが、強いて言えば、学期の中盤以降どうしても学習者の集中がきれ、日本人学生を招いての活動もやや単調になってくることがあった。そのため日本人ゲストとの活動の内容を学習者に考えてもらう、または何か学習者の創造力を使うプロジェクト・課題などがあると、学習者の授業への参加意欲と言語習得にさらなる効果があるかもしれない。

（b クラス）

学期の途中で出席を止めた学生が 3 名出てしまったのは残念だが、残りの 17 名は最後まで意欲的に取り組んだ。遅刻・欠席が目立つ学生もいたものの、授業中は反応もよく、質問

もたくさん出て、積極的に学習していた。文法や会話のペアワークでは、仮名を読んだり、言葉を思い出したりするのに時間がかかる学生もいたが、できる学生がヒントをあげるなどサポートしており、クラスの雰囲気が非常によかった。

最後まで出席した学生は、学期末には仮名もしっかり読み書きできるようになり、学習した項目を使って堂々とスピーチをすることができたので、学生たちも達成感を感じたのではないかと思われる。今学期で帰国する学生がほとんどであったが、ぜひ今後も日本語の学習を続けてもらいたい。

このクラスは遅刻が目立つ学生が多く、なかなか改善されなかった。あまり遅刻が多いと他の学生にも影響があるため、引き続き工夫していきたい。

＜秋学期＞

（a クラス）

積極的に学び、お互いを助け合えるようなクラスだったが、表現や語彙、文字の習得に関しては、日ごろの努力が成果に反映されたものとなっていた。

教科書がひらがなに変わる時点で、スムーズにひらがなが読める学生が増え、作文や発表のスクリプト作成では、ローマ字ではなく最初からひらがなで書く学生も多くいた。モデル文を参考にして、J0 で習った単語と文型を使って自分で書くことができていた。カタカナは使う機会が少ないので、忘れてしまう学生が多かったように思う。学期後半の復習の時間には、カタカナを使ったアクティビティなども積極的に取り入れていきたい。

一方で、欠席や遅刻が多かった人たちは特に遅れていってしまい、ひらがな・カタカナでつまずいた学生は、教科書がひらがな・カタカナに切り替わってから読むのが大変になった。特に後半はレベル差が開き、発言にかかる時間も違い、ペアワークなどがやりにくく、スピーチの原稿作成でも時間がかかってしまっていた。ひらがな・カタカナクイズやそのための練習以外にも、授業スライドを早い段階からひらがな・カタカナを入れるなど授業中にひらがなやカタカナをもう少し積極的に取り入れて定着を図ることもできるかもしれない。

積極的に話す学生が多いクラスだったが、学期途中からは授業中に雑談する一部の学生にひっぱられ、活動に集中できていない学生が出てきてしまった。ペアを変えたり、座る場所を離したりしたが、他のペアも巻き込んで雑談を始めてしまう場面もあった。

また、今学期は、動詞や形容詞の活用ルールを覚えない学生が多かった。形容詞の活用を復習しても、難しいからとそれ以上覚えようとしない場面もあった。J0 であっても活用ルールに興味が持てるようなアクティビティなどをさらに取り入れられるよう考えていきたい。

一方で、J0 では教えない文型のルールや活用などを、授業外でも意識して、個別に質問してくる学生もいた。そのような学生は全体では質問せず、ペアワーク中や授業後に質問を受けることが多かったので、活用や文型を意識している学生としていない学生の差がとても大きかった。

日本語学習のモチベーションがなかなか維持しにくい学習者に対して、いかにサポートできるかが今後の課題になっていくと思われる。

（b クラス）

経営学部間の特別外国人学生で早期帰国を認められている学生が3名おり、この学生たちは12月まで出席し、1月はクラスに出ない代わりに追加の課題に取り組んでもらった。

今学期の本クラスの履修者は全員が課題をこなし、テストでも結果を残すことができた。文字を覚えることにほぼ全員が真剣に取り組んでいた。その結果、ディクテーション、文字のテストの結果も良好だった。最終スピーチもどれも素晴らしいものだった。

学期を通して、明るく楽しそうに授業に臨んでいて、活動などにも積極的に取り組む学生がほとんどだった。学生同士仲が良く、助け合っている姿が印象的だった。しかし、学期の後半、特にクイズの実施がなくなってから、遅刻、欠席が目立つようになり、全員が時間通りに揃うことはほぼなかったのが残念だった。

今後の課題は、学期後半の遅刻を減らすことと、継続的に日本語学習を続けてもらうためのモチベーションを今後にどうつなげられるかである。できれば継続的に学習してもらいたい。

2023 年度　J1　授業記録

コースの概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞ 冨倉教子（文法 1）、末松史（文法 2）、東平福美（聴解・会話）、山内薫（読解・作文）、鹿目葉子（総合スキル）

＜秋学期＞ 黄慧（文法 1）、末松史（文法 2）、東平福美（聴解・会話）、栃木亜寿香（読解・作文）、鹿目葉子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解・会話、読解・作文、総合スキル）
履修者数：春学期　13 名　　秋学期　14 名
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルの

クラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	・Exchanging greetings ・Learning some survival expressions ・Learning the writing system of Japanese language ・Learning basic numbers ・Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) ・Learning basic words(Date、 Time expressions)
1	・Noun sentence ～は～です ・Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど ・Noun modification(kinking nouns) ～の ・Particle “also、 too” ～も ・Particle(question marker) ～か ・Interrogatives なに・だれ・どこ ・Pronominal “one” ～の ・”please give me ---“ ～をください ・Counterword ① ～円、個、才、ひとつ ・Sentence ending particles ～よ、ね
2	・Polite speech and casual speech ・い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 ・Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも ・い／な Adjectives as noun modifiers ・Interrogatives どんな、どう

3	・Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 ・Adverbs indicating ‘degree’ ・Explaining reasons ので、から
4	・Verb groups、 dictionary form of verbs ・Polite and casual verb sentences ・Particle を(Object marker) ・～は～を V sentences ・Particle で(Location marker) ・Particle で(Instrument marker) ・Particle に／で(Destination/direction marker) ・Mimetic words ① Eating、 drinking
5	・Giving and receiving something ① ・～は Space/area/pass を V(motion verbs) ・て form of verbs ・Making requests ～てください／～ないでください ・の：Noun equivalent marker ・V て、V て、V。 ・Asking permission/Giving permission/prohibition ～てもいい／～てはいけない ・Mimetic words ② Watching、seeing、speaking
6	・～は Object に V sentence ・Topic は V(Intransitive verbs) ・Particle に(Time marker) ・～から～まで ・Duration on time ～間 ・Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい ・Time expressions まえに、あとで、てから ・～と思う ・～だろう／だろうと思う ・Mimetic words ③ Condition of the body
7	・Sentence of existence and locatives いる、ある ・Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 ・だけ／しか ・N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、neither) ・N1 は A、N2 は B(Contrast は)

	・Noun と／や、Noun/adjective/verb て form、V-たり V-たり Adjective/verb し ・～かもしれない
8	・V-ている(Continuous action、state) ・Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する ・が used to describe a condition、 scene before one's eyes ・～中(during、 while、 through) ・もう／まだ ・～ませんか、～ましょう ・Questions word ＋ か／も ・～んです ①
9	・Giving advice ～たほうがいい ・Particle に(amount of frequency per time unit) ・Adverbial usage of adjectives ・Noun になる ・Conditional ①：と ・Chang of state、 condition(adjective + なる) ・Mimetic words ④ Pain
10	・に(final destination)／を(point of departure) ・V-たことがある(experience) ・Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain ・Third person's emotion/feeling/pain/desire ・Conditional ②：たら ・Even if ～ても

授業の方法

J1 は週 5 日のコースであり、文法 1、聴解会話、文法 2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法 2：文法 1 で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法 1 で習った文型が使われ

ている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル : 文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

＜春学期＞

文法 1 : 学期を通して日本語に対する興味と積極的に学ぼうとする姿勢が伺えた。毎回の授業で新しい表現や文法を導入するクラスであったが、単に受け身になって新しい情報を得るというより、それを其々が自分のものとして捉え、知っている知識や体験、母語との比較などから疑問に思うことなど常に質問を投げかけ、かつクラスメートの質問に対しても互いに意見を述べ合うなど、毎回の授業は活発に行われており、個々の学びを触発していたと感じた。一方中盤動詞、形容詞の活用が入って以降、容易にこなす学生とそうでない学生に分かれていった傾向があった。全体的に初級日本語の概要を捉えた学生は多く見られるが、上記の理由で、最終的に基本となる文型を正確に使用することができない学生も数名見受けられた。今後は日本語に対する興味・関心を保ちつつ、複雑な活用などの学習および習得にどのように繋げていくかが課題である。授業では積極的に参加するだけでなく、学習者同士で自然に協力し合い、共に学び合う姿勢が全体的に見られ、活気のあるクラスだった。

文法 2 : 明るく楽しい個性豊かなクラスでした。教室にいる間は全力で日本語の勉強を楽しんでいました。携帯をいじって授業を聞いていないような学生は一人もおらず難しくても自分のペースで一生懸命取り組んでいました。ただ、全てにおいて楽しむことに長けているのがこのクラスの特徴で、教室外では勉強以外の日本での生活を全力で楽しんでいたようで、宿題の提出率や、クイズの準備、予習、復習をしてくる学生としてこない学生の間に大きな差ができました。クラス内では、ゆっくりな学生には自分のペースでじっくり慎重に課題取り組んでもらい、よくできる学生にはどんどんチャレンジしてもらうような形式にしたので、授業中の雰囲気はとてもよかったです。最初遅れをとっていても、追いつきいい結果を出せた学生もいました。その学生曰く、「近道はなかった、コツコツ真剣にやれば結果はついてきた。」とクラスのみんなにアドバイスをくれました。

今後の課題は、授業を休まない、遅刻しない、宿題を期限までに提出する、クイズの準備、予習をきちんとする等、基礎的な部分に真面目に取り組んでもらうことです。最初の数回の授業でそのような習慣を癖づけてもらえるようこちらが促していこうと思います。

聴解・会話： 毎回きちんと出席して真面目に勉強している学生は日本語がぐんぐん上達し

たが、反対に欠席が多く、宿題で手を抜いていた学生は最後まで成績が芳しくなかった。特に今期は学　期当初からレベルに差があり、最終的にはそのレベル差が広がってしまった。中には最初から最後まで翻訳サイトを頼ってしまう学生もいた。今後の課題としては、学期前半の基礎となる文法や語彙が定着していない学生は後半の授業内容を全くこなせない場合がほとんどなので、まずは授業に休まず参加させ、聴解会話を通して文法や語彙を暗記、定着させる必要があると考える。また、教室での日本語以外の言語の使用も控えさせ、できる限り、日本語で話す努力をさせる必要がある。

読解・作文：皆、授業態度が大変よく、読解においても作文においても、授業活動に真剣に取り組む躍動感あるクラスであった。新学期にはクラス内でレベルが三段階に分かれており、レベル差に応じて、授業活動内容に対する理解及び活動への取り組みにおける進度に差が表れた。学期中には、活動内容への慣れと各学生がそれぞれのペースで学習を積み上げていたことから、徐々にレベル差も緩やかになり、学期中盤から学期末には、大きな差はみられなくなった。読解においては、授業内容で理解できない箇所が出てきた際や疑問を抱いた際には、担当者に積極的に質問したり、学生同士で話し合ったりするなど、日本語学習に対し、大変前向きな姿勢がみられた。また、作文においては、Extra テーマの作文にも挑戦する学生が複数名おり、やる気の高さが窺えた。一方、漢字学習においては、新学期時には全員向上心が高く、熱心に取り組んでいたが、次第に、なかなか合格できず、新たな課に進めないことから、学習への動機づけが低下していく学生が複数名いた。本クラスでは漢字学習は自己学習という位置づけであるが、学生へのフィードバック方法について、今後考えていきたい。

総合スキル：履修者 13 名は、積極的に授業に参加していた。とても明るく、チームワークも良く、ロールプレイや会話練習にも率先して取り組んでいた。また、日本人学生によるビジターセッションでは、既習の語彙や文法を使って会話をしたり、お互いの文化や趣味について話をしながら交流を楽しんでいた。最終のプレゼンテーションは、「おすすめの物」をテーマに、日本語による発表であった。授業を通して学んだ文法項目や語彙を使うなど、今までの練習および復習の成果が表現力にも現れていたと思われる。また、ネット上のツールを使うなど工夫を凝らし、魅力的なプレゼンテーションであった。

学生からは、ストレスなく学習に望め、毎回楽しく授業に参加できたと好意的な意見が聞かれた。課題としては、ビジターセッションの効果的な利用方法を考えることである。

＜秋学期＞

文法 1：学期を通じて学習者のモチベーションは安定し、授業に前向きに取り組み、高い学

習意欲を示していた。宿題だけでなく、授業中のタスクや練習にも真剣に取り組み、分からない文型に関しては積極的に質問し、熱心に学んでいた。文法②のサポート体制もあり、文型の理解だけでなく、運用能力も向上した。授業中はみんな協力し合いながら、遅れをとっている学生をサポートする場面も多く見られた。大変大変明るい雰囲気で授業を行うことができた。

課題として、以下のような点があげられる。まず、学生の理解を促進するために、文法①の文法項目の提示順を工夫する必要がある。今学期は特に助詞と活用の運用において混乱がみられたため、分かりやすい提示順や練習の仕方を考えなければならない。つぎに、J1 文法の学習ポイントを習得し、応用できるようになるには、教室外での動機づけや日本語を使用する機会を増やすことが重要であると考えられる。さいごに、予習・復習が重要である一方で、予習・復習不足の学生も見受けられ、その改善が今後の重要な課題であると思われる。今後は学期初めから自律学習の重要性を伝え、授業外でも自主的に勉強する習慣をつけるように促す必要があると思われる。全体的には学生たちの成長が見られつつも、個別の課題や学習習慣の向上が求められる。

文法 2：文法 1 で学習した内容の復習、短文作成、練習問題を自作プリントを作成し取り組んだ。レベル差を考慮し、早く終わってしまった学生の EXTRA　WORK を毎回用意したり、逆にゆっくりな学生は最低 3 問終わっていればいいと伝え、練習問題の難易度にグラデーションをつけた。机間指導をし、個別にフォローを心がけた。間違いが多かったところ、理解が不充分だと感じた箇所は全体で共有した。明るく楽しい個性豊かなクラスで、常に楽しい雰囲気だった。出席率や宿題の提出率はとてもよく、コツコツと頑張っている学生が大半だった。

今後の課題としては活用の定着である。活用クイズをしてなんとか定着を促したが、クイズはできていてもそれを実践に移すのが難しかったようだ。

聴解・会話：今学期は授業に休まず参加するよう促し、聴解会話を通して語彙や文法を丁寧に学習し、定着させることを目指した。全体的に最終成績が良かったのは出席率や課題提出率が良かったのが理由であると考える。しかし、出席率や課題提出率は良くても言語学習そのものが苦手な学生もおり、彼らの聴解の期末試験結果は芳しくなかった。聴解会話クラスでも新出文型の導入をしなければならない日はどうしても聴解練習に割く時間が減ってしまい、聴解が苦手な学生にとっては厳しかったのかもしれない。よって、今後の課題としては四技能を万遍なく教えることであり、その授業の組み立てを工夫する必要があると考える。

読解・作文：読解は、教科書に沿って短い会話をペアで読み合い意味を確認するところから始め、徐々に長い文の読解を行った。会話文の音読はスムーズであったが、長い文になるにつれて読解力に差が見られるようになった。そこで意味が分からない語彙や表現を類推しながら一通り読み、キーワードに印をつけるなどして大意を把握するよう促した。その結果、キーワードを探し文の構造および大意をくみ取る力がつ

いた。ただ長文問題の宿題正答率には個人差が見られた。作文は、書く前に与えられたトピックについてペアやクラス全体で共有し、自由に口頭でアウトプットする時間を多く設けた。その後、アウトラインを作成し作文に取り組んだ。自分の国、家族、友人、趣味、といった身近なトピックを既習の文型や語彙で書く力が身についた。一方で課題もあった。作文の返却後、自己フィードバックが不充分なまま次の課題に取り組む姿を見かけた。自己フィードに任せるだけでなく、ペアで書いた作文を読み合うなどし、良い点や修正点について話し合うなど、ピアによるフィードバックの場を設けることも効果的であると思われる。

総合スキル：履修者 14 名は、積極的に授業に参加していた。クラスの雰囲気も良く、タスクに率先して取り組み、日本語学習への意欲が見られた。2 回実施した日本人学生によるビジターセッションでは、日本人学生と話す機会を大切にし、既習の語彙や文法を使って会話をしたり、お互いの文化や趣味について話をしながら交流を楽しんでいた。最終のプレゼンテーションは、「日帰り旅行」をテーマに日本語による発表であった。既習の文法項目や語彙を積極的に使用したり、未習の文法使用にチャレンジする学習者もおり、日本語学習への意欲が窺えた。学生からは、毎回楽しく授業に参加できたと好意的な意見が聞かれた。課題としては、今までのタスク活動に新たなリソースを加え、授業構築をすることである。

2023 年度　J1S　授業記録

コースの概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞ 黄彗、森井あずさ、泉大輔
＜秋学期＞ 長谷川孝子、森井あずさ、泉大輔

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）
履修者数：春学期 15 名、秋学期 13 名
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひら

がな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

J1S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法、聴解・会話 : 文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文 : 隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

春学期はクラスの人数が比較的多く、レベル差も大きかったため、当初、各学生の理解に応じた細やかな指導が難しいと思われていた。そこで、差を埋めるための工夫として、進度の速い学生には追加の課題を用意し、個々の進捗に合わせた指導を行うといった個別対応によって学生たちのサポートを行った。学生たちの学習意欲は非常に高く、宿題や予習をしっかりとこなしていた。また、学生同士の協力や積極的な参加が見られ、一体感を感じられる良いクラスであったこともあり、常にコミュニカティブな教室環境を実現できた。特に会話練習を好む学生が多く、積極的に話そうとする意欲がさらなる上達を促していたように思われる。課題としては、文法項目の導入および練習を行う授業において、時間内に学習項目を全て十分に扱うことが難しく、時間配分にさらなる工夫が必要であった。また、文法の理解が不十分なことにより聴解練習が不足することもあり、聴解の期末試験での結果が伸び悩む学生が見られた。文法の導入および練習の時間配分を検討し、さらに聴解練習も十分に扱うことが今後必要であると考えられる。

＜秋学期＞

履修登録者は 13 名であるが、実際はレベルが同程度の 10 人名ほどの学生で構成され、クラスサイズがちょうどよく授業の進行もしやすかった。また、学生たちはやる気に満ち、楽

しく学んでいた様子が窺えた。他クラスと比べると大学院生の割合も高く、日本語科目が必修ではないながらも、非常に意欲的に授業に取り組んでいた。春学期の課題であった聴解時間の不足の対策として、秋学期はリスニングの時間を増やしたため、聴解の期末試験も比較的よい結果が見られ、学生たちもそれほど難しさは感じなかったようだ。一方で、授業中の学習態度は極めてよいものの、何度も注意しても遅刻や欠席をする学生がいた。ごく一部ではあるが、欠席が多く日本語学習への意欲が不足している学生も見受けられた。今後は学生の目標を確認し、学期初めに短期目標と長期目標を共有する時間を設けることが必要かもしれない。

2023 年度　J2　授業記録

コースの概要

J2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。週 5 日、毎日スキル別（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法 1 で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：＜春学期＞ 冨倉教子（文法 1）、末松史（文法 2）、森井あずさ（聴解・会話）、泉大輔（読解・作文）、黄彗（総合スキル）
＜秋学期＞ 鹿目葉子（文法 1）、末松史（文法 2）、泉大輔（聴解・会話）、小澤雅（読解・作文）、末松史（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解・会話、読解・作文、総合スキル）
履修者数：春学期 7 名、秋学期 16 名
使用教材：独自教材

コースの目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法 1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法 2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解・会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解・作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ～ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention： I intend to ～ ～つもりだ 4. ～んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、 Crying、 Anger
2	1. Can; indicating one's ability ～ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる：Overdo～/Too～ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「～て」 4. Anything、 Anyone、 Anytime、 Anywhere、 Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、 required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、 Even though ＊Review のに、が／けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V 2. V ながら V：Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、 possession、 own ～がある 4. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない／なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくてもいい 6. By (time)：までに ／ Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	1. When～: ～とき～ 2. Noun が要る・役に立つ

	3. Comparative constructions　比較　　A は B より・A のほうが・A ほど・～のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation　せっかく　ちゃんと　一応
5	1. Try doing something and see: ～てみる 2. Giving and Receiving Something　さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers　名詞修飾 4. Mimetic words ⑧　Nature
6	1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs　自動詞・他動詞 2. V て ある 3. Intransitive V ている　vs　Transitive V てある 4. Mimetic words⑨：Sleeping 5. Compound Verbs ①　Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	1. V て おく 2. ～が V　　みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors、 some acts)　～てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: V てほしい・もらいたい・いただきたい 5. ～が・けど（けれども） 6. Imitative words：Caught a Cold ?
8	1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going　～に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs　Vにくい／Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ②　Vあう・Vかける
9	1. 伝聞　Hearsay、 Conveying information getting from another person、 media ～そうだ・ということだ・とのことだ 2. V てしまう 3. Review: V ている、V てある、V てみる、V おく、V てしまう 4. [Question words] か / ～かどうか 5. V1 ないで V2　without doing V1、 do V2 6. Imitative words：Hitting、 Breaking 7. Compound Verbs ③Vなおす・Vかえす
10	1. 推量の表現 ①Expressing Speaker's Guess、 Conjecture　①　そうだ 2. Decisions: ～ことにする・～ことになる 3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている 4. 比ゆの表現　Expressing Resemblance、 Figurative expressions　～よう

	だ・みたいだ 5. V-て　いく・くる　do V and come/go 6. Imitative words：Animals、 Birds

授業の方法

J2 は週 5 日のコースであり、文法 1、聴解・会話、文法 2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法 2：文法 1 で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

＜春学期＞

文法 1：学期初めから最後まで学習者の日本語学習に対する意欲、姿勢が伺え、学期を通じて個々の成長が伺えた。学習者各々が個々のペースで進み、かつ自発的に積極的に参加しており、疑問点などを都度教師に質問したり、学習者同士で意見交換をしたりするなどをして新しい表現や文型などの理解を深めていた。日毎の授業での様子や期末試験などでそれぞれの成果が見られた。課題としては学習者が理解しにくい、習得しにくい文型などをどのように効率的にかつ効果的に導入し習得に繋げていくのかである。また学習者主導のアプローチをもっと増やしてみることもその一つの方法であったかと感じている。総括して、学習者一人一人が日本語学習に向かい、かつ学習者同志も協力して学びあっているクラスであった。

文法 2：クラスの雰囲気は和やかで誰でも自由に質問、発言ができる教室環境であった。最後までモチベーションを落とすことなく、むしろ先に進めば進むほど学生のモチベーションは向上していく傾向にあり、授業の外でも一緒に勉強をしている様子だった。宿題の提出率はほぼ完璧で、クイズの準備もしっかりしてきている学生がほとんどだ

った。わからないところを放置せず、常に理解しようという姿勢が強いクラスだったため、着実に既習項目を積み上げることができた。授業では基本的に短文作成や練習問題等を机間指導で行い、少人数のクラスだったこともあり、学生がどこで躓いているのか把握し、その点をしっかりフォローすることができた。クイズの結果で全体の点数が下がってしまっている傾向があるので、欠席、遅刻が成績に大きく影響すること、また、しっかりクイズの準備をしてくることを学生に最初から理解してもらうことを今後の課題とする。

聴解・会話：人数もちょうどよく、学力も近い学生が多かったので、非常にやりやすいクラスだった。わからない時は学生同士で助け合うような雰囲気がいつもあった。文法項目を使った会話や聴解を扱ったが、文法項目の復習に時間をかけすぎてしまい、思ったように聴解が進められないこともあった。聴解のいろいろな形態に慣れることができるように、もう少し聴解に時間をかけていきたいと思う。

読解・作文：7 名という少人数のクラスであり、かつ全員が日本語学習に意欲的に取り組む学生であった。学生たち同士も授業後に自分たちで勉強会を開くほど熱心で、授業中も教員に対して多くの質問がなされたり、学生同士でも理解を確認するためにディスカッションがなされたりする様子が見られた。読解に関しては一字一句しっかり正確に読みたいタイプの学生と、大意をおおまかに把握・理解したいタイプの学生に分かれていた。互いの読み方（ストラテジー）を知ることで、読解に対する向き合い方も変わり、非常に良い相乗効果があったと思われる。ただし、きっちり精読したいタイプの学生は授業中の読解教材の理解は正確だが、試験で時間内に大意を把握して解答するのは苦手であり、そのような読解ストラテジーについてはもう少し授業で取り扱ってもよかったのかもしれない。作文に関しては、全員が教科書のモデル文を参考に、自分のオリジナリティを含めつつ文章表現ができていた。上述の正確に読みたいタイプの学生は作文の文法・語彙・表記、構成、内容も正確かつ適切であったが、おおまかに読むタイプの学生は作文では正確性に欠けるという傾向が見られた。少人数であったため、個別のフィードバックには時間がかけられたが、もう少し互いの作文を読んでコメントをし合うピア活動を行うことで、互いに気付きが促されていたのではないかと思われる。今後の課題としたい。

総合スキル：このクラスでは、日本語の運用能力の向上を目標とし、既習文法項目を使用したアクティビティーを中心に、ロールプレイ、スピーチ、日本人学生との交流活動を実施した。毎回、前の週に勉強した文法項目を取り入れて場面設定を行い、ペアあるいはグループでロールプレイを含めたアクティビティーを行った。授業中は文法だけでなく、既習語彙をできるだけ多く使用した運用能力を向上させるように工夫した。学生たちは理解度が非常に高く、勉強した文法をしっかり理解し、活動中は高い運用能力をみせていた。少人数のクラスだったが、学生同士非常に仲が良く、学び合える関係を築けていたので、分からないことがある際にはお互い助け合いながら活動を続

けていた。毎週のように場面設定をした会話練習を続けていたため、はじめは緊張していた学生や、ペアワーク、グループワークなどが得意ではない学生も少しずつ楽しんで会話練習をするようになっていた。学期中に２回、日本人学生のボランティアを招いて一緒に活動を行った。学生たちはビジターセッション中、日本人ボランティアとスピーチと質疑応答、自由会話、クイズなど様々な活動を通して日本語の運用能力を高めた。スピーチに関しては、原稿を完璧に覚えてスピーチをした学生もいた。期末試験のインタビュー試験は、助詞や文法の細かいミスはあるものの、問題を正確に理解して回答していた。しかし、事前の練習が少ないこともあり、深みのない解答をする学生もいた。今後の課題として、学期を通してあまり発音指導などは行えなかったため、シャドーイングなども取り入れてみたい。さらに様々な場面に対応できるロールプレイ数を増やし、質問に対応できる瞬発力をつける練習も授業内に組み込んでいきたいと考えている。

＜秋学期＞

文法 1： 受講者 16 名のうち 2 名が途中から授業不参加となったが、それ以外の学生は積極的に授業に参加していた。その日に学習した内容を全て理解しようと努め、わからないことがあれば納得するまで質問していた。また、学習した内容をすぐに使おうとする姿勢をみせる学生もおり、彼らの真面目さが窺えた。また、教師が一方的に教えるのではなく、ペア活動を取り入れた。その結果、話し合うことで自分たちの理解度を確かめ合い、また、教え合うなどの行動が見られた。課題としては、学生がより理解しやすいように学習項目の提示順を考えること、区別のしにくい文法項目の違いを分かりやすく説明するための方法を考えることである。上述の課題を解決し、授業内で学生の能力をさらに引き出していけるような授業構築を試みたい。

文法 2：授業では基本的に短文作成や練習問題などを机間指導で行い、学生がどこで躓いているのか把握し、その点をしっかりフォローすることができた。出席率が高く、宿題の提出率もほぼ完璧で、クイズへの取り組みも毎回きちんと準備している学生がほとんどだった。出席率、宿題の提出率、クイズと毎日コツコツ続けることがこの授業の成功の秘訣なので、そこをほぼ全員クリアできていたのは素晴らしい。レベル差はあれど、どの学生も確実に成長を感じることができた。理解力は素晴らしいクラスだったが、その分、初歩的な活用や助詞がしっかり定着しないまま学習が進んでしまっているのが中盤辺りから目立ちはじめた。今後なるべく授業の序盤で正しい活用を定着させておくことが課題である。

聴解・会話：もともとレベル差の大きいクラスであったため、聴解能力にも差が見られた。学期の初期は比較的やさしめの聴解問題を使用して耳を慣れさせるところから始めた。徐々に難易度の高い聴解問題を扱い、期末試験前に集中的に練習を行ったため、試験の結果は比較的よかったものの、最後まで聴解に対する苦手意識のある学生は伸

び悩んだ。前日の文法導入の続きや会話練習の時間もあることから、なかなか聴解の練習を十分に取り扱うことは難しいが、量の確保は今後も課題としたい。会話に関しては、クラス全員が「話す」ことが好きであり、学生同士の会話練習はもちろん、ボランティア学生を呼んだ授業での会話練習では学んだ文法・語彙を駆使して意欲的に口頭表現に取り組む様子が見られた。話す力は学期を通して全体的に大きく向上したと思われる。

読解・作文：15 名の履修者の中ではレベル差があり、授業を進めて行くペースとクラス内でのアクティビティが難しかった一方、履修者はお互いを尊重し助け合っていて、高めあうことができていた。作文に関しては、全員自分が書きたいことを一生懸命表現しようとする努力が見られた。学期前半では、構成の仕方や文法・表現に課題が見られたが、授業中のフィードバックや作文課題を何度もこなしていく中で、各々の学生の書く質が大きく向上したと思う。課題としては、生成 AI（授業では禁じているが）や様々な辞書、日本人の友達など、あらゆるリソースに恵まれている今の学生が、最終的に自力で書いて行く力を養うためのやり方を常に考えなければならないと考えられる。例えば、作文課題で自分が表現したいことを書くために何かのツールを使わなければならない場合、まずは何も見ずに自分で書き、そのあとどこをどんなふうに何を使って直したかというのを示し、ドラフトを２バージョン提出すると、学生自身も伸ばさなければいけない力に気が付くチャンスになるかもしれない。読解については、J2 で新しく習った文法が出てきた場合には、文章の中での使われ方を確認し、文法の理解を深めることに努めた。また、語彙や表現でわからないことがあっても読み進めることや、試験での問いへの答え方なども注意しながら読む練習をしていたが、試験ではそれが実践できなかった学生もいた。今回のようにレベル差が大きいクラスでは、それぞれの学生に対してアドバイスをすることが求められると思われる。

総合スキル：この授業では、学習した文法項目を使い、ゲーム、ロールプレイ、インタビュー、ディスカッション等、主に口頭でのアウトプットを目的とした活動を実施した。今期、３回のビジターセッションを行い、ボランティア学生と日本語で一緒にゲームをしたり、お互いの国の文化や習慣を比較した。参加してくれたボランティア学生が素晴らしく本当に楽しそうに学生たちと様々な活動に取り組んでくれた。普段真面目で静かな学生が多いクラスだったが、活動では誰も物怖じすることなく自分を表現し、とにかく笑いの絶えない時間を多く過ごすことができた。今後の課題としては、アウトプットだけでなく、学生同士で何かの課題に取り組む共同作業的活動を取り入れて、実践的な文法の使い方や表現方法を学ぶ機会を提供したい。それによって、学生たちがより自信を持って日本語を使えるようになることを目指す。また、ボランティア学生との交流を通じて、相互理解や国際交流の意識を高めることも大切なので、今後もこのような活動を継続していきたい。

2023 年度　J2S　授業記録

コースの概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞ 小澤雅、任ジェヒ、末松史
　　＜秋学期＞ 瀧澤あゆみ、森井あずさ、佐々木瑛代

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）
履修者数：春学期 9 名、秋学期 6 名
使用教材：独自教材

コースの目標

非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本的活用、語彙 500）を身につけている者を対象とする。J2S コース全体の目標は,接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1,000 に増やすことである。

文型リスト

J2S で扱った文法項目は J2 と同様であるので、省略する。

授業の方法

週 3 コマを 14 週、計 42 コマで行った。語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。具体的には、1 課～10 課まで、各課を 3～4 コマで学習するというペースで進め、文法を 2～3 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。読解と作文は、隔週で行い、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

＜春学期＞

優秀かつ積極的な学生が多かったため、授業の進行が非常にスムーズで、教師と学生、また学生同士のインターアクションが活発に起こるクラスであった。そのため、学生の理解が足りていないところが把握しやすく、どこに重点をおいて授業を進めるべきかを考えるにあたってひとつの手がかりとなった。また、学生同士で文法項目などを教え合う様子も時々見られ、協力して理解を深めようとしていた。英語に頼らず、日本語でコミュニケーション

をとろうと試みる学生がほとんどで、とくに前期から在籍していた学生の日本語会話力が非常に上達した。

今後の課題として、運用練習を増やすことが挙げられる。文法の理解度、定着度も高かったので、それをもう少し作文や会話などに活かすことができるとよかった。また、リーディングの時間は、読み物の意味を確認したり問題の答え合わせをしたりするのに時間がかかってしまい、面白いトピックを扱っていてもディスカッションにあまり時間が取れなかった。今後、読み物の内容把握の質問は宿題に回す量を増やして、ディスカッションの時間を増やすようにしたい。

後半になってから、遅刻や課題の遅れ提出の回数が増えた学生がいた。学習意欲の維持と促進のためには、どのような授業活動を行う必要があり、どのようなサポートと指示が求められるか、今後さらに工夫を重ねていく必要がある。

＜秋学期＞

習った日本語を使ってコミュニケーションを取りたいという意欲があり、積極的に話す学生が多く、この半年で実力も伸びたのではないかと思う。授業では新しい文型を使った応用会話なども取り入れることができた。他の文型との比較をする場面では、日本語でそれぞれの意味の違いを説明しようという積極的な姿勢が見られた。

一方で、基礎的な活用ルールが弱い学生が多く、J2S の文型とともに、否定形や過去形の作り方など基本となる部分もフィードバックすることが多かった。

クラス内の日本語レベルの差がとても大きかったため、応用会話をしている間に、語彙や新しい文型の説明を再度しなければいけない場面もあった。プリントや活動を作成する際には、簡単なものと少し難しいものの両方を入れ、早く終わった学生が難しいものに進めるように工夫できたのは良かった。

学期最初に単語の漢字での書き方を聞く学生が多く、プリントは漢字とふりがなを使って作成してほしいという要望もあった。ただし、授業中での文作成や宿題などで、漢字が間違っていることも多かったため、その都度フィードバックしていく必要があるだろう。

読解では、1 人できちんと読む時間、解答する時間をとった後、ペア活動を行うようにした。解答の確認だけでなく、音読練習もペアで行い、1 人 1 人が読解時に発話できる機会を増やすようにした。解答確認の際、ペアと答えが違う場合、その理由をできる限り日本語を使って話すように声かけし、どうしても難しい言い回しなどは英語を使わせ、2 人の意見(解答)がまとまるようにした。

分からない言葉、新しい言葉も想像しながら読む練習もした。だが、レベルもまだ低いこともあり、またクラスの中のレベル差もあり、1 人で読むのに苦労している学生もいた。そこで語彙リストを配布し、意味を確認しながら読めるように工夫した。語彙リストがあると自分で調べなくなってしまうかもしれないが、正しい意味を提示することもできるので、宿題になる部分は必ず自分で読まなくてはならず、精読時に正しい語彙の意味が分かること

は、学生にとって良いことかもしれない。

作文では、授業で習った文法をたくさん使うように指示し、学生も新しい文法や語彙、覚えた漢字を使って文作成をしている様子が見られた。また回を重ねるごとに、書ける量も増えていった。授業内でも課題提出時にも、分量の指定があったことや、書く分量に慣れてきたということも 1 つの理由だと思うが、授業内でのアイデア共有、意見交換の時間を十分に持てたことも大きかった。トピックについて自分の意見を考え、日本語でなんと言えばいいか、そしてグループで共有し合い、最後にクラス全体でも共有する時間を持った。

日本語を使う時間があまりないという学生からの声もあり、会話ではないアウトプットの時間(読解や作文)に、学生の要望がクラスに少しでも反映できるように工夫してみた。しかし分からないとすぐ英語になってしまう学生もいたので、ペアの組み方、グループの分け方も工夫が必要だと感じた。またもう少し辛抱強く「日本語でなんと言えばいいですか？」などと声かけし、1 人 1 人の発話を気にかけながらサポートしていければよかった。

2023 年度　J3　授業記録

コースの概要

J3 は日本語の基礎を習得している者(1,000 語程度の語彙及び初級前半の文法等)、日常生活の基本的活動(買い物や依頼など)が日本語でできる者を対象とした初級後半のコースである。週 5 日授業が展開され、スキル別(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)に学習を行う。

担当者名：＜春学期＞ 保坂明香（文法）、東平福美（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、
保坂明香（作文）、黄慧（総合スキル）
＜秋学期＞ 保坂明香（文法）、東平福美（聴解会話）、小林千種（読解）、
黄慧（作文）、栃木亜寿香（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）
受講者数：春学期 18 名、秋学期 16 名
使用教材：独自教材

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解・会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙

や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review：Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review：Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようとする 3. V-ようとしたができなかった、V-ようとしてもできない 4. Fraction　三分の一、五分の一 5. Review：条件 Conditional
5	1. 推量の表現　Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review：Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ～の多く 4. ～以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて 6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とっくに
6	1. 受身 Passive Verbs

	2. Direct Passive Sentences 直接受身 3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形（Passive Sentences）and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ～によって 6. Sentence ending particles 終助詞
7	1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない 2. Imperative form　Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative：～ように　言う／伝える／頼む 4. Review：Expression for Cause、 Reason 5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて
8	1. 使役：Causative Sentences 2. Causative Verbs　VS V-てもらう／くれる 3. ～のは～です（emphasizing）
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て　もらう／くれる／あげる 4. ～ことに　one's feeling、 emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review：受身、使役、使役受身、Vーてもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語（Honorific、humble expressions）

授業の方法

J3 は週 5 日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1000 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

＜春学期＞

文法：今学期の J3 は、学期を通じて欠席と遅刻が非常に多いクラスであった。学習に対する意欲が出席率の低さに関わっていたと思われるが、体調不良や感染症の罹患による欠席も少なくなかった。ただ、授業活動に対しては積極的に取り組み、課題の提出率も低くなかったことから、日本語を学ぶ姿勢はあるものの意欲の継続が困難だったことが推測される。一方で、一部の学生は大変熱心に活動や課題に取り組み、一学期間で日本語能力を大幅に向上させていた。

学期開始の時点で基礎的な文法の定着が見られない学生が複数名いたため、復習を取り入れながら新規の学習項目の導入を行った。導入後の練習は、変換練習、活用練習、新出表現で文を作る練習などの基礎に終始したが、それでも授業時間内に導入を終えられないことがあった。

このように基礎を重視し、文法理解が進むことを優先して授業を行ったが、クイズやテストから理解の不十分さや定着が見られない様子が確認されたため、学期後半は聴解会話ならびに総合スキルのクラスと連携をし、文法項目の復習にクラス時間を割いていただくよう調整依頼をした。

期末テストの結果を振り返ると、J3 のコース目標を十分に到達できなかった学生もおり、調整の効果は限定的だったかもしれない。しかし、担当教員間で連携を図り、情報を共有し、学生の学びに合わせ調整をすることは重要であると考える。今後はより早期の対応を検討したい。

聴解・会話： 学期を通して、授業前半で文法の復習を行い、後半で聴解会話のタスクを行った。特に学期後半は難しい文法項目が増えるため、文法の定着を念頭に置いて授業を展開したせいか、聴解会話でも教師主導のパターンプラクティスが多くなった。型にはまった学習法が好きな学生にとっては良かったかもしれないが、もう少しフリートークをさせた方が日本語の上達につながると考える。今後はフリートークの時間を設けて、もっと学生同士で学び合いをさせていきたい。また、全体的にクイズの出来が悪く、新出語彙を覚えきれていない学生も多く見られたので、語彙の予習復習も課題である。

読解： J3 読解は、①既習の文法項目がまとまった文章の中でどのような用いられ方をしているか確認しながら読むこと、②接続詞や指示語、省略された部分を読み取ること、③問いに対して正確に答えているかを意識することなどを目標に講義を進めた。

受講者は 18 名だったが、今期はいろいろな病気が流行ったせいか、体調不良による欠席者が毎回いた。全体的に学習意欲は見られたものの、複数回休む学生とそうではない学生との間に当然ながら差が生まれ、その差が埋まらないまま終わりを迎えたような印象である。このレベルでは、関連するトピックや文章の内容についてディスカ

ッションをすることが大切だと思われるが、結果的に授業開始当初の方がさかんに意見を交換し合っていて、最後の方はよく話す学生が決まってしまっていたような状況であった。

今後の課題としては、レベル差に対応するための工夫をすることである。今期は途中から少し問いを変えて提示してみたが、今回のようなクラスの場合には、同じ意味でも難易度を変えた問いを複数提示し、学生が自分のレベルにあった問いを選択して答えたほうがいいと思われる。次回以降、この点を考えて講義を組み立てたい。

作文：他の J3 クラスと同様に欠席と遅刻が多く、課題の提出率も低かった。学期前半は教科書の流れに沿い、作文作成前の準備として、文章例の読解と教科書の QA の解答をし、テーマについてのブレインストーミングをクラスで行った。そして、作文は宿題としたが、自分の力で生き生きと文章を書く学生がいる一方で、文章翻訳ソフトの使用が疑われる作文も一部見られた。このため、フィードバックの際に、自分の表現と語彙で書くことの重要性を伝えたが、中間テストの作文から通常の成果物と異なる印象を受け、また、これまで与えてきたフィードバックが生かされていない様子も見られた。このようなことから、学期後半は授業内で作文を書く形式に切り替え、文章例の読解と QA は宿題として課すこととした。そして、J3 の到達目標の達成を念頭に置き、試験時間内の目標字数を設定し、到達目標を意識させるように心がけた。他方、時間を使ってよく考えながら作文を書きたいと考える学生がいる可能性も考慮し、成績には含まれないオプショナルの課題を週ごとに与えた。また、連動している J3S コースの教員と相談し、必要に応じ書き直しの活動を取り入れることもあった。期末テストの結果を概観すると、字数については概ね目標に到達したようであるが、文法、表現、語彙ならびに表記の正確性の面においては、課題が残る。今後も自分のことばで書くことの意義や、作文科目が一対一のフィードバックを受けられる貴重な機会であることを説明し、自主的に書く意欲がもてるよう支援したい。

総合スキル： このクラスでは、日本語の運用能力の向上を目標とし、既習文法項目を使用したアクティビティーを中心に、ロールプレイ、スピーチ、日本人学生との交流活動を実施した。

毎回、前の週に勉強した文法項目を活用して場面設定を行い、ペアあるいはグループでロールプレイを含めたアクティビティーを行った。場面設定を明確に示すことで、学習到達目標に向けて練習することができ、日本語での会話が上達している実感を持つことができた。ビジターセッションでは会話の活動に加えて、スピーチを取り入れた。さらに、自分の国の有名な建物やイベントなどを紹介する活動も行ったが、学習者とボランティアの学生は質疑応答に積極的に参加していた。ボランティアの学生たちとの会話セッションを設けたことで、学習者自身も自分の得意分野と不得意な部分を知ることができ、日本語学習のモチベーションの向上に繋がったと思われる。

一方で、毎週勉強する文型や語彙が多いため、学習内容を 100%消化しきれていない

ときもあると感じた。学期後半の受身、使役、使役受身の部分においては、文法ポイントは理解できていても、運用する際に混乱する学生もいた。今後の課題としては、正確さを強化することおよび発話量を増やすことだと考えている。学んだ文法や語彙を理解するだけでなく、表現の運用を促せる活動内容を考えることも必要だと思われる。今学期は特に自律的に学習を進めている学生とそうでない学生の差が見られた。今後は一つ一つの活動をしっかりこなすとともに、自律的に学習することができる学生たちを育てるための工夫も課題になってくると思われる。

＜秋学期＞

文法： 履修者 16 名のクラスで、全体的に出席率および課題の提出率が高く、授業に積極的に取り組んでいた。クラスでは発言や質問が多く、授業活動は活発に行われた。また、学生同士の関係も良く、良好な雰囲気で互いに助け合いながら学んでいた。一方、一部の学生に体調不良や意欲の低下が見られ、日本語の習得や最終成績に影響を与える結果となった。

中間テストでは、概念の理解はしているものの、活用や接続についての理解が不十分であることが解答からうかがえた。このため、予定よりもフィードバックの時間を多めに取り入れ、他科目の教員とも連携し、正確性の強化を図った。今後は中間後の復習に時間を多く取るとともに、単元ごとにも復習を取り入れていきたい

先述したように、今学期の J3 の学生にとって、活用や接続を正確に理解し産出できるようになることは課題であった。このため、担当教員間で問題を共有し、文法以外のクラスでも活用表を用いた練習を取り入れるというような調整をしてもらった。学生達も中間テストの結果を踏まえて意識的に学んでいたように思うが、期末テストを振り返ると、ある程度の改善は見られたものの、依然課題として残る。初級文法の正確な理解は、今後積み上げていくうえで肝要であり、不十分な理解は学びを阻む要因となる。J3 コースには運用力や応用力を身につける授業時間が設定されているが、その学期の学生の必要に応じ基礎的な練習をスパイラル的に取り入れていくとよい。今後は新規項目の学習とともに、学生の様子を見ながら、適宜基礎力の定着のための調整を試みたい。

聴解・会話：今学期の授業は毎度最初にクイズの実施、次に宿題の解説をしつつ文法の復習、続いてフリートークを交えた会話練習、最後に聴解練習という流れで行った。盛り沢山の内容ではあったが、学生は皆積極的に参加しており、全体的に非常によく頑張っていたと思う。しかし、学生からの質問も多く、それに答えるために時間を割いた結果、スクリプトを見ながら丁寧に聞き取る練習を省いてしまう日が多かった。よって、今後はそのようなことがないように時間配分に注意しなければならない。また、出席率が低い学生の対応についても改善が必要であり、他クラスの教師と情報交換をより丁寧に行うべきだと考える。

読解：読解は、漢字圏と非漢字圏の学生とでスピードが異なったため、個別で読み進めることが多かった。本文を早く読み終えた学生は他の学生をよく助けておりピアで学ぶことができた。ただ欠席が目立ち他の学生と差がついてしまった学生の中には授業をプレッシャーに感じる学生がいた。また、宿題をしない、忘れてしまう学生も数名いたため、今後は早い段階からそのような学生には個別に対応していきたい。

作文：作文の構成に沿って、学んだ文法項目や語彙を使用し、各課で課題となっているトピックについて 1000 字ほどの作文が書けるようになった。また、自分の考えを明確に言葉にしていくスキルも向上したように思われる。グループワークを取り入れ、お互いのミスを確認し、直し方を話し合うようにした結果、回を重ねるたびに、学生たちが同じ誤用をしなくなっていた。添削とフィードバックを通じて、自分の誤りを客観視できるようになった。16 人のクラスであったが、皆まじめで明るく、グループ活動も活発に行われた。戸惑っている学生がいる際にはお互い助け合いながら、励まし合う場面も見られた。

課題としては以下のような点があげられる。1)教科書の文章例に沿って構成を確認してから、アウトラインを書く順に進めていたが、文章例を理解するのに時間がかかった。今後は文章例を有効に使うための工夫が必要である。2)書く前の話し合いやフィードバックの際には協働学習を行ったが、クラスメイトの作文を読み合い、お互い学び合うという活動を行ったのは 1 度のみであった。今後は学び合いを更に取り入れる必要があると思われる。3)学期を通して宿題の重要性を訴えてきたが、一部の学生に宿題の未提出や提出遅れが見られた。今後は、このような学生への声掛けに工夫をする必要があると思われる。

総合スキル：授業では、文法で扱った文型や語彙を用いた日本語の運用能力の向上を目指した。授業の前半は文法の復習を行い、後半はロールプレイやタスクを行った。

ロールプレイは、なるべく大学生活に即した場面を設定した。またペアワークでお互いの情報差を既習文型を用いて得る練習をした。その他の活動として日本語スピーカーのゲストを迎えてスピーチ発表し、トピックについて話すやりとりの活動を 2 回取り入れた。その結果、習った文型を用いた日本語の運用能力の向上が全体的に見られた。一方課題として、タスク遂行の為、既習文型を用いずに日本語を運用する学生が見られたことが挙げられる。これは最終インタビューにおいても見られた。現実の言語活動では当然の現象ではあるが、学生にも授業の目的を常に意識させると共に、タスクを与える側も使用場面をより精査する必要があると考えられる。

2023 年度　J3S　授業記録

コースの概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、

それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。コースの詳細は、以下の通りである

担当者名：＜春学期＞ 小松満帆、佐々木瑛代、任ジェヒ
＜秋学期＞ 小松満帆、佐々木瑛代、保坂明香

授業コマ数：週 3 コマ（文法、運用練習、読解・作文）
受講者数：春学期 20 名、秋学期 5 名
使用教材：独自教材

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。
運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。
読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

J3S は週 3 日のコースであり、J3 で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J3S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、4 コマで 1 課の場合は（9 課以降）、文法の時間を 2 コマに増やした。

1. 文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを中心とした練習を行った。
2. 運用練習：文法で扱った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。そ

の際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

3. 読解・作文：読解では、様々な長さやジャンルの文章を読み、内容理解のほか、自分の意見を述べ合う練習を行った。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1000 字程度の作文を書く練習を行った。また、2 課に 1 度のペースで漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

＜春学期＞

学期開始時から、例年の J3S よりもレベルが高めの学生が多く、そのため、意欲の高い学生が複数見られた。その学生たちにはチャレンジングな内容をさせるよう努めた。普段から、教師と学生、また学生同士のインターアクションが活発に起こるクラスであったため、２回のビジターセッションでは学生ボランティアと積極的に日本語で話す姿が見られた。また、わからない点などをすぐに質問して確認しようとする前向きな姿勢の学生が多く、学生の理解が足りていないところが把握しやすく、どこに重点をおいて授業を進めるべきかを考えるにあたってひとつの手がかりとなった。

一方で、日本語力の自己評価が高く、難しいことにチャレンジしなかったり、知っている語彙や表現だけを使い、新しい知識を身に付けようという姿勢の見られない学生や、わからないまま諦めてしまう学生がいた点は残念であった。今後は、宿題や短文作成等で理解度を確認しながら、可能であれば他の曜日へフィードバックの引き継ぎも積極的に行っても良いかもしれない。また、学期後半になってから欠席や課題の未提出の回数が増えた学生もおり、クラス全体の士気に影響が出ることもあった。学習意欲の維持と促進のためには、どのような授業活動を行う必要があり、どのようなサポートと指示が求められるか、今後さらに工夫を重ねていく必要がある。

＜秋学期＞

5 名の学生が履修登録をし、1 名は学生の自己都合により学期途中で出席取りやめとなった。そのため、実質 4 名のクラスとなったが、少人数のクラスであったからこそ、学生が個性を発揮し、助け合いながら、学ぶことができていたようだ。また、教員側も学生一人ひとりの理解度を授業中に随時確認しながら、授業を進めることができた。それぞれの学生ができていない点を次の曜日に引き継ぐこともでき、他の曜日の授業報告を参考に復習プリント等を作成できた点もよかった点である。

出席率・宿題提出率はともに高かったものの、宿題のフィードバックを読んでいない学生もおり、同じ間違いを繰り返す様子が見られた。特に、作文では、活用や助詞、語彙使用の不正確さや内容面における不十分さが見られたため、成果物にはコメントを記述して改善に役立てるように伝えたが、その後の見直しが十分になされていないことがあった。記述コメントの伝わりにくさもあるため、今後は口頭での説明を増やし、確実にフィードバックを

伝えていく必要がある。また、自ら復習したり質問したりする姿勢を身につけてもらうために、授業中にフィードバックを確認する時間を設けたり、同じ問題や課題のリライトなどの活動もさらに取り入れていきたい。
読解では、黙読と解答に要する時間、理解度に学生間で差が見られた。授業活動や課題でフィードバックを実施し、読解力向上を図ったが、期末テストの結果を振り返ると、十分に差が埋められたとは言えない。誤りの指摘だけでなく、読む力を育む授業内容を検討していきたい。

2023 年度　J4　授業記録

コースの概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の 4 クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせて使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

＜J4 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞ 保坂明香
　　＜秋学期＞ 井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ
受講者数：春学期 20 名（PEACE6 名、他 14 名）、秋学期 13 名
使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	Part1	Part2
1	・受身 ・自発	・～は～つつある ・～は～（で／に）さえ～ ・Ｖさえすれば／Ａさえあ（い）れば／Ｎさえ～ば～ ・～とすれば、～（こと）になる

		・（たとえ／仮に／もし）～としても～
2	・使役 ・使役受身	・～にもまして～ ・（たとえ／仮に）～にしても～ ・いくら～にしても～
3	・尊敬語	・（Ｖた／Ａ／Ｎの）まま、～ ・Ｖつつ～ ・～はＶなり～
4	・謙譲語	・ＶことにしているＶことになっている ・～は～ことから～ ・～は～こととなると～ ・～は～ことなく～
5	・～ようにＶ ・～ようにする ・～ようになっている	・～して、（考えさ／思い知ら）せられた ・（無生物主語）が～を～させる ・～は～だけではなく、～の問題だ
6	・Ｖたばかり／Ｖばかり／Ｖてばかりいる ・Ｎばかり／Ａばかり ・Number ばかり	・～からといって、～が必ずしも～わけではない ・～ずに～ ・～のか（どうか）については～
7	・～が限られている／～を～に限っている ・限りがある／ない ・Ｖ（ない）限り／Ｎの限り ・Ｖ（た）限りでは／Ｎの限りでは	・～原因は～ことにある／～のは～からだ ・～と～では～が異なるので～ ・～や～は～のだから、たとえ～ても～ことはない ～や～は～のだから、もし～たら～
	・Ｎに限って（はずがない） ・Ｎに限り ・Ｖ（ない）／Ｎに限る ・Ｎに限らず	・～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ・（無生物主語）が～に～を生じさせる ・～たり～たりするだけでは～ ・～は～が～であることを利用して～
8	・Ｖよう（か） ・Ｖようと思う／Ｖようとする ・Ｖようがない ・Ｖようとしている ・Ｖようとしない	・～時に、～と／ても～ ・私は～て、～ことに気が付いた ・～（こと）は～（のだ）から、もし～なら～
9	・Ｎ（clause）というＮ ・ＮというＮ／Number というNumber	・～すると、～は～が～は～ ・～する時に重要なことは、～か（どうか）ということ（よりは／ことではなく）、～か（どうか）という（点／こと）である ・～ものとして（しまう）

授業の方法

＜春学期＞

プレレッスンを含む全 10 課の教科書を 1 週に 1 課のペースで進めた。扱った文型表現は上記の表のとおりである。授業では教科書をスライドに提示して説明を行い、項目ごとに口頭の質疑やワークシートの空欄補充の練習を挟んだ。導入後は教科書の Comprehension Check で理解を確認し、疑問点はクラス全体で検討をした。宿題としては、教科書にある短文作成を課し、紙面と口頭の両面でフィードバックを与えた。また、中間時と学期末にテストを実施した。

＜秋学期＞

毎回、翌週扱う課のテキストを授業までに読んできてもらった。授業では、テキストとパワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習問題を行った。そして、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を宿題にした。宿題は、翌週の授業で返却し、フィードバックは、新しい課の練習問題をしてもらっている間に、個別に行った。

結果と課題

＜春学期＞

特別外国人学生 10 名、PEACE プログラムの学生 6 名、異文化コミュニケーション学部の学生 4 名で構成されたクラスである。このうち 2 名は一度も授業に出席することがなかったため、授業は実質 18 名で進められた。学期を通して欠席・遅刻が多く、課題の提出率も低かったが、一因として体調不良が挙げられる。1 名の学生は感染症の罹患により期末テストを受験することができなかった。

授業活動には自主的に取り組んでいたが、教師の説明やクラスメイトの質問を聞かずに私語をする、注意が逸れる様子も見受けられた。質問はクラスにとって非常に重要であることを強調したが、学期後半までこの傾向は継続した。このため授業やクラスメイトから得られる学びが限られていたように思う。

今学期の J4 クラスの中には初級の文法理解が十分でない学生もおり、一部の学生は日本語の説明を理解するのが困難なようであった。理解が促されるように母語に合わせて説明を工夫したが、期末テストの結果を見ると、J4 の到達目標に達成したと言えない学生もいる。先述のように、今学期は紙面と口頭の両面でフィードバックを実施したが、個別の口頭フィードバックが十分でなかったように思う。授業内の限られた時間で効果的にフィードバックをする方法を探っていきたい。また、宿題の問い方や提出の仕方にも工夫の余地がある。学生が当該の文型表現についての理解を深め身につけるために必要な授業活動や課題を検討し、実施をしていきたい。

＜秋学期＞

今学期は、特別外国人学生 12 名と、大学院生 1 名が本コースを履修した。履修学生は、課で扱う文法・文型を予習して授業に参加し、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしてい

た。また、毎回課した短文作成練習の宿題も、遅れ提出があったものの、大半の学生は、一度も欠かすことはなかった。

今学期は、クラスで扱う文法・文型が難しいと感じている学生が数名いた。学生は毎回のクラスで質問をすることで、文法・文型の意味、用法の理解に努めていた。しかし、テキストで使われている例文の語彙が難しく、一部の学生から例文の英訳を求められることもあった。理解が難しいと感じている文型については、学生にとってわかりやすく馴染みのある語彙を使った例文を提示し、文型を自分に落とし込んだ段階で練習が必要だったように思う。

このクラスでの活動は練習問題を解くことが主であるが、中間テスト後に学生ボランティアに授業に参加してもらい、日本人学生との交流の機会を設けた。実際に敬語を使用して話す練習をしたり、どのような場面で敬語を使うのかを直接ボランティアに聞いたりすることによって、敬語への理解が少し深まったようである。今後も学生の文法・文型の理解の助けとなるような活動をクラスに取り入れていきたい。

＜J4 読解＞

担当者名：＜春学期＞ 武田聡子
　　＜秋学期＞ 長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ
受講者数：春学期 16 名（PEACE5 名、他 11 名）、秋学期 9 名
使用教材：独自教材

コースの目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

＜春学期＞

オリジナル教材のプレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 を除く課では、毎週、自習の読解の予習（ワークシート）と授業で扱った読解から語彙を 5 つ選んで例文を作成して提出するという課題を出し、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。L9 と L11 は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。前週に速読の読解内容の語彙を調べておくことが宿題になっていた。すべての課でクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型を確認し、時間に余裕があるときは、例文作成も行った。毎回授業の最初に、前週の授業で扱ったリーディングで

練習した前週の語彙から 10 問、正しい語彙を選ぶという小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべてのユニットで学んだ語彙の復習と読解の復習をし、最終日は期末テストを実施した。

＜秋学期＞

オリジナル教材のプレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 を除く課では、毎週、自習の読解の予習（ワークシート）を課し、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。L9 と L11 は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。前週に速読の読解内容の語彙を調べておくことが宿題になっていた。すべての課でクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型の確認とそれらの使い方も復習した。毎回授業の最初に、前週の授業で扱ったリーディングで練習した前週の語彙から 10 問、正しい語彙を選ぶという小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべてのユニットで学んだ語彙の復習と読解の復習をし、最終日は期末テストを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

これまでにない大人数での運営であった。漢字圏の学生が大半ではあったが、数名の非漢字圏学習者が熱心に課題に取り組んでいた。特に授業中、読解の内容について積極的に質問したり、話し合いに建設的な意見を述べてくれるのは非漢字圏の学習者で、授業を盛り立ててくれた。一方、漢字圏の学習者は、読むのは早かったが、口頭能力が弱いのが気になった。正しい答えはある程度選べても、口頭での発表では意味不明になったり、こちらから指名しなければ全く発言しない学習者もいた。自動翻訳などを使った日本語であることも見受けられ、すぐに翻訳に頼る傾向があったので、しないように適宜注意した。グループ活動では、母語が異なる学習者が混ざるように工夫したが、必要以上に話さないグループが出たり、母語でのおしゃべりが目立つ様子が見受けられた。適宜注意をしたが、最後まで完全に改善されなかったのは残念であった。

＜秋学期＞

初日の授業では、語彙の習得と、着実に練習を積み重ねる重要性について丁寧に説明した。この説明が真摯に受け入れられ、多くの学習者がその大切さを理解したようだ。学習者たちは宿題やクイズにも最終週まで積極的に取り組む姿勢が目立った。参加者のほとんどが非漢字圏の学習者であったため、新しい漢字の語彙を理解するのに時間がかかっていた。この状況で読解内容を理解するのは相当難しい作業であり、特に未習の語彙が多い中、文脈から筆者の意図を読み取ることに困難を感じる学習者もいた。しかし、協力しながら周りの学習

者と助け合い、意欲的に読解練習を継続することができたため、最後まで明るい表情で授業に参加していた学習者が多かった。今後も、学習者の学習意欲を維持・向上させるための工夫をしながら、語彙の強化や文脈理解のための練習を継続することが課題となるだろう。

＜J4 作文＞

担当者名：＜春学期＞ 井上玲子
＜秋学期＞ a クラス：冨倉教子、b クラス：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
受講者数：春学期 13 名
秋学期 10 名（PEACE2 名、他 8 名）、秋学期 7 名
使用教材：独自教材

コースの目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400 字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

＜春学期＞

授業はテキストとワークシートを使用し、1 コマ 1 課のペースで進めた。授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを実施した。授業の前半は例文を用いて 2～3 の新出文型を、PPT を使いながら表現の意味、用法を全体で確認した。その後は、ペア・グループで例文の確認、練習問題をしてもらった。授業の後半は、例文を参考に、各課の作文のテーマに沿ったパラグラフ作成の準備を各自でしてもらった。作文は、翌週の授業で提出させた。添削をしたものを翌々週の授業内で個別に FB をした。

＜秋学期＞

（a クラス）

毎回授業の初めに、近況報告など 1 週間に起きたことをクラスで簡単に共有してもらった。その後毎回違った課題（全部で 11 課）に沿ったトピックについての作文活動を実施。1）まず、最初に課題トピックについてディスカッション。最初にペアで話し、それをクラスで共有。2）共有された内容をまとめたもの、ポイントとなるものなどを板書などで提示。その際、ターゲットとなる文型を使用して提示。同時にその学ぶべき文型の使い方を教材などで確認、練習。3）最終的にそれらの文型を使用した短いパラグラフ（例）をクラスで読み、内容と文型を確認する。4）その後例を参考に、同じ課題でパラグラフを書く。授業で終了しない場合は宿題とした。パラグラフは毎回、「内容」、「構成」、「正確さ」、「書

き言葉」などを中心に個人または、重要な点はクラス全体でフィードバックされた。またその課に導入された文型は翌週クイズとして短文作成にて理解度を確認。こちらも同様に理解が難しいものなどに関しては全体でフィードバックを行った。

（b クラス）

授業はテキストとワークシートを使用し、1 コマ 1 課のペースで進めた。授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを実施した。授業前半は例文を用いて 3 つの新出文型を導入し、テキストやワークシートの例文で意味、用法を確認した後、文作成を行った。後半は構成に注目してサンプル作文を読んだ後、課題に沿ったパラグラフ作成を行った。作文は宿題とし、翌週提出してもらい、教師が添削をし、コメントをつけて各自に返却した。

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1 定義	①留学とは、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶことだ。 ②私が会社を辞めたことで、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人を人間的に成長させる。
Lesson 2 意見①	①最近、日本の大学生を見ていて気づいたことがある。 ②日本の経済が悪くなったのは、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」という考え方が、子供を非行に走らせたのだろう。
Lesson 3 分類	①私は、医者という職業を目指している人は、その目的の点から 2 つのグループに分類されると思う。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれているため、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験をその後の人生に役立てたいと思う。
Lesson 4 比較・対照 ①	①日本とタイとはどちらも米を食べる国だが、日本とタイとでは、その食べ方や食べている種類が大変に異なっている。 ②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において対照的である。 ③東京の生活は便利だがストレスが多い。一方、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。
Lesson 5 根拠・判断 ①	①日本人は、間違った平等主義の方向に進もうとしている。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった経済的な問題に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性がいかせるなら、転職してもいいと思う。
Lesson 6 定義②	①運動をせずに、食べてばかりいると、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければいいと考えているとするなら、それは

	とてもいけないことだ。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かうことこそ、弁護士の役割である。
Lesson 7 比較・対照 ②	①速さという点では、飛行機は船とは比べものにならない。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活にとって、クレジットカードは必要不可欠なものである。
Lesson 8 意見②	①その会社は給料がいい。しかも、残業がほとんどない。そのため、その会社で働きたい若者は多い。 ②私は、親が子どもをしつけるのは当然だと思う。 ③両親や先生とよく相談した上で、日本への留学を決めた。
Lesson 9 換言・例示	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10 根拠・判断 ②	①私は、安定した給料よりも、むしろ自由な時間が多いほうがいい。 ②いつもは節約のために自炊しているが、時には外でおいしいものを食べることもある。 ③一度約束した以上、守らなければならない。
Lesson 11 ことわざの説明	①そのニュースは、韓国をはじめ、アメリカやヨーロッパ諸国など、世界中に伝えられた。 ②お金がなくても、あなたさえいれば、私は幸せだ。 ③日本のことわざ

結果と課題

＜春学期＞

春学期は、特別外国人学生 12 名、正規院生 1 名のクラスであった。文法の導入、練習では、意味や用法が理解できない項目については、時間を取って説明をしたが、日本語の書き言葉の表現に苦戦する学生がいた。履修学生から宿題の返却の際に、個別に FB をしてもらいたいとの要望があったため、クイズの返却と共に、1 対 1 の個別 FB の時間を設けることとした。教師との個別 FB で、文型理解の助けとなった学生がいる一方で、作文の宿題を提出しなかった学生は、授業内で個別 FB の機会がなかったことから、文型の理解が不十分な学生がいた。

課題としては、宿題の提出率が低い学生が学期の前半からいたことである。オリエンテーションで課題提出の重要性を説明したが、日々の授業では、文型導入と学生への個別 FB に時間を取っていたため、宿題未提出の学生と課題についてじっくり話す時間が取れなかった。宿題提出の周知の際に、欠席していた学生もいたことから、毎回のクラスで宿題提出を促す声掛けが必要だったかもしれない。

また、毎回宿題の個別 FB の時間を設けることで、その課で扱うテーマのパラグラフ作成をチェックする時間が十分に取れなかったことである。学生が書いた文で添削が難しい箇所については、FB の際に学生に説明をさせて、その場で添削することもあった。また、学生からの質問もあったことから、今学期は、個別 FB の時間を多めに取るようにした。FB の時間を多く取ったことで、次週の宿題についての確認ができず、特に宿題未提出が続いた学生に宿題提出を徹底させることができなかった。文型の理解は、授業内の説明だけでは不十分であること、自分自身で文型を使った文を書くことで理解に繋がっていくものであることを毎回の授業で徹底したい。

＜秋学期＞

（a クラス）

学習者は学期の当初から最後まで日本語習得に対する熱意を常に持って授業に臨んでいた。毎回の授業では、知らない言葉や表現、文法などは適時質問して明確にし、また難しい内容を表現するときも学習者は現時点での知識を使って日本語で自分の意見や考えを伝えていた。今回使用した教材ではターゲットとなる幾つかの文型に加え、ターゲット以外の新しい文型もあり、基本的な文型が定着していないと課題をこなすのは難しいところもあった。それら文型の使い方全てを正確に理解し産出するのはさらなる練習と時間が必要である。実際クイズなどでは使い方を誤って理解していることが少なくなかった。これら文型を正しく使用して課題に沿ったパラグラフを書くのは容易ではなかったと想定されるが、学習者は毎回熱心に作文活動に取り組んでいた。細かい文法や言葉の誤りは見られたもののターゲット文型の大枠は捉え、内容も独自性のあり、興味深いものを提出していた。作文活動の導入時に行われたディスカッションでも毎回様々な意見が出ており、積極的に議論が行われていた。

（b クラス）

学生の取り組み態度は概ね真面目で、クラスの雰囲気もよく、積極的に発言する学生が多かった。日本語力に差があるクラスであり、文法の導入、練習では、意味・用法は理解できるものの、短文作成を課すと、語彙の使用や活用の誤用が出てしまう学生が多かった。また、体調不良で欠席したり、精神的な問題を抱えていた学生もいたため、授業では机間巡視をしながら、個別に声がけをするように心がけた。また、成果物には、修正案やコメントをつけて返却をしたが、教師のフィードバックを活かし、改善されていった学生がいる一方で、初歩的な誤用や口語の使用が最後まで直らず、正確性に欠ける作文を書く学生がいたことは残念であった。そのため、今後は、よりよいフィードバックの方法を模索し、自分で間違いを見つけて修正する活動や、書き直しの活動などの学生主体の教室活動ができるように工夫していきたい。

＜J4 聴解・会話＞

担当者名：　＜春学期＞ 山内薫

＜秋学期＞ a クラス：嶋原耕一、b クラス：保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ 受講者数：春学期 19 名（PEACE6 名、他 13 名） 秋学期 a クラス 11 名（PEACE2 名、他 9 名）、b クラス 8 名 使用教材：鎌田修・山森理恵・金庭久美子・奥野由紀子『リアルな会話で学ぶ　にほんご初中級リスニング Alive』ジャパンタイムズ、太田淑子、柴田正子他『新・毎日の聞きとり５０日（上）』『新 毎日の聞きとり５０日（下）』凡人社、独自教材

コースの目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

スピーチ・発表（20～25 分）・会話練習（40～50 分）、聴解（25～30 分）の 3 部構成で、学生の日本語力及び理解度に応じて、時間を調整しながら実施した。スピーチにおいては、スピーチ 2 回（テーマ：最近の出来事、旅行の思い出を伝える）の後、発表（学生ボランティアへのインタビューのまとめ）を行った。スピーチ 2 回目と発表では、Forms を用いて自己・他者へのコメントを記入し、相互フィードバック活動を行った。また、会話練習は、テキスト（3 課分）に沿って進め、学生が会話文の内容や展開を理解しながら、相手の話に適切な反応ができるように練習を行った。さらに、聴解では、各週のトピックについての背景知識を確認した後、音声を複数回聞き、理解度を確認した。その上で、毎週の宿題として、音声データを聞き直し、宿題プリントの提出及び穴埋めクイズを実施した。期末テストは、聴解とロールプレイを 2 週に分け実施した。

＜秋学期＞

（a クラス）

今学期の J4-4 聴解会話クラスでは、スピーチやその準備の活動（約 20 分）、上記教材を使用した聴解および会話練習（約 40 分ずつ）を 1 コマの授業で時間調整をして行った。スピーチは学期を通して 3 回実施した。初回は 3 分間で「最近の出来事」について、2 回目は 5 分間で「旅行の思い出」について発表することを課した。3 回目は、学生が興味のあるテーマについて日本語母語話者にインタビューをし、結果を分析して報告する調査発表を行った。聴解のクラスは教材の流れに沿って授業を進めた。『日本語初中級リスニング

Alive』では主に会話の聞き取りをし、聴解後に内容の確認や話の流れの推測をしたり、適切な反応ができるように会話練習を行ったりした。また、当該課に関連のあるトピックのロールプレイも実施した。『毎日の聞きとり』ではモノローグの聞き取りをし、内容質問で理解を確認した。その際、聴解の前作業として語彙や背景知識の確認、後作業として関連話題の話し合いを取り入れることもあった。宿題はクラスで扱った音声を再度聞き、補完問題に答える内容で、翌週に同じ音声を用いて小テストを実施した。期末試験は、聴解とロールプレイを別の日に実施した。

（b クラス）

今学期の J4-4 聴解会話クラスでは、スピーチやその準備の活動（約 20 分）、教材を使用した聴解ならびに会話練習（約 40 分）を 1 コマで時間調整をして実施した。スピーチは学期を通して 3 回行い、初回は 3 分間で「最近の出来事」について、2 回目は 5 分間で「旅行の思い出」について話すことを課した。3 回目は調査発表で、学生が興味のあるテーマについて立教生にインタビューをし、結果を分析して報告する内容であった。

聴解のクラスは教材に沿って授業を進めた。『日本語初中級リスニング Alive』を使用して日常的な会話の聞き取りをし、聴解後に内容の確認や話の流れの推測、会話練習を行ったりした。また、聞いた内容に関連したテーマでロールプレイを実施した。一方、『毎日の聞きとり』ではモノローグの聞き取りをし、内容質問で理解を確認した。宿題はクラスで扱った音声を再度聞き、聞いたことを空欄に補充する内容で、翌週には同じ音声を用いて小テストを実施した。期末試験は、聴解と会話を別の日に実施した。

今学期は、期末の会話テストに調査発表の説明を取り入れた。学生には前もって調査の概要と感想を述べるように伝え、事前準備を経てから実施した。

結果と課題

＜春学期＞

学生 19 名（特別外国人学生 13 名、PEACE6 名）のクラスであった。PEACE6 名の内 1 名は新学期より連続欠席、1 名は数回の出席のみであった。学生同士の仲が大変よく、また皆、担当者へも笑顔で問いかけがあるクラスで、学生間及び担当者とのインターアクションが活発に行われた。授業態度も大変よく、活動へ真剣に取り組み、学習意欲の高さが窺えた。

期末テストにおいては、皆、一学期間の授業活動での取り組みの成果が発揮された結果となった。人数が多少多めのクラスであったため、教員からの一人ひとりへのフィードバックが十分にできない点が懸念されたが、期末テストの結果からは、各自で、教室内外で自律的に学習を進めており、新学期から飛躍的に聴解会話の能力が伸びていることが窺えた。具体的な授業活動においては、まず、インタビュー活動において、教室内での学生ボランティアへのインタビューに加え、各自で授業時間外にインタビューを行い、いずれの学生も発表

においてオリジナリティのある内容としてまとめることができていた。形式面においても、スピーチ 2 回に対する教員からのフィードバックをふり返り、ハンドジェスチャーや声の強弱などで引き付ける工夫を加えたり、聞き手の表情を確認しながら理解度に気を付けられるようになっていった。

また、聴解においては、クラス内でレベルが二段階に分かれ、宿題プリント及び穴埋めクイズの結果が顕著に分かれた。教員からフィードバックを入れ、各自で確認をするように促したが、クラス内では十分な時間が取れなかった。今後、各学生が自身の聞き取りの力について考える機会を得られるように、時間の調整を行いながら、全員あるいはペア・グループでフィードバックを行う機会も取り入れていきたい。

＜秋学期＞

（a クラス）

毎週の宿題や授業内の課題に取り組むことで、全体的に聴解能力の伸びが見られた。繰り返し同じ音声を聞いたり、日本語でよく用いられる表現を導入、練習しながら聴解問題に取り組んだりした成果だと感じた。会話能力についても、ある程度の伸びは見ることができた。特に文体の違いについて、学期の初めには教員にも「だ・である体」を使っていた学生が、コースの後半には「です・ます体」を使うようになったのは、大きな成果だと思う。また語彙や表現を習得していくことで、よりスムーズにコミュニケーションをとれるようになった学生が多かった。ただ一方で、学期の最後まで助詞やテンスといった初級文法の運用に、注意を払えない（払おうとしない）学生も数名いた。「不正確だがなんとなく話せる」という状態から抜け出すために、授業内でもっと厳しくしてもよかったかもしれない。フィードバックの与え方や、助詞への注意の向け方の指導を、担当教員の今後の課題としたい。

（b クラス）

履修者 8 名のクラスで、出席率および課題の提出率が高く、授業活動に対し積極的であった。また、発表や試験の前には入念に準備をする様子、真摯に取り組む姿勢が見られた。学生同士の良好な関係性もまた学習にポジティブな影響を与えていたように思う。発表の際はリラックスした環境の中で、発表者が自信をもってパフォーマンスをし、参加者が活発に意見を交換していた。

使用教材は概ね学生の日本語力に合う内容だったと思われるが、モノローグ用の聴解教材は、語彙が難しく内容を聞き取れないこともあった。今後、語彙力の育成も聴解会話クラスの目標の一つに位置付けてもよいかもしれない。加えて、教材の中には一部、現状にそぐわない内容や表現が含まれているため、使用教材の検討も望まれる。コースの到達目標や期末テストの評価も再度考慮し、教材の刷新と同時進行で改善を図るとよいと思う。

「授業の方法」で期末テストに新たな項目を追加したことを記述したが、この項目によって、内容を要約する力、順序立てて話す力、考えを述べる力、そして、学生の課題に対する

準備、態度を測ることができた。実施意義がある内容だったと考える。

2023 年度　「J5～J7　文法・文型」授業記録

コースの概要

J5～J7 の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週 1 回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2 レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2、N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7 のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

＜J5 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞ a クラス：小森由里　　b クラス：三浦綾乃
　　＜秋学期＞ 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 a クラス 15 名（PEACE 2 名、他 13 名）、　b クラス　16 名 　　秋学期　20 名 使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions

3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが（に）、やはり（やっぱり）、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

＜春学期＞

（a クラス）

授業は１回に１課のペースで進めた。各課で多数の文法項目・文型を扱うため、形式・意味・運用上の注意点をまとめたハンドアウトを配付して文型の意味や用法を説明し、教科書の例文を確認した。毎回、教科書の次の課のわからない言葉の意味を調べ、練習問題を予習するよう促した。また、授業で導入した文型や表現を用いて短文を作成することを宿題にした。提出された宿題シートには注意点を書いて翌週返却しフィードバックを行った。学期の半ばで中間テスト、学期末に期末テストを実施した。

（b クラス）

毎週１課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の意味用法の説明・確認と練習を行った。文型の導入においては、絵や写真を多く取り入れ、文型の意味やその文型が使用される場面をわかりやすく示すことを心がけた。また、練習も単調にならないよう、ペアワークや文型を使った会話活動などを適宜行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。また、予習としてテキストを読んでくることと、練習問題を解いてくることを指示した。

＜秋学期＞

毎回、翌週勉強する課の文法項目と説明を読んで、Comprehension check をやってくることを予習に課した。授業は１回に１課のペースで進めた。クラスではパワーポイントを使

い、文型の意味、使用場面、接続の形、注意点などを説明し、必要に応じて類似文型や表現との違いを説明した。その後、テキストの例文を読んで、意味を確認した。例文は、 テキストの他に、そのときに話題になっているできごとや学生の関心のあることなども使った文も提示した。最後に学習した文型を使って、簡単な文作成や文完成問題をした。課の中の Comprehension check や Review はグループやペアで答え合わせをした後、全体で再度確認した。毎回、学習した課の文型を使った短文作成や文完成問題を 10 程度宿題にした。翌週、複数の学生が間違った箇所等を全体にフィードバックした。個別フィードバックは宿題用紙に記入し、必要な場合は翌週個別に話し合った。

結果と課題

＜春学期＞

（a クラス）

15 名が履修したが、真面目で熱心な学生が多く、全体的に出席率も宿題の提出率も高かった。授業は、教師からの一方的な文法説明ばかりにならないよう、練習問題の答え合わせなどにできるだけピア活動を取り入れた。授業で配付したハンドアウトは効果的だったようで、ハンドアウトを見ながらピアで答えを確認し合っていた。短文作成の宿題は間違いが少なくよくできており、新しく導入した文法項目が定着していることが窺えた。中間テストは総じて高得点だったが、期末テストも同様に高得点で、新しい文法項目が十分に身についたとみられる。

今後の課題として、後れを取っている学生への対応が挙げられる。真面目に授業には取り組んでいたが、中間も期末テストも得点の低い学生が 2 名いた。中間テストの結果が芳しくなく、文法項目が十分に理解できていないことがわかってから、授業中 2 名には声掛けをするように心がけてはいたが、期末テストもあまりよい結果ではなく残念である。今後は、このような学生への具体的な対応の仕方を検討したい。

（b クラス）

熱心な学生が多く、クラスの雰囲気はとても良かった。予習として、次回勉強する課のテキストを読んでくることと、練習問題を解いてくることを学生に伝えていたのだが、大体の学生がしっかり予習をしてから授業に参加していた。そのため、授業ではペアワーク練習や練習問題の解説に比較的長く時間を取ることができた。

一方で、予習をしてこなかった学生もおり、授業についてくるのが大変そうであった。1 課で扱う文法項目が多いため、すべてを丁寧に一から説明していると、授業時間内に消化できなくなってしまう。理解と定着のための練習を授業内でしっかり行うためには、学生への予習の徹底は必須だと感じた。また、「もの・こと」「と・たら・ば」など似ている意味・用法のある文型は理解するのが難しく、意味を混同してしまったり、活用を間違えたりと、定着しなかった学生もいた。今後は、限られた授業時間内で文型の意味、活用、用法を学生に

どのように分かりやすく説明し、実際に運用できるようになるためにはどのような練習がいいのか、さらに考えていきたい。

＜秋学期＞

まじめに授業に取り組んでいた。コース前半は出席状況も宿題の提出状況も良好だったが、コースの後半は欠席・宿題の提出遅延の学生が数名いた。また、途中から出席しなくなった学生もいたのは残念だった。宿題の短文作成ではテキストの例文に似たような文を作る学生が多かったが、中には回が進むにつれて、自分の専門分野や、中級レベルの語彙や表現を用いた文を作成するようになっていった学生もいた。宿題の誤りを見ると、形式名詞や時制、アスペクトに関する誤りが散見されたので、今後はこれらを正しく理解し運用できるよう、授業を工夫したい。

＜J6 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞ 任ジェヒ
　　＜秋学期＞ 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数： 春学期 21 名、　秋学期 12 名
使用教材：独自教材

コースの目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型を理解する。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由・目的の表現」
2	「感情・心情・評価の文型」
3	「不快・非難・軽蔑の文型」
4	「判断・理性的評価を表す文型」
5	「推察・推量を表す文型」
6	「人や物の状態・性質を表す文型 1」
7	「人や物の状態・性質を表す文型 2」
8	「義務・当然を表す文型」
9	「その他の文型 1」
10	「その他の文型 2」

授業の方法

＜春学期＞

授業は毎週１課のペースで進めた。文法・文型の意味や接続、例文を学生とやり取りを行いながら確認した後、短文作成やクイズなどの活動を行った。作成された短文の確認やクイズの答え合わせなどはペアまたはグループで行い、学生同士が学び合える場も設けた。ペアやグループで出た疑問点などは最後に全体で共有し、確認を行った。毎回の課題は、その日に学習した文法・文型項目を使った短文作成を行うことで、ブラックボードに提出してもらった。フィードバックは基本的に翌週に個別に行ったが、共通してみられた誤用は全体で確認した。

＜秋学期＞

テキストに沿って文法項目を取り扱い、宿題として学習文法を用いた例文作成を課した。ただ単に教科書の例文を読み、文法説明をしていくだけだと単調になり、なかなか定着しづらい恐れもあったため、文型項目を使って話し合いをしたり、意見交換を行ったりするなどの工夫もした。

結果と課題

＜春学期＞

J6 文法は１回の授業で扱う学習項目の量が多いため、学期の後半から学習に対する意欲が低下してしまうことがあるという点が毎学期の課題として挙げられている。そのため、今学期は、学習意欲の維持につながる学習環境の提供に特に力を入れた。具体的には、１）わかりやすい例文を用いることで、学生が例文の意味やコンテクストを十分理解した上で質問できるようにすること、２）学生同士が学び合い、刺激し合う場を提供すること、３）理解度の確認につながる授業活動の多様化を試みること、の３点である。

まず、１）に関しては、すべての例文に対して具体的なコンテクストを設定し、どのような場で、どのようなコミュニケーション主体が、どのような意図で発する文なのかがわかるようにした。その結果、学期の最初は例文に書かれている漢字の難しさに注目していた学生も、コンテクストの解釈やその解釈に基づいた文法・文型の理解に注目するようになった。次に、２）と３）に関しては、テキストの練習問題だけでなく、短文作成、正誤問題、Kahoot を用いたクイズなどを実施し、学生同士が文法・文型の難易度や扱う量の多さに負担を感じず、楽しく学べるように心掛けた。その結果、学期の最初はグループ活動に消極的だった一部の学生が、チームの一員として積極的に参加するようになり、学生同士が教え合い、学び合う様子も多く見られるようになった。１）から３）により、多くの学生の文法・文型と向き合う姿勢に改善がみられ、後半になってからは、教師と学生、また学生同士のインターアクションがより活発に起こるようになった。また、学習項目の多さに対する不満の声が減り、似ている文型の使い分けについて自ら意見を出すなど、発言に積極的な学生も増えた。

しかし、課題も見られた。学生の姿勢には変化がみられたものの、教師がその変化に対してコメントをしたり、励ましの言葉を伝えたりすることはできなかった。受講生の人数が多い場合は、学生一人ひとりの状況を把握することが難しいこともあるが、学生の学習意欲を高め、維持させるためには、教師が適切なタイミングで、適切に声掛けをすることは重要な課題だと思われる。学生にどのように働きかける必要があり、教師はどのような役割を果たすべきかについて、今後更に検討を行っていきたい。

＜秋学期＞

文法の理解だけでなく、産出する機会も設けたことで、学習文型に対する理解が深まったように思われる。また、毎回宿題で例文作成を行ったことで、学習者個々の理解状況なども把握できたので、細やかにフィードバックすることもできた。

今後の課題としては、数多くある中級文法を学習者がいかに理解し、定着できるかという点であると思われる。そのためにも、授業での学習はもちろんのこと、各自の予習・復習が重要であることを伝え、自律的な学習を徹底するよう周知する必要があると感じた。

＜J7 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞ 三浦綾乃
　　＜秋学期＞ 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期　13 名、　秋学期　8 名 使用教材：独自教材

コースの目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型や表現を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	Lesson 1　「ながら、まま、つつ」
2	Lesson 2　意向形を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
3	Lesson 3　「ところ」を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
4	Lesson 4　「まで」を使った表現／とりたての助詞
5	Lesson 5　「時」を表す文型 1／似ている意味の使い分け
6	Lesson 6　「時」を表す文型 2／まとまりで覚えたほうがいい表現

7	Lesson 7　「時」を表す文型 3／覚えたほうがいい表現
8	Lesson 8　「時」を表す文型 4／覚えたほうがいい表現
9	Lesson 9　複合動詞／覚えたほうがいい表現
10	Lesson 10　副詞の呼応／覚えたほうがいい表現

授業の方法

＜春学期＞

毎週 1 課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の意味用法の説明・確認と練習を行った。文型の導入においては、絵や写真を多く取り入れ、文型の意味やその文型が使用される場面をわかりやすく示すことを心がけた。また、練習も単調にならないよう、文型を使ったペアワークの会話活動や、Google ドキュメントを用いた例文作りなどの練習を行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。また、予習としてテキストを読んでくることと、練習問題を解いてくることを指示した。

＜秋学期＞

授業は 1 回に 1 課のペースで進めた。クラスではパワーポイントを使い、テキストに沿って、文型の意味、注意点、類似文型･表現との違いなどをテキストの例文を使って説明した。5 課～8 課の「時を表す文型」には意味が類似しているが用法が異なるものが多く出ているので、相違点を詳しく説明した。その後、補足説明や簡単な文完成練習を行った。各課の練習問題はグループやペアで答え合わせをした後、全体で再度確認した。毎回、新しい学習項目の文型・表現を使った文完成問題を 10 程度宿題にし、翌週、誤りが多く見られたものを全体でフィードバックした。個別フィードバックは宿題用紙の中にコメントを入れた。

結果と課題

＜春学期＞

おおむね真面目な学生達であり授業中は質問も多く出て熱心に学ぶ姿勢が感じられた。しかし、扱う文型の数が多く複雑なものも多かったため、学生には予習をしてくるよう何度も周知したが、全体として取り組みは悪かった。毎回予習を忘れてきた学生の中には、中間・期末ともに点数が振るわなかった者もいた。また、一部の学生は論文で忙しかったり、常習的な遅刻があったり、他の授業の資料や課題を見ていたりと、学習に集中しきれていないようだった。予習の徹底も含め、学生の授業に対するモチベーションの維持が今後の課題である。さらに、予定していたテキストの内容が授業内に終えられなかったことがあり、反省している。書き言葉の文型表現が増える中で、単調にならない練習を取り入れつつも、いかに文型を効率よく導入・説明していくか、今後検討していきたい。

＜秋学期＞

履修登録者のうち、2 名は今学期は履修しないとのことだったため、実際の受講者は 6 名だった。全員まじめに勉強に取り組んだが、コースの中盤以降は欠席や宿題の提出遅れが出てきた。宿題の短文作成では、学習項目だけでなく既習の文型や表現も使っており、よく考えたことが窺われた。ただ、学習項目は理解し正しく使えるものの、語彙や助詞の誤りが散見された。また、よく考え文を作っているのだが、意味の通らない文を作成してしまう学生もいた。こういう学生に対しては個別に対応したが、時間不足で十分にフィードバックできなかった。この点を今後の課題とし、今後はフィードバックに十分時間を割けるよう授業を工夫したい。

2023 年度　「J5～J7　読解」授業記録

コースの概要

J5～J7 の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6 では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7 では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジュメを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

＜J5 読解＞

担当者名：＜春学期＞ 栃木亜寿香
　　＜秋学期＞ 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期　22 名（PEACE 2 名、他 20 名）、秋学期　12 名
使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

＜春学期＞

説明文、エッセイ、新聞記事の投書、小説など様々なスタイルの読解教材を読み、内容を理解するための読み方のスキルの習得や、語彙・表現を増やすための活動を中心に行った。ペアまたはグループで音読、内容理解、ディスカッションや意見交換を行った。その後全体

でのディスカッションを通じて各テーマの内容の理解を深めた。また 2 グループに分かれて違う内容の読み物を読み、グループごとに意見交換を交わした後にお互いのグループ同士ペアになり、読んだ内容を相手に説明し合う活動も取り入れた。
宿題として読解の事前課題を提示し、授業でより理解を深めるための活動を設けられるようにした。毎回の授業の最初に漢字語彙クイズを行うことで、レベルに応じた語彙や表現も身に付けられるようにした。

＜秋学期＞
多岐にわたって、異なるジャンルでの読解ができるよう、ウェブニュースや新聞の投書、新書、短編小説などの文章を扱った。授業での読解以外にも、宿題として事前に課題を提示し、自主的に読解をしてきてもらったり、漢字クイズを毎回の授業で実施し、読解に必要な語彙力も同時に伸ばしたりもした。

結果と課題
＜春学期＞
春学期の J5 読解は併設の「大学生の日本語 B3（異文化）」5 名、「PEACE５」2 名を含む 22 名の履修者数だった。漢字圏と非漢字圏の履修者が集ったが、非常に意欲的で学生間の交流が盛んであり、自ずとクラス活動においても切磋琢磨する姿勢につながり積極的なディスカッションとして反映された。毎週の漢字語彙クイズに関しては、ほぼ全員が毎回満点を取り、もっと難しい漢字にしてほしいとの声も上がった。読解の理解度を図る為の正誤問題や記述はよく出来ていても、口頭での日本語での意見交換では言いよどみ硬くなる学生も多くいた為、ペアやグループでのディスカッションやミニ発表により、読解内容をアウトプットする時間を適宜設けた。
一方で課題も見られた。宿題の確認として毎回ペアでの音読と答え合わせをルーティーンとしていたが、飽きや慣れのためか答え合わせのみで読み方の確認をしなくなることが増えた。単調を防ぐための読解活動を工夫する必要性を感じた。読んで理解した内容や読んで感じたことを他者に伝えるための複合的な読解活動につながるよう、授業運営を心掛けたい。

＜秋学期＞
履修者が 12 名いたため、ピア・リーディングやジグソー・リーディングなどさまざまな形式での読解を行うことができた。学生もただ文章を読むだけでなく、クラスメートに内容を説明したり、いっしょに問いを確認したりすることで、理解を深められたと思われる。
今後の課題としては、どうしても読解だけだと単調になってしまうことがあるので、グループワークや本文要約などの機会もより多く設ければ、より総合的な日本語スキルが身につくのではないかと感じられた。

＜J6 読解＞

担当者名：＜春学期＞ 小林友美
　　＜秋学期＞ 山内薫

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 18 名（PEACE3 名、他 15 名）、秋学期　8 名 使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

J6 レベルに合わせた説明文、新聞記事、小説など様々なスタイルの教材を取り上げ、読解活動を行った。事前学習として、読み物の語彙調べを課し、授業開始時に毎回、その範囲の語彙漢字クイズを実施した。授業は、ワークシートをペアで答え合わせをし、全体で内容確認後、ディスカッションという流れで行った。その他の授業活動として、分担読解の活動と要約文の作成も複数回実施した。学期末には、90 分間の紙媒体の期末テストを実施した。

＜秋学期＞

読解教材として、調査報告、新聞記事、社説、説明文、小説、意見文、新聞記事、及び随想を扱った。次回の読解教材の語彙調べと読解を予習とし、授業では、各スタイルに応じた読解ストラテジーを学習した上で、ストラテジーを意識した読解文の内容理解を行った。予習においては、読解に対応した質問の回答への取り組み、語彙調べ、要約文の作成などを読解教材により調整した。授業活動としては、各自での黙読や音読、内容確認のための質疑応答、要約、分担読解などを実施した。分担読解は、まず、同じ読解教材を担当する人とペアあるいはグループで情報交換をした。その上で、別の読解教材を担当する人とペアを組み直し、情報交換をする形式、あるいは、スクリーンの前で説明する形式で行った。また、毎回、授業開始時に紙による語彙クイズを実施し、語彙の読みと意味理解を確認した。期末テストも同様に紙による読解テストを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

登録は 18 名であったが、正規院生 1 名の欠席が続き、実質 17 名の学生が参加した。熱

心に授業活動に取り組む学生が多く、出席率や課題の提出率も良好であった。語彙クイズも毎回高得点であり、語彙調べの予習も真面目に取り組んでいたように感じる。本クラスでは、様々なジャンルの読解教材を取り上げたが、普段あまり読み物に馴染みがない学生も、本科目の読解活動を通して、自分の関心がある日本の読み物やジャンルを見つけたようだ。特に、小説や随筆、環境問題に関連のある新聞記事が好評であった。宿題として、小説の短い感想文を課したが、作者の作風について着目した内容のものも複数あり、内容理解に留まらず、作品を鑑賞しながら読解をしている様子も窺えた。課題としては、要約の練習方法が挙げられる。回を重ねるごとに、要約の仕方に改善がみられる学生がほとんどであったが、中心文の捉え方や文の繋がりに課題がある学生もいた。今後は、要約力の育成を目指したよりよい練習やフィードバックの方法を模索していきたい。

＜秋学期＞

本クラス８名の内、１名は学期を通し欠席で、１名は遅刻が続いた後、学期の途中から学期末まで連続欠席となったため、実質的に 6 名のクラスとなった。ペアワークやグループワークを多く取り入れたが、学生同士の仲が大変良かったため、非常に円滑に活動を行うことができた。本クラスでは、語彙や教材の読解など、毎回の予習が必要であったが、全員が予習にしっかりと取り組んできた。そのため、語彙クイズも概ねよくできており、授業活動でも教材の詳細な個所の確認まで行うことができた。要約課題においては、担当教員のフィードバックをよく読み込み、次回の要約に生かそうとする様子が窺えた。期末テストの要約においても、皆、構成や接続詞を意識した文を作成することができており、日頃の学習の成果が表れていた。今後は、読解授業において、ペア及びグループ活動を効果的に取り入れる方法について考えていきたい。また、要約においても、辞書の使用から不使用のタイミングやリライトの導入など、検討したい。

＜J7 読解＞

担当者名：＜春学期＞ 栃木亜寿香
　　＜秋学期＞ 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期　12 名（PEACE1 名、他 11 名）、秋学期　7 名
使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

＜春学期＞

新聞記事、論説文、小説といった様々なスタイルの文章を読み、内容を理解し、他者に伝えたり意見交換したりすることができるようになることを目標とする。

長文の文章に触れ、語彙や表現を増やし、読みのスキルをのばす。新聞記事の要約をおこない、内容をまとめることができるようにする。

＜秋学期＞

J7 レベルに合わせた説明文、論文、新聞記事、随想、小説など様々なスタイルの教材を取り上げ、読解活動を行った。授業は、資料に関する背景知識について簡単に紹介し、グループで話し合いを行った後、読解資料を読んで内容を確認していく形をとった。ワークシートをペアで答え合わせし、全体で内容確認をした後、最後にディスカッションを行った。その他の授業活動として、要約文の作成やレジュメを用いた分担読解の活動を複数回実施した。学期末には、90 分間の紙媒体の期末テストを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

春学期の履修者は PEACE 7 の学生 1 名を含む 12 名であったが、実際の出席者は 9 名であった。漢字圏と非漢字圏の履修者が約半数ずついるクラスで、非漢字圏の履修者の中には漢字の読みに不安を訴える者もいた為、リーディングチュウタ等のツールを適宜活用するように指導した。クラスで扱った内容によっては背景知識に学生間でギャップが見られ、内容の理解度に差が見られる場面もあった。そのため全体の読解活動の後で、トピックに関してある程度社会的・文化的背景知識を持つ履修者が他の履修者にそれらを踏まえた内容理解や意見を伝え、初見の履修者は新たな視点から質問することでお互いの理解を深める、といった情報のやりとりの場面を適宜設けた。論文や新聞記事の他、小説のジグゾーリーディングも行った。最終日に読み物に関する感想を履修生に聞いたところ、レポートや論文作成を日頃行う院生履修者にとっては、長文の論文の読み方のスキルを得ることが出来て良かったという声が聞かれた。また小説の内容推察が一番おもしろかったと答える者や、留学生活で謎であった日本語の社会言語学的知識が得られて良かったと答える履修者もおり、読み物を楽しむ声もあった。より高度な日本語学習へのさらなるモチベーションにつながるよう、効果的な読解活動を行いたい。

＜秋学期＞

登録は 7 名であったが、正規大学院生 1 名の欠席が続き、実質 6 名の学生が参加した。熱心に授業活動に取り組む学生が多く、出席率や課題の提出率も良好であった。読解力がある学生が多く、内容把握も比較的できていたが、漢字圏と非漢字圏の学生とで読むスピード

や理解度には多少差があった。そのため、資料の語彙調べや読解、ワークシートは宿題として課し、授業では、教室活動やペア作成などを工夫した。本クラスでは、要約文の作成やレジュメを用いた分担読解の活動を複数回行なった。回を重ねるごとに要約の仕方に改善がみられる学生がほとんどであったが、そうではない学生もいたため、フィードバックの際に、要約をする際のポイントや書き方について確認し、成果物にコメントを付けて返却をした。今後も要約スキルの向上を目指したよりよい練習の仕方やフィードバックの方法を模索していきたい。

2023 年度　「J5～J7　作文」授業記録

コースの概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

＜J5 作文＞

担当者名：＜春学期＞ a クラス：長島明子、 b クラス：数野恵理
＜秋学期＞ a クラス：栃木亜寿香、b クラス：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期　a クラス 11 名、b クラス 11 名、秋学期　a クラス 13 名、b クラス 10 名
使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

今年度は作文のテーマを 2/3 程度新しくして、「将来の計画」「テレワークの活用」「教材の配布方法（紙かデータか）」「学生時代に力を注いだことは何か」「外国語学習」「投書の紹介と意見」など、7 つのテーマで 800～1000 字の作文を書いた。この他、文章の要約の練習も行った。

クラスでは、テーマについてクラスメートと話し合い、構成や表現を確認し、アウトラインを書いた後で、作文を書いて提出し、教師のフィードバックをもとに書き直すという活動をした。また、初稿を書いた後でチェックシートを使って自己修正やピアエディティングをした回、書き直した作文をクラスメートと紹介し合った回もある。作文は宿題で書いてくることが多かったが、期末テストに備えて、制限時間を決めて授業時間内で書く練習もした。

また、期末テストは手書きなので、普段の作文も手書きとタイプ、両方取り入れ、例えばまず手書きで書いて、書き直しの際はパソコンでタイプするなどした。

結果と課題

＜春学期＞

（a クラス）

学生は意欲的で、出席率、宿題の提出率もよかった。多くの学生が「序論・本論・結論」の構成で書くことに慣れており、整った構成で、学習した表現を適切に使用し、自分の意見を述べることができた。要約も、文章の内容を正しく理解し、ポイントを押さえて制限字数内にうまくまとめることができた。ピア・グループ活動も円滑に進められ、クラスメートの作文に内容や文法、語彙、表現など、細かい指摘ができていたが、構成面の指摘は少なかったようである。この点を今後の課題とし、よりよいピア活動になるよう、授業を工夫したい。

（b クラス）

11 名中最後までクラスに出席したのは 10 名で、大部分は前の学期からの継続生であった。コロナ禍でなかなか留学できない期間があったがいつか留学したいと諦めなかった学生たちということもあり、非常に学習意欲が高く、書くことを楽しむ学生が多く、作文を書く力が伸びた。作文は学習した表現を積極的に使い、アウトラインに沿ってしっかりした内容が書ける学生が多かった。今年度から取り入れた新しい作文のテーマにも関心を持っており、書く前のディスカッションも活発で、書いた後のピア・エディティングにも積極的に取り組んだ。「学生時代に力を注いだことは何か」では、最初は一貫性のない文章を書いてしまう学生も複数いたが、書き直しではアピールしたいポイントとそれに合った具体例をしっかり書くことができた。制限時間内で書く練習はテストの前しかできなかったが、今後このような練習も増やしていけるとよいだろう。

＜秋学期＞

（a クラス）

受講生は 13 名であった。前半は作文の基本的な技法である書き言葉への変換練習に多く時間を割き、結果ほとんどの学生に改善が見られた。また、構成メモや完成した作文をペアで確認し合う協働学習を取り入れることで、新たな視点を学び合う場となっていた。さらに要約文の作成も扱い、各段落の重要箇所を抜き出しまとめる力が向上した。

一方で課題もある。後半は授業中の母語使用が多く見られるようになった。ディスカッションのメンバーを他の国・地域の学生と組むなど適宜調整をした。

またディスカッションの際、口頭アウトプットの日本語能力に課題が見られる学生がいた。そのため、まずは一問一答による簡単な日本語でやりとりの時間を取るようにしたが、大きな改善があったとは言えない状況であった。今後は授業内でミニ発表などを取り入れ

るなど、総合的な日本語能力向上も兼ねた活動も効果的であろうと考えられる。

（b クラス）

受講者は 10 名であった。授業と作文の課題に対し真面目に取り組み、テーマについてクラスメートと話し合う際も活発に意見を交換していた。また、疑問に思ったことは積極的に質問をしたり、学習した語彙や表現、紹介したサイトなどを使って充実した内容の作文を書くことを試みていた。

授業に対する振り返りでは、書く力が身に付いたことに満足感を得ていることがわかった。また、ピアエディティングを体験したことから、作文を書く際のポイントを知ることができたなど、好意的な意見も聞かれた。一方、学習者にとって文化的背景の違いから難易度の高いテーマもあった。レベルに適当なテーマ選択が今後の課題となりうるだろう。

＜J6 作文＞

担当者名：＜春学期＞ a クラス：泉大輔、b クラス：任ジェヒ
＜秋学期＞ 冨倉教子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 a クラス 9 名、b クラス 9 名、秋学期 11 名
使用教材：独自教材

コースの目標

レポートや作文の構成について学習し、毎回 800 字から 1200 字程度のレポートが書けるようにする。また、自分の意見の論拠となる資料やデータを読み取り、要約し、レポート中に正しく提示できるようにする。その際、きちんとした構成で文章が組み立てられるようにする。

授業の方法

＜春学期＞

今学期は対面で授業を行ったが、課題の提出や一部の返却は Blackboard を活用した。授業においては、①4 つの異なるテーマ（高校生の意識調査、待機児童、メディアリテラシー、裁判員制度）に関する読み物を読み取り、その社会的背景を理解すること、②テーマに対して独自性のある意見を述べること、③読みやすい文章構成及び学術的文章の特徴を意識しながら作文を書くこと、④読み物を適切に引用することの 4 つを主な目標とした。

授業の流れは次の通りである。まず、課題文を読んだうえで、ペアもしくはクラス全体で内容の理解確認を行い、学生の意見や母国における状況について述べてもらった。また、作文を適切に書くうえで必要な文型や語彙、引用の仕方、参考文献の書き方などをテキストの問題を適宜用いながら学んでいった。授業内で学んだことを活かして課題のレポートを書

く前に構成メモを作成し、グループで共有する時間を設けた。そこでの気づきを活かし、レポートを書いてもらった後は、「文章の構成」、「学術的文章にふさわしい表現」、「引用の仕方」、「独自性」を中心に教師が個別にフィードバックを行った。

＜秋学期＞

春学期の内容とほぼ同じだが、課題の提出および返却・フィードバックはすべて Canvas で行った。また授業の流れとして、まず言葉の問題をウオーミングアップとして行ってから課題に入る。課題文は各自読んだあと、クラス全体で内容の確認をし、その内容についてペアやクラスで意見交換を行った。あとは春と同様だが、レポート作成後のフィードバックは個別で、かつ重要な箇所や間違いの多く見られた箇所などは全体で行った。

結果と課題

＜春学期＞

（a クラス）

上述の 4 つの観点のうち、学期の前半は特に「学術的文章にふさわしい表現」、「引用の仕方」の 2 点を中心に指導を行った。前者に関して、本授業の履修者は書き言葉に慣れておらず、話し言葉と対照させながらレポートでよく用いられる書き言葉の表現を体系的に導入した。後者に関しては、立教大学で刊行されている『Master of Writing』を用いつつ、本文中での引用表現の用い方および参考文献の書き方について繰り返し解説や練習を行った。各回のレポートへの個別のフィードバックを通して、学生も徐々に書き言葉や引用に慣れていったようで、回を重ねるたびにテーマの難易度が上がるにもかかわらず、学術的な文章の書き方が定着していることが窺えた。

学期の後半は「文章の構成」のうち、全体的な構成およびパラグラフ内の構成について意識するよう促しながら指導を行った。当初は引用、解釈、意見が断片的に記述されていたが、最終的には接続詞をうまく用いながら、データや論拠の解釈に基づき、考察や主張を述べられるようになった。「独自性」に関しては、アジアや欧米圏の学生がバランスよく履修しており、各国の社会的・文化的な背景と比較しつつ、自国における身近な具体例も挙げながら、独自の観点で日本の社会問題について論じることはできていた。

なるべく学生たちの書いたレポートをクラス内で共有するようにし、良かった点（他の学生も取り入れると良い点）、改善点（他の学生も間違いやすい点）について効率的かつ効果的にフィードバックすることができたように思われる。

課題としては、データの読み取りである。第 2 回～第 4 回のテーマでは基本的に文献の引用に基づきレポートを執筆する。しかし、数値的なデータに基づき執筆するレポートは第 1 回目のテーマのみであったため、授業の後半になるにつれ、せっかく学んだことが忘れられがちであった。今後は適宜復習なども取り入れ、図表・データの読み取りに関する力の定着を図りたい。

（b クラス）

今学期は、「文章の構成」、「学術的文章に相応しい表現」、「引用の仕方」、「独自性」という 4 つに焦点を当てて、5 つのテーマ（4 つの課題と期末）に関する作文を書いてもらった。日本語で学術的文章を書いた経験がない学生が多く、「文章の構成」、「学術的文章に相応しい表現」、「引用の仕方」に関しては難しさを感じる学生が多かった。しかし、文章の 3 部構成（序論、本論、結論）を意識する重要性や学術的文章における書き言葉の役割、適切な引用の必要性について何度も言及し、繰り返し練習を行った結果、学期末には全員に成長がみられた。また、「独自性」に関しては、学生一人ひとりが生まれ育った社会の文化的背景を活かした文章が多かったため、本人の許可を得たうえで、クラス全体で共有をすることで「独自性」の重要性を再認識する場を設けた。

課題としては、信ぴょう性の高い資料の選定と読み取り関する指導が挙げられる。一般公開されている多くの情報から、自身の主張を述べるうえで必要な資料を選定し、その内容を読み取ることに難しさを感じる学生もいた。大学院生よりも、学術的文章を読む機会の少ない学部留学生においてそのような傾向が強くみられた。今学期は、適切な引用の仕方と参考文献の書き方の練習を重視したあまり、資料の選定についてはあまり取り上げることができなかった。

今後は、引用をする前の段階にも注目し、資料の選定から引用までのプロセスを授業中に取り上げる必要がある。

＜秋学期＞

学習者は皆熱心で、毎回、課題や授業に集中して取り組んでいた。ウオーミングアップで行った言葉の問題でも、ペアで熱心に議論し合うのが通例であり、クラスでの答え合わせでは、様々な意見や質問が飛び交い、学生達の日本語習得に関する意欲が非常にうかがえた。作文課題の読み物（資料教材）では日本の文化、社会的な背景を問うものが多かったが、作文ではそれぞれ自国の状況と比較したりしながら、独自性のある作文を書いた学生が多くみられた。引用の仕方、書き方については、直接／間接引用が混合してしまったり、引用と自分の意見の区別があまり明確でなかったりといった状況も初めは見られた。回数を重ねることに徐々にそれは減り、期末の段階ではほとんどの学生に改善が見られていた。しかしながら間接引用は日本語力が高く要求されるところでもあり、自分の言葉に言い換える間接引用を正しく書けるようになるのはもう少し練習が必要かと思われる。構成に関しても同様に、回数を重ねるごとにその改善は少しずつ見られ、最後の方はだいぶまとまった作文を書けるようになっていた。語彙や文法などは引き続き個々で見直し、また習得していく必要があるが、新しい語彙やよりアカデミックな表現を使用している学生も多く見られた。クラス全体の雰囲気も和やかで、かつ積極性のあるクラスであった。

＜J7 作文＞

担当者名：＜春学期＞ 長島明子
　　＜秋学期＞ 栃木亜寿香

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期　13 名、　秋学期　12 名（PEACE3 名、他 9 名）
使用教材：独自教材

コースの目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

＜春学期＞

授業は３回に１課のペースで進め、学期中４つのテーマでレポートを書いた。授業では、テーマに関連したテキストの課題文と資料を読み、内容についてグループや全体で意見交換をし、テーマへの理解を深めた。その後、各自が資料を探し、論点や構成を考えて構成メモを作成し、レポート作成へと進んでいった。各課の３回目に全体、個別フィードバックを行い、その後リライトを行った。全体フィードバックでは多くの学生に見られた共通の間違いを確認し、個別では、その学生がよくしてしまう誤りについて指摘し、意識化するよう促した。

＜秋学期＞

秋学期も春学期と同様、３回に１課のペースで授業を進め、学期中４つのテーマでレポートを書いた。授業では、テーマに関する課題文と新聞等の資料を読み、内容についてディスカッションをし、テーマ理解を深めた後、各自が引用資料を用いてレポート作成をした。

結果と課題

＜春学期＞

履修登録者は 13 名だったが、最後まで出席したのは 11 名だった。この 11 名は意欲的に課題に取り組み、課題の提出率もよかった。ピア・リーディングも円滑に行っていた。学生は文献を引用してレポートを書いた経験があり、資料の探し方にも慣れていた。参考文献リストも概ね正しく書けた。コース前半では問いがうまく立てられない、結論部分が足りない、引用のしかたが不正確などの問題が見られたが、回を重ねるにつれて慣れて習得していき、進歩が見られた。最終的には、文献を引用してレポートや報告書を書くというこの授業の目標は、概ね達成できたと思われる。ただ、直接引用が多く間接引用がうまくできない学生も多かった。この点を今後の課題とし、間接引用の練習を増やすなど授業を工夫したい。

＜秋学期＞

受講生は 12 名であったが、初回より 2 名が欠席だった為、実質 10 名で行われた。論理立てた作文の執筆が未経験である学生がいる一方で大学院生が複数いたこともあり、院生とのペア・グループワークやミニ発表を通じて先行研究の引用方法や作文の展開及び技法など多くを共有することができた。また、講座を通じて引用文の技法に重点を置いていたが、前半課題があった学生も、最終レポート及び期末テスト作文では間接引用を用いてレポートを作成することができた。

一方で、作文の書き直しをする活動の際、機械的に修正するのみで、フィードバックの効果があまりない様子が見られた。学生同士のピアエディティングで技法を学ばせ合い、良く作成できた学生の文を共有し分析するなど、フィードバック活動の見直しを行いたい。

2023 年度　「J5～J7　聴解・会話」授業記録

コースの概要

聴解・会話は、J5 は初中級、J6 は中級前半、J7 は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週 1 回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

＜J5 聴解・会話＞

担当者名：＜春学期＞ a クラス：高嶋幸太、b クラス：保坂明香
　　＜秋学期＞ a クラス：和田晃子、b クラス：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 a クラス 10 名、b クラス 10 名、 秋学期 a クラス 12 名（PEACE4 名、他 8 名）、b クラス 11 名
使用教材：独自教材、椙本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版

コースの目標

初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

（a クラス）

発表活動としては、グラフの説明と時事問題というトピックを設定し、それぞれショートスピーチを行った。また、テキストを用いて聴解やロールプレイなどの練習を実施した。授業の始めには、前の週の復習としてディクテーション・クイズも行った。あわせて、テキストの課が終わるごとに、ミニドラマを作成し、教室でそのスキットを発表した。

（b クラス）

J5 聴解会話のクラスでは、ディクテーションクイズ、スピーチ、上記教材を使用した聴解および会話練習を 1 コマの授業で時間調整をして行った。

スピーチは学期を通して 2 回実施した。初回は 3 分間でグラフの説明、2 回目は 5 分間で時事問題について発表することを課した。発表に対しては自己・他者へのコメントを記入することとし、発表後には当該テーマについてディスカッションを行った。

聴解のクラスは教材の流れに沿って進めた。『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』の中から 3 つの課を扱い、「勧誘」「許可」「提案」の機能を重点的に練習した。また各課の終了時にはロールプレイの会話を作り、翌週のクラスで発表し、その後クラス全体で内容や表現を検討した。3 度のロールプレイ作成のうち、2 回の授業活動にボランティアが参加し、自然な会話の流れや日本語の表現を学生に提案した。

期末試験は、聴解テストとロールプレイを別の日に実施した。

＜秋学期＞

聴解はテキストから 3 課分を使用した。ウォーミングアップとして、各テーマにある質問をクラスメートで話し合い、意見を共有した後、CD を聞いて答えを確認した。また、「聞き取り練習 I 」では、CD を聞いて各問題に答え、聞き取りのポイントや重要表現についても説明した。そして、毎回学習した箇所から、5 つの文を選択してディクテーションを行った。一方、会話はショートスピーチとして、「グラフの説明」と「時事問題の紹介」を行い、また、テキストで学習した重要表現を使ったロールプレイやミニドラマの発表も行った。宿題として、ミニドラマとショートスピーチの準備を課した。

結果と課題

＜春学期＞

（a クラス）

履修者が 10 名だったので、様々なトピックのスピーチを聞いたり、多くの人とロールプレイをできたりと、利点が多かった。また、聴解で聞き取りが難しい箇所は何度も聞き返したり、文脈から推測したりするなどのストラテジーも取り入れ、多くのインプットに触れるよう意識した。

また、今学期においては、ボランティア学生を 2 度募集し、ロールプレイの練習もできたので、クラスメイトや教員以外の人とも日本語でやり取りする活動を取り入れることができた。履修者もボランティア学生と活発にロールプレイをしている様子であった。

（b クラス）

今学期の J5 聴解会話のクラスは 2 セクション体制で､b クラスには 10 名が配置された。そのうち 1 名は 1 度しか出席しなかったため、実質 9 名でコースが進められた。

学期前半はややおとなしい雰囲気で、意見や感想を述べる学生は限られていたが、学期を通じ授業活動や課題に意欲的に取り組んでいた。スピーチのテーマも難度の高い内容を選択し、スピーチの前には入念に準備を行っていた。教員からのフィードバックにも応え改善しようとする姿勢が見られた。そして、学期が進むにつれ積極性が増し、クラスメートの発表や質問に対し自発的に意見を述べるようになり、学期終盤にはディスカッションによって知識や考えを深めていく様子も見られた。

聴解教材として使用されたテキストは、今学期の学生の能力に概ね相応しい内容だったと言える。語彙の難しさや発話スピードの速さによって一度で全てを聞き取ることはできなくても、段階ごとの問いには正確に解答し、また段階を重ねることで理解を深めていた。

一方で、課題として残る点の一つは、スピーチをわかりやすく相手に伝えるための工夫である。学生は言葉のリストやイラストを用いて、クラスメートがスピーチを理解できるように取り組んでいたが、「十分には理解できなかった」「言葉が難しかった」というコメントも見られた。事前準備のみならず、スピーチをしている間にはどのような工夫ができるかを、クラスで考えていきたいと思う。

もう一点の検討課題は、ボランティアを交えた活動の内容である。より自然な表現や語彙を身につけることも重要であるが、J5 のレベルであれば、調査した内容やそれを通して考えたことをボランティアに伝え、話し合いによって考えを深めることができるかもしれない。ボランティア参加の授業活動についても引き続き検討をしていきたい。

＜秋学期＞

（a クラス）

クラス登録は全 12 名であったが、1 名は二日目にキャンセルとなり、11 名で活動した。残った学生の内訳は、PEACE4 名、他 7 名である。聴解活動や課題に熱心に取り組んでいた。自習も行っており、ディクテーションクイズは、高得点の学生が多かった。協力して活動を行うミニドラマは、毎回グループ分けをし、学生たちはスクリプト作成から楽しそうに進めていた。プレゼンテーションは、「グラフの説明」と「時事問題の紹介」の 2 種類を行ったが、どの学生も力作を持参し発表していた。一方、カジュアルな会話とフォーマルな会話を使い分けることがなかなかできない学生もいた。そこで、テキスト学習の際に、カジュアルな会話の導入と練習をより増やすことが今後の課題である。

（b クラス）

受講者は 11 名であった。毎回の授業や課題に真剣に取り組み、積極的に活動にも参加していた。ショートスピーチでは、自分の関心のあるテーマについて詳細に調べて発表をしたり、ミニドラマでは各ペアのカラーを出して楽しく演じていた。また、ロールプレイも学習者全員が学習項目をきちんと理解したうえで、会話を行っていた。授業に対する振り返りでは、新たな会話表現を学べたことやミニドラマに挑戦して話すことに自信が得られたなど好意的な意見が聞かれた。

今後の課題としては、テキスト内の重要表現について効果的な指導方法を考えることである。

＜J6 聴解・会話＞

担当者名：＜春学期＞ 高嶋幸太

＜秋学期＞ a クラス：三浦綾乃、b クラス：和田晃子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 14 名、秋学期 a クラス 7 名（PEACE 2 名、他 5 名）、b クラス 5 名
使用教材：独自教材、瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク、鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』The Japan Times

コースの目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話では、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、プレゼンテーションにおいては、アンケート調査を行い、その結果について比較しながら考察を行うことを目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

聴解では、隔週でニュース音声を聞きつつ、内容把握をし、最後にクラスで話し合いをするという形式で進めた。会話では、普通体で話している音声を聞き、それを踏まえて、会話練習を行った。また、毎週ディクテーション・クイズをしたり、課が終わるごとに、扱ったテーマに関してミニ発表を実施したりもした。あわせて、わかりやすい構成になるよう意識し、2 度プレゼン発表も行い、賛否に分かれて討論を行うディベートも 2 度行った。

＜秋学期＞

授業では会話練習、ミニ発表、ニュースの聴解練習、ディクテーションクイズ、プレゼン

テーション、ディベートを行った。毎回、会話のテーマに関連した話題の聞き取り練習の自習用音声教材を聞いてくることが宿題で、それをもとに、ディクテーションクイズを実施した。ミニ発表は、会話練習で扱ったテーマで、ペアになり会話を発表させた。ニュースは、テキスト教材から３種類、生教材から２種類の合計５種類を扱った。プレゼンテーションは、サンプルのスライドでプレゼンテーションを見せた後、同じスライドを使って発表の練習をさせ、その後自分達が選んだテーマでスライドを作成し、データを示しながら発表した。最後に、ディベートを行って、肯定・否定・司会等の役割を分担した。期末テストは聴解と会話の２種類を実施した。聴解テストではニュースの聴解、会話テストではディベート実技を実施した。なお、秋学期は履修者が多くなかったため、ディベートで履修者がすべての役割を経験できるように、ディベートの授業と期末テスト（聴解・会話）は ab クラス合同で行った。

結果と課題

＜春学期＞

聴解では、さまざまな教材からニュースを聞き取ったのだが、「スマホアプリの銀行」「羽田空港」など学生にとってなじみのあるテーマでは、活発に話し合いをしている様子だった。また、会話練習では、最初の頃はなかなか丁寧体が抜けなかったのだが、学期が進むにつれ、普通体などくだけた表現を使えるようになっていった。

今回は、2 度学生ボランティアを教室に招き、対面でディスカッションを行ったのだが、楽しそうに情報交換をしていた。また、今学期に導入したディベートでは、最初のほうは不安そうにしていたのだが、1 度経験すると要領をつかめたようで、2 度目は慣れて参加している様子であった。

＜秋学期＞

（a クラス）

授業には 7 名の登録があったが、実際に出席したのは 6 名であった。この 6 名は出席状況が安定しており、履修者同士の仲も良かったため、非常に良い雰囲気で授業が進められた。学期末に履修者に授業の感想を聞いたところ、「ニュースを聞く練習が多くできて良かった」「日本語でプレゼンテーションできるようになった」「友だち同士の会話が練習できた良かった」などのコメントが得られた。様々な活動が 14 週の間に盛り込まれているためやや忙しかったが、履修者はどの活動でも学びを得られたようである。また、今学期はビジターセッションを一度行ったが、日本人学生とディスカッションしたり、自分の発表を聞いてもらったりすることは良い刺激になったようだ。今後も積極的にビジターセッションを活用していきたい。今学期は履修者が多くなかったため、ディベートは B クラスと合同で練習と実技テストを実施したが、1 グループ３～４名という丁度良い人数で、ディベートの段取りをつけることができたので良かったと思う。ディベートにおける反論や主張の根拠となる

データなどの説明は履修者にとって困難を感じるポイントのようであった。授業時間は限られているが、しっかり時間をとって、ディベートでよく使われる日本語表現などを導入・練習することを今後の課題としたい。

（b クラス）

クラスは 5 名で、非常に仲の良い学生達であった。学習も熱心に進め、活動や課題に取り組む様子も、頼もしい様子であった。学内外で日本人学生と交流を積極的に持ち、自然な会話場面が多かったと思われる。自習も行っており、ディクテーションクイズは、高得点の学生が多かった。ニュースは、最初は聞き取りが難しいようであったが、最後の生ニュース 2 回は最後に動画も見せ、非常に楽しんで学んでいた。終盤のディベートは、日本語で経験した学生はおらず、当初心配そうであったが、いざ始まると、全 5 回全力で取り組んでいた。冬休みを挟んで準備も相当行い、仲間で相談もしあって、よいディベートが行えた。今学期は学生数が少なかったため、ディベートは a クラスと合同で行い、肯定・否定・その他司会等をすべて体験することができたのはとても良かったと思う。授業内で 2 回、日本人ボランティア学生が来てくれる機会を持ち、そこでもやりとりが生まれ、学生同士話が進んでいた。今回は来てくれる日本人が少なかったため、もっと増やして友達言葉を使う機会がより増えればよいと思う。ふりかえると、ミニ発表では自由度が高いプレゼンテーションを行ったのだが、どうしても自分のよく使う表現にとどまってしまうため、ここで使う表現を提示及び練習した上で実施することを、今後の課題としたい。

＜J7 聴解・会話＞

担当者名：＜春学期＞ a クラス：山内薫、b クラス：鹿目葉子
＜秋学期＞ 嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 a クラス 13 名、b クラス 11 名、秋学期 15 名（PEACE 3 名、他 12 名）
使用教材：独自教材、生教材、荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤眞理子『日本語超級話者へのかけはし―きちんと伝える技術と表現―上級から超級へ』スリーエーネットワーク

コースの目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解においては、生教材から、訪日外国人に対する新たな攻略、産業再生機構、カップラーメンの開発、新型コロナウィルスの影響を受け変革した冷凍食品開発業界など、4 つのテーマを取り上げ、視聴した。また、視聴前に配布した語彙リストを活用しながら、内容把握と語彙や表現の確認を行った。また、DVD 視聴後は、課題として内容要約と意見文の提出、及び全 6 回の語彙クイズを実施した。本クイズは今学期から導入され、ディクテーション、語彙の読み、語彙を用いた文づくりという構成のクイズであった。会話においてはテキストの 3 課分を使用し、他者に伝わるような表現や展開を学んだ後に、各課のテーマと構成に基づいたプレゼンテーションを行うことを課題とした。期末テストは、プレゼンテーションと DVD の内容要約・意見文を 2 週に分け実施した。

＜秋学期＞

聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解では、経済、社会問題を取り扱った動画を視聴し、今学期は、冷凍食品業界の取り組みインバウンド観光事業の取り組み、高齢者向けの旅行事業の取り組みという 3 つの内容を取り上げた。動画を視聴する前にキーワードや語彙リストの確認を行い、動画視聴後に内容について理解できたことを全員で共有したり、視聴したテーマについてのディスカッションを行ったりした。また、前の回に視聴した部分のディクテーションおよび語彙クイズを行い、さらに、1 つのテーマの視聴が終わるごとに、内容の要約と意見文の提出を課した。会話は、語彙や表現などを学び、ロールプレイを 1 回、内容に即したテーマのプレゼンテーションを 2 回行った。また、新出語彙は宿題で学習させた。

結果と課題

＜春学期＞

（a クラス）

13 名のクラスで、互いの考えを尊重し合える、和やかな雰囲気のあるクラスであった。いずれの学生も授業内容や活動に対する理解度が高く、担当者が一度説明するだけで、すぐに活動に取り組むことができ、授業をスケジュール通りに、円滑に進めることができた。受講者の内 1 名は本人の申告により学期途中から連続欠席、また 1 名は学期後半より連続欠席となったものの、11 名は学期を通して欠席や遅刻も少なく、参加意欲の高さが窺えた。一方で、課題の未提出が重なっていく学生もおり、何度か声掛けをしたものの、提出への取り組みは改善されなかった。

プレゼンテーションにおいては、本クラスのクイズの方法を変更したことにより、十分に時間を取ることができた。段階的に、テーマの設定、構成、スライド、及びスクリプトの作

成に取り組むことを通し、各学生の考えとオリジナリティが十分に表された発表となっていた。また、学期末に b クラスとの合同ディスカッションの時間を設けたことで、自分の発表内容を相手に説明することができ、最終発表に対し有益な示唆を得られたという意見が挙がった。

聴解においては、DVD 視聴後に、内容要約と意見文の課題に各自で取り組むにとどまり、ディスカッションの時間を設けることができなかった。今学期の学生においては、プレゼンテーションの準備のほうに時間を用いることで、充実した日本語学習の機会となったが、今後も学生の様子をみながら、プレゼンテーションの準備に要する時間と聴解に関わる活動の時間における時間配分について考えていきたい。

（b クラス）

11 名の個性豊かな学生達で構成されたクラスであった。お互いの意見をしっかりと聴き、考えを共有し、知識を深め合っている姿が見られた。理解度が高く、何を求められているのかを察知する力も長けており、授業をスケジュール通りに、円滑に進めることができた。受講者の内 1 名は本人の申告により学期途中から欠席をし、また 1 名は就職活動中であることから欠席となったが、残り 9 名は欠席が少なく参加意欲の高さが窺えた。また、宿題や課題も全員が提出をし、授業へ真剣に取り組んでいることがわかった。

プレゼンテーションでは、テーマの設定からスクリプトの作成に至るまで、十分な時間をとったことから、内容もすばらしくオリジナリティあふれる発表となった。

また、学期末に a クラスとの合同ディスカッションの時間を持ったことで、最終発表への自信につながったという意見が挙げられた。

聴解では、DVD 視聴前に DVD のテーマに関連するトピックについて意見を交わし、視聴後にディスカッションを行った。DVD の要約と意見文もしっかりとまとめられ、日本語力の高さが窺えた。

今後の課題としては、効果的な会話練習の進め方を考えていきたい。

＜秋学期＞

始めから終わりまで、とても雰囲気の良いクラスだった。国籍の異なる学生が多かったため、特にディスカッションで自身の経験や考えを積極的に交換しようとする態度が見られた。結果としてほんとのどの学生が、語彙力、聴解力、発表する力を向上させたことが、期末テストで確認された。社会的なテーマを扱いながら、それを聞く活動と話す活動を繰り返したことが、効果的であったと感じる。課題としては、ロールプレイの位置づけが挙げられる。教材で出てきた表現を踏まえてロールプレイの課題を課したが、真正性の高い活動だったとはいいがたい。教室外でも使える日本語の習得へとつなげるため、また学習者をもっと積極的に参加させるために、ロールプレイの導入や指導の仕方を工夫していきたい。

2023 年度　J8 授業記録

コースの概要

J8 は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8 で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

＜日本の社会と文化Ａ＞

担当者名：＜春学期＞ 長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 15 名
使用教材：独自教材

コースの目標

社会問題、芸能文化など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

初日に日本文化や社会に関するいくつかの録画番組を見せ、学習者に興味があるものを選んでもらった。その結果、　1.知恵泉『江戸の観光大作戦！仕掛け人のプロデュース戦略とは？』（江戸の観光文化、日本人の考え方）、2. ガイヤの夜明け『令和流・・・次世代の育て方』（日本企業の変化）、3. カンブリア宮殿『秋元康　激流を攻略せよ』（アイドル、ドラマなどポップカルチャー）を題材に授業を展開することとなった。

各テーマ、ビデオ視聴、内容理解をしたあと、さらにそのテーマに関する文献を調べ、発表をした。2 回の個人発表と小グループ内でのディスカッションを行い、最後のまとめとして、グループ発表とクラス全体でのディスカッションを行った。

結果と課題

各テーマ、学習者自身で問いを立て、答えを見つけるために資料を読み、発表するという過程を繰り返した結果、情報検索力や思考力に繋がっていったと思われる。また、教師やクラスメイトからの指摘を発表に反映させ、回を重ねるごとに日本語での表現力が高まっていった。しかしながら、語彙力や聴解力にかなりの個人差があり、各テーマの理解や

要約作業では教材や進め方の工夫が必要であった。今後も、各々が語彙力や聴解力を鍛えられるよう、授業内容を工夫する必要がありそうだ。

＜日本の社会と文化Ｂ＞

担当者名：＜秋学期＞ 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 8 名
使用教材：独自教材

コースの目標

時事問題など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

日本社会や日本文化に関連するトピックを選択し、それに関する映像教材を見たり、文献や記事を読んだりする。教材から学んだことをもとに、ディスカッションをしたり、ミニ発表などを行ったりし、最後のまとめとして授業テーマに関連したプレゼンテーションを行う。本科目では 4 つのトピックを選定し、取り扱った。その 4 つは、①日本のインバウンドビジネス、②日本食文化、③日本の就職事情、④日本のテクノロジー・サービス・システムであった。

結果と課題

各トピックを 3 週にわたって取り扱った。基本的には第 1 週目に、トピックに関連する映像教材を視聴し、ディスカッションを行った。2 週目では、文献や記事を読み込んできて、それをクラスメートとジグソー・リーディングする活動で、最後の 3 週目にはそのトピックに関するミニ発表を行うというものであった。授業を進めるにつれ、内容の理解が進化している様子が見て取れた。また、ボランティア学生との交流が 3 回でき、ほかの学生からもトピックに関する意見交換ができたり、フィードバックが得られたりでき、有意義な交流になっていた。

今後の課題としては、トピックの途中で休んでしまう学習者に対して、いかにフォローするかという点である。休んでしまうと、次の週はクラスメートから話を聞くだけになってしまったりするので、授業内容をクラスメートに聞いておくなど、自身で授業に追いつくために工夫するよう前もって周知したい。

＜日本の社会と文化Ｃ＞

担当者名：＜秋学期＞ 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：秋学期 4 名 使用教材：独自教材

コースの目標

日本の企業風土、日本的経営、日本式サービスなど日本での就職に関心がある学生にとって有用なトピックをとりあげ、それらの知識を獲得すると同時に、高度な文型や語彙を増やし、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進めた。講義の前には事前学習として、それぞれのトピックについて基本的知識や専門的な語彙や文型を学んだ。講義の後には、事後学習として、ゲストの推薦図書の内容理解やディスカッションをし、最後にレポート作成を実施した。事前学習、ゲストスピーカーによる講義、事後学習という流れで授業を進めた。

結果と課題

今学期の履修者は 正規学部留学生 4 名であり、所属、学年は様々であった。授業態度がよく、全員積極的に授業活動に参加することができた。少人数のクラスであったが、社会経験のある学生が多かったこともあり、各自自分の経験や自国の状況を紹介することができた。また、自分の意見を明確に表現できる学生達であったため、毎回、活発に意見交換や主体的な教室活動ができた。意見が異なる場合も、互いに尊重し合い、議論をしていたこともよかった点である。今後も、学生間での主体的学びを促せるような工夫をしていきたい。課題としては、期日までに課題が提出できなかった学生が複数名いたことが挙げられる。本科目は、事前学習、講義、事後学習という流れで授業が展開されているため、各課題が重要となる。そのため、今後は、各課題の目的や意義、課題指示をより強調して伝えるようにしていきたい。

＜社会の中の日本語 A ＞

担当者名：＜春学期＞ 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 13 名 使用教材：独自教材

コースの目標

流行語擬音語 ・擬態語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

配慮表現、擬音語・擬態語、若者ことば、流行語など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、テーマに関する論文や資料を読んだり、複数の事例に触れたりした後、ディスカッションをする形で授業を進めた。また、テーマに関するトピックについて自分で調べたことを発表する活動を 2 回実施した。最終課題では、関心のあるテーマについて、関連する資料を読み、それをもとに行った調査結果を発表するとともに、その内容をレポートにまとめた。

結果と課題

登録は 13 名であったが、学生の申し出で 1 名が履修取りやめとなり、実質 12 名が参加した。うち 5 名が特外生で、アジア圏以外の国籍の学生も参加したため、母語の話題やお国事情を紹介する際は、さまざまな情報交換をすることができた。

若者ことばの回では、学生ボランティアに参加してもらい、履修者の発表の質疑応答の参加の後、本学のキャンパス言葉や、最近、実際に使用されている若者ことばについて紹介してもらった。論文や資料にはない生の情報を得ることができたとともに、学生同士が交流するいい機会となったようである。

本科目は、ディスカッションや調査など、主体的な参加が求められるが、消極的な学生やペアワークを苦手とする学生もいた。活動の際は教師が助け舟を出すなどして進行していたが、引き続きフォローの仕方を工夫していきたい。

＜社会の中の日本語 B ＞

担当者名：＜秋学期＞ 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 8 名
使用教材：独自教材

コースの目標

役割語、インターネットの日本語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

今学期は若者言葉、メールの文体/打ち言葉、呼称、役割語の 4 つのテーマを取り上げた。

授業ではそれぞれのテーマについて講義した後、テーマに関わる論文を読み、ディスカッションを行ったり、簡単な調査をしたりした。メールの文体の授業では、実際に教師宛に依頼のメールを書く練習を行った。役割語は映画を視聴したり小説の一部を読んだりすることで、登場人物がどんな役割語を使っているかを分析させた。第 9 回の授業には日本人学生 1 名に来てもらい、ビジターセッションを行った。学生はそれまでの授業から興味・関心のあるテーマを選び、質問を準備し、当日ゲストの学生に質問した。セッション後、まとめた内容を提出させた。最終課題として、授業で取り上げた 4 つのテーマの中から 1 つ選び、論証型もしくは調査報告型のレポートを書くことを課した。また、その内容を最後 2 回の授業でパワーポイントを使って発表させた。

結果と課題

履修登録をした学生は 7 名だったが、うち 1 名は初回から出席しなかったため、実際に受講したのは 7 名だった。熱心に勉強に取り組み、出席率、宿題の提出状況も非常に良かった。また、グループでの話し合いも活発に行い、授業は円滑に進められた。ビジターセッションでは、若者言葉や日本語の人称表現について、普段から疑問に思っていたことをゲストに質問することができた。各テーマに関する知識も増やしていけたようである。最終プレゼンテーションではよく準備をしたことが窺える発表が多かった。ただ、プレゼンテーションのしかたやレポートの作成などについてフォローが必要な学生も数名いたが、対応が十分ではなかったと反省している。今後はこの点に留意して指導したい。

＜論文読解の技法＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）小松満帆、（新座）（0 名のため開講せず）三浦綾乃

授業コマ数：週1コマ
履修者数：春学期　（池袋）7名、（新座）0名
使用教材：独自教材
参考教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

コースの目標

様々な分野の学術論文を読み、日本語の学術論文の構成をつかむとともに、論文で用いられる様々な表現を理解することに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

毎回の授業では、論文読解に必要な表現および言葉を、序論、本論、結び、先行研究、引用、研究方法の論文を構成する部分に分け、導入し、運用練習を行った。また、実際の論文を見ながら、構成や表現を確認した。

それと並行して、各自が自分の専門分野に関係のある担当論文を 1 本選び、それぞれ構成や内容、表現等を読み取り、レジュメを作成した。最終発表では、そのレジュメを用いて、担当論文の内容を報告した。

結果と課題

（池袋）

正規学部生が 5 名、特別外国人留学生が 2 名履修した。欠席・遅刻の続く学生もいたが、出席していた学生は、互いに協力、助言し合い、助け合って課題を進めていた。論文を読む・書くという経験を多く積んでいる学生もおり、積極的に知識を共有し、互いに刺激を与え合うよい雰囲気でクラスを進めることができた。

担当論文を読み込む課題では、自分の専門に関わる内容であるため、高い関心を持って取り組むことができた一方で、分野によっては語彙レベルが高く、構成が独特のものもあったため、苦労する学生も見られた。それでも、最終課題では、大部分の学生がしっかりと論文の内容を伝えられる発表を行い、日本語で難解な論文を読み込むことができたという自信を持つことができたのではないかと推察される。また、最後の振り返りでは、クラスメイトの発表を聞いて学んだことについて言及する学生が多く見られ、ともに学ぶという意識を持って授業に臨んでいたことがわかった。論文を読むという作業では、ともすると個人作業が多くなるため、学生同士の協働の場面を設けていくことが重要であると再認識した。

（新座）

開講せず

＜論文作成の技法＞

担当者名：＜秋学期＞（池袋）平山紫帆、（新座）（0 名のため開講せず）三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期（池袋）11 名、（新座）0 名
使用教材：大島弥生他『ピアで学ぶ大学生の日本語表現　第 2 版』ひつじ書房, 2014. 浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版, 1997. 北原保雄監修（独）日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計画作成法』凡人社, 2009.

コースの目標

卒業論文や学術論文など、レポートよりも長く学術的な論文の書き方について学ぶことに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

学期の前半では、モデルとして設定した論文を使用して、学術論文の構成や型、表現について分析した。そして、各自の専門分野や関心に合った論文を探し、同様に分析する活動を行った。分析結果は適宜クラスで発表し、意見を述べ合う活動を行った。

後半は、各自が設定した研究テーマに関する研究計画書を作成した。授業では、まず研究テーマについて考え、先行研究を収集し、研究課題を設定して研究目的や動機・背景、研究意義を書くというように、段階的に進めて行った。学期末には、各自が作成した研究計画書をクラスで発表し、ディスカッションを行った。

結果と課題

（池袋）

今学期の履修者は、総じて学習意欲の高い学生が多く、一つ一つの課題に熱心に取り組んでいた。学期の学習を通して、論文の構成や論文作成に関する基礎知識は身に付いたと思われる。

一方で課題もある。まず、今学期は 2～4 年生の学生が混在しており、論文に関する知識量に大きな差が見られた。特に、大学院進学を考えていたり、卒業論文を書くために履修している学生と、論文を書く必要性が低い学生とのギャップは顕著であった。そのため、前半の論文の分析を行う際に、どこに照準を合わせるかが非常に難しいと感じた。また、今学期の履修者の専門分野は社会学、法学、哲学、国際関係論、方言学と幅広かったが、進学や卒業論文を考えている学生からは、専門的な内容に関するアドバイスを求められることもあった。内容に深くかかわる部分については、専門の先生にも相談することが必要であるが、それによって計画書を作成する進度が遅れる学生も数名いた。いずれも対応方法を検討していきたい。

（新座）

開講せず

＜キャリアの日本語Ａ＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）沢野美由紀、（新座）長谷川孝子
＜秋学期＞（池袋）森井あずさ

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期（池袋）11 名、（新座）6 名、秋学期（池袋）13 名
使用教材：『立教就職ガイド 2024』
『外国人留学生のための就活ガイド』
（参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』

コースの目標

日本の就職活動の全体の流れや要点を理解するとともに,エントリーシートの書き方（効果的な構成、適切な文体や語彙等）、面接で求められる日本語（適切な応対、マナー）など、実質的な日本語スキルの獲得を目指す。

授業の方法

＜春学期＞（池袋）

日本での就職を希望する学生を対象に、就職活動の流れを説明したうえで、自己分析の方法、エントリーシートや履歴書の書き方、面接の受け答えのポイントなど実践的なスキルを磨いた。毎回これらに関する課題に取り組み、クラスメートや教師のコメント、フィードバックを受けて書き直す作業も行った。

また、現在の就職活動や企業の状況について、ゲストスピーカーによる講義をお願いした。

＜春学期＞（新座）

就職活動に必要な日本語に関連する様々な事柄—「エントリーシートの書き方」「自己ＰＲの仕方」「企業研究の仕方」「面接の受け方」などを学んでいった。実際に自分で何度もエントリーシートを書く練習をした。そして，それに対するフィードバックをクラスメート，および教員から受けた。また，学外から留学生の就職活動に携わるゲストを招き，就職活動の概要に関する説明を聞き，就職活動全体の流れや要点を学んだ。

＜秋学期＞（池袋）

教材を中心に各トピックについて学び、付属のワークシートを使ってペアワークやグループワークなどを行った。また、公開されている動画を用いて、現在の就職活動の動向をとらえ、学びに生かすようにした。毎回宿題を課すことにより、自分の将来について考え、自分自身をより深く知り、それを文章にするという活動をした。

結果と課題

＜春学期＞（池袋）

今期は 2 年生から大学院生まで 11 名が履修し、後半欠席が続いた学生が 1 名いたが、他の 10 名は熱心に受講した。4 年生に加え、あまり就職活動の知識を持たない 3 年生、2 年生も参加していたが、どのように活動を進めていくのかということを順を追って説明し、課題を行った。4 年生 2 名がちょうど就活中だったため、面接での質問や気をつけるべき点などについて話してもらったが、生の声を聞くことがクラスのいい刺激になっていた。回を重ねるごとに全員が学びを深めていく様子が印象的であった。

就活ではまず自分自身をよく理解し、それが説明できることが大切だが、各学生の母国と

日本との文化的な違いも踏まえなければならないように思う。この講義における課題は、長所、短所、自己ＰＲ、志望動機など、学生が言いたいことを日本的な表現、考え方を加味した上でどのように表すかということである。さらに、それが就活、志望する業種や職種に適したものであるかを考えることの難しさもある。教師としてどのようなことができるのか、さらに考えていきたい。

＜春学期＞（新座）

主体的に就職の準備ができるよう、各学習者の個性や興味を共に考え、質問を繰り返しながら授業を進めていった。学習者は就職活動の全体像をつかみ、自分が何をすべきなのかをイメージできたようだ。エントリーシート、自己 PR、志望動機では、結論を始めに書くこと、具体的に書くことを心がけるようになっていった。自分と企業を知り、どのようなエピソードを選ぶかの重要性にも気づいたようだ。しかしながら、この短期間で準備が万全にできたわけではない。さらなる自己分析と企業分析を行い、自分と企業をよりよく理解することが必要である。面接の練習も引き続き進めるとよい。

＜秋学期＞（池袋）

毎回の学びと中間時点で行ったゲストスピーカーのお話により、就職活動についての意識を深めることができたと思う。すぐに就職活動を始める学生は少なかったが、近い将来するであろう就職活動の大まかな流れを知り、具体的に必要なワークをすることで、実際に就職活動をするときに少しでも余裕をもって臨めるようになったのではないかと思う。課題としては、上記の理由から切羽つまっていない人が多く、少し真剣みに欠ける部分があったように思う。また、学生間に日本語能力の差が多少あり、特に文章を書いた場合に何人かの学生に文法、語彙、漢字の間違いが非常に多く見られた。日本語力をつけながら就職活動について効果的に学ぶ方法を考えたい。

＜キャリアの日本語Ｂ＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）数野恵理
＜秋学期＞（池袋）井上玲子、（新座）小林千種

授業コマ数：週 1 コマ
受講者数：春学期（池袋）3 名、秋学期（池袋）9 名、（新座）4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

就職試験で出題される日本語関連項目について学びながら、日本で行われる就職試験を理解する。また、数多くの問題に触れることによって日本語や日本文化・社会についての知識を増やす。

授業の方法

＜春学期＞（池袋）

初回授業では、日本の就職活動に関するオリエンテーションを行い、筆記試験（SPI）の言語分野、非言語分野、性格検査がどのようなものかを解説した。非言語分野と性格検査については、紹介のために少し問題を解かせたが、2 回目以降の授業では言語分野を扱った。

毎回宿題を課して、事前にワークシートの問題を解いて来させ、授業ではその答え合わせや解説を行なったり、調べてきたことを発表させたりした。また、授業冒頭には前回のクラスで学習した項目について、Blackboard でクイズを行なった。第 13 回の授業では一学期に学んだ内容について模擬テストと答え合わせをし、復習が必要な分野を認識させ、第 14 回の最終日に期末テストを実施した。

＜秋学期＞（池袋）

就職試験（SPI）の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句など語彙力に関するテーマや文章読解に関するテーマなどを選び、練習問題を通して必要な知識や問題に対応するためのストラテジーを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。

＜秋学期＞（新座）

就職試験（SPI） の言語能力に関する出題範囲から毎週いくつかのテーマを選び、問題を解きながら必要な知識や対策を学習した。扱った内容は、同義語・反意語・同音異義語、2 語の関係、ことわざ・慣用句・故事成語、難読漢字、部首・仮名遣い、名言・名句、四字熟語、敬語、文法、文学作品、文章並び替え、読解問題である。毎回、次週の授業で扱う内容の練習問題を宿題として課し、授業では答え合わせとともに関連する内容について触れながら解説を行っていった。

また、授業で学習した内容の理解度・定着度を確認するため、毎回の授業開始時に前回に扱った内容の小テストを紙媒体で実施した。そして、学期末は学習範囲を網羅した模擬テストを実施し、その翌週に期末テストを行った。いずれも紙媒体であった。

結果と課題

＜春学期＞（池袋）

3 名のうち 1 名は学期後半出席をやめてしまったが、残りの 2 名は休まずクラスに参加して熱心に取り組んだ。学生たちは漢字の意味は理解していて語彙や四字熟語なども意味はわかることが多かったが、漢字の読みは苦手だったため、この機会に読みもしっかり覚え

るよう促した。学期開始時に敬語が苦手で敬語を練習したいという要望があり、実際敬語は2名とも苦手だったため、予定よりも練習量を増やした。2種類の謙譲語など、これまで曖昧だった点もしっかり理解できたようである。また、これまでの学期は外来語の言い換え練習は少なかったが、学生はビジネス場面で用いられる外来語に慣れていなかったため、今回は外来語の言い換えの練習も数を増やした。

模擬テストの時点では 2 名とも難読漢字や文学作品にまだ課題があったが、期末テストは非常によくできていたことから、しっかり復習して臨んだことがわかった。

文学作品は、一人2つずつ調べて発表をさせ、その他は教員が紹介したが、一回の授業ですべてを扱うと情報量が多くなってしまうため、履修者が少ない場合には、学期を通して少しずつ紹介したほうが効果的だったかもしれない。これは今後の課題としたい。

＜秋学期＞（池袋）

秋学期は、正規学部生 8 名、特別外国人学生 1 名が本コースを履修した。就職試験を意識している学生もいたが、大半の学生は、日本語力の向上のために履修したということであった。学期の前半から欠席が続いた学生もいたが、授業に出席していた学生は全員、予習を十分に行って授業に参加していた。

今学期の課題を挙げるとすれば、成績に開きがあったことであろう。まずは、学期当初から遅刻が多かった。授業開始時に小テストを行っていたが、遅刻者は小テストに間に合わず、受験できなかった。小テストも成績に含まれるため、それが成績に影響したものと考えられる。また、模擬試験や期末試験の点数においても差が見られた。試験の出題範囲が広いため、学期中からクラスで扱った学習項目の復習を促してはいたが、他クラスの課題もあってか、復習が十分にできていなかったように思われる。特に、難読漢字や四字熟語の読み、国文法、文学作品についての問題に点数の差が見られた。履修学生にとって難しいと感じる項目については、スケジュールに余裕のある日に再度復習の時間を取る必要があるのではないかと考えている。学期の初期段階からテスト対策の意識づけを促す授業運営については、引き続き検討を行っていきたい。

＜秋学期＞（新座）

今学期の履修者は、正規学部生の 4 名であった。4 名全員が日本での就職を希望しており、日本語の知識のブラッシュアップを目的として受講したようであった。

小テストでは得意なものと不得意なもので学生に差が見られたりしたが、全体的に熱心に取り組む学生達で、出席率も良く、毎回の課題はきちんと提出があった。課題の確認でも分からなかった問題を積極的に質問する等、非常に熱心に取り組んでいた。

この授業では、就職試験で出題される日本語関連項目の対策という性質上、個々での学習が多く、学生同士のやり取りの時間を作ることが難しかった。今後は、学生同士の活動を取り入れるよう工夫していきたいと考える。

＜ビジネスのための口頭運用力 A＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）森井あずさ、（新座）長谷川孝子
＜秋学期＞（池袋）泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期（池袋）13 名、（新座）4 名、秋学期（池袋）9 名
使用教材：独自教材
参考:
（池袋・新座）
『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 模試と対策』
（新座）
『新装版商談のための日本語』、『新装版ビジネスのための日本語』、
『にほんごで働く！ビジネス日本語 30 時間』

コースの目標

日本語の談話の特徴について理解を深めるとともに、敬語や待遇表現など,日本企業で働く際に必要となる口頭運用力を身につける。

授業の方法

＜春学期＞（池袋）

ビジネスの場面で使う語彙や慣用表現などを会話形式で学んでいく。一通り説明した後で、学生同士が実際に会話を練習し、様々な状況で会話ができるように練習する。ビジネスの語彙表の中から毎回語彙クイズをし、期末試験対策のためにリスニング、ディクテーションも行った。3 回のロールプレイテストはいくつかのグループに分け、自分たちで会話を作り、発表するという形式をとった。

＜春学期＞（新座）

ビジネス場面で必要とされる構文または談話レベルの口頭運用力—敬語や待遇表現—について、会議、電話応対、商談など実際の場面を設定して実践的に学び、それが使えるように練習した。

＜秋学期＞（池袋）

本授業では、1 回の授業で①実際のビジネス場面を想定したケース学習、②ビジネス場面の聴解練習、③会議、商談、電話対応などのビジネス場面における会話練習を行った。また、学習者の理解度に応じて、日本企業の商習慣の説明、敬語の復習、ビジネスや冠婚葬祭におけるマナーの指導についても適宜扱った。①では教員の企業勤務経験に基づき、実際

にあったクレームやトラブルを紹介し、それに対して自分たちならどのように対応するか議論し、ビジネス感覚の養成に努めた。②は教材を用いた聴解練習の中で、営業、人事、総務、経理、決算に関する専門的な用語や日本企業特有の仕組みについても解説を行った。③では、ビジネスによくある場面に基づき、必要な表現を導入しつつ、ロールプレイを通して実践練習を重ねた。

結果と課題

＜春学期＞（池袋）

日本語力のかなり高い学生が集まっていたが、ビジネスの語彙や敬語の使い方などを今まで深く学んだことのない学生も多く、新鮮な経験になったようである。また、ビジネスで使われている会話を練習することで、今後日本での就職を希望する学生にとっては将来の面接や就職活動に役立つ経験になったと思われる。

会話練習が少し単調になりやすかったので、生き生きとした会話ができるように、さらに工夫していきたいと思う。

＜春学期＞（新座）

ビジネスで必要とされる場面を紹介しながら、語彙表現、敬語、口語と文語の違い、会話特有の表現なども確認した。談話構成を示しながら、丸暗記にならないように練習を重ねた結果、学習者は各場面での会話のやりとりができるようになっていった。敬語に慣れていない学習者もいたが、ディクテーション、会話練習、ロールプレイテストを繰り返すことで、少しずつ丁寧な表現が正確に使えるようになった。しかしながら、聴解練習では、もう一歩工夫ができそうである。例えば、今回行ったディクテーションの他、会話の内容理解に関する練習を入れるとよりいっそう聴解力が伸びるだろう。

＜秋学期＞（池袋）

ビジネス表現自体をよく知っている学生は多かった。しかし、日本企業の文化・慣習としてなぜそのような表現が用いられるのか、相手に対してどのような配慮や意図が含まれているのかについては当然のことながら知らない学生がほとんどのため、日本でのビジネスにおける背景知識も詳しく取り扱うことで、表現の暗記にとどまらず場面や意図に合わせて適切に使用できるようケース学習なども取り入れつつ工夫を行った。企業によって違いはあるものの、一般的な日本企業の慣習や仕事に対する考え方が理解でき、適切なビジネス表現を選択する力が身につけられたという声が寄せられた。また、事務のアルバイトや日本企業でインターンシップをしているため、授業で学んだことを早速実践しているという声も上がった。

課題としては、非言語的なコミュニケーションに関する指導にまで至らなかった点である。ビジネスにおいては言語的なコミュニケーションはもちろんのこと、身振り、視線、声

の調子、所作といった非言語的要素によって印象が大きく変わる。特に交渉や謝罪といった場面では印象面での評価がその後の関係構築や業務の進捗に影響が出るため、そのような面に関しても授業内で適宜取り上げることでより教育効果が高まり、実践に直結する授業になったのではないかと考えられる。

＜ビジネスのための口頭運用力 B＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）平山紫帆
　　＜秋学期＞（池袋）平山紫帆、（新座）小林千種

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：＜春学期＞（池袋）11 名、＜秋学期＞（池袋）8 名、（新座）1 名
使用教材：なし

コースの目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につけ、より高度なビジネス日本語運用能力の獲得を目指すとともに、日本でのビジネスの進め方への理解を深める。

授業の方法

＜春学期＞（池袋）

授業の進め方は、初回の授業で「ソリューション・デザイン（SD）型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は各班を移動しながら活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、班ごとに会議の報告をさせるとともに、クラス全体に対して口頭表現のフィードバックを行った。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンはフィードバックのために録画した。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画を一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回、ビジネス語彙に関するプリントを宿題として課し、添削して返却するとともに、使い方に注意が必要な語彙については教室で解説した。

＜秋学期＞（池袋）

授業の進め方は、初回の授業で「ソリューション・デザイン（SD）型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は各班を移動しながら活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、班ごとに会議の報告をさせるとともに、クラス全体に対して口頭表現のフィードバックを行った。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンはフィードバックのために録画した。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画を一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回の授業でビジネス語彙に関するプリントを配布し、翌週、語彙クイズを行った。

＜秋学期＞（新座）

本授業では、ソリューション・デザイン（SD 活動）の方法を取り入れ、授業を行った。初回の授業で、ソリューション・デザイン型の授業の主旨や目標、進め方について説明し、活動内では会社内のシーンを想定して、会議形式で行うことを周知した。その上で、会議で使用する表現や司会の役割、議事録の書き方を学習した。その後は、「商品開発」と「問題解決」のそれぞれのテーマにつき 5〜6 週ずつ使い、「プレタスク」「SD 活動（会議）」「成果発表のためのプレゼン」「振り返り」という流れを 1 つのセットとして、テーマごとに 2 回行った。プレタスクではそのテーマに関連する用語や概念、背景知識について、ブレインストーミングしながら、学生からキーワードを引き出した。わからなかった用語については、翌週までに調べてきて、授業内で発表し確認した。その後、タスクを提示し、調査や相談をしながら、SD 活動を進めた。2〜3 週ほど SD 活動を行ったところで、発表を行ったが、その際、ポイントとなる点について、事前に確認を行ってから実施し、発表後は教師が上司の立場から、コンサル活動を行った。その内容を踏まえ、発表内容を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼン発表の翌週には、プレゼンを録画した動画を見ながら、学生と教師で振り返りを行った。このような流れで 2 つのテーマについて SD 活動を 2 回行った。この活動のほかには、ビジネス用語に関する語彙クイズと短文作成も毎週の授業の最初に行った。

結果と課題

＜春学期＞（池袋）

今学期は履修者が比較的多く、3 つのグループを作成することができたが、各班に同じタスクを与えても、アプローチはグループによって大きく異なっていた。視点の違う複数の発表を聞けたことは、学生たちにとって大きな学びとなったと思われる。また、積極的な学生が多く、ＳＤ型活動中のディスカッションでも、発表後の質疑応答やピア・フィードバックでも、活発に意見を述べ合っていた。学生たちの活動への取り組み方は、総じて素晴らしかったと言える。

また、今学期は、先学期の反省を生かし、ビジネス場面での報告のしかたを考える時間を

設け、「報告の型」についても紹介した。そして、各回の会議報告の後には報告者に個別にフィードバックするとともに、学期に数回、クラス全体にも報告の仕方についてフィードバックを行った。その結果、多くの学生が、相手の状況にも配慮しながら内容を簡潔に報告できるようになった。

一方、課題も見られた。今学期は、活動に積極的に取り組む学生が多かったが、中にはグループ活動が得意でなく、活動に消極的な学生もいた。このクラスはグループで話し合う時間が大半を占めるため、そうした学生と、周りの学生がともに学びを深められる方法を具体的に考えていきたい。

＜秋学期＞（池袋）

SD 型活動は、2 グループに分かれて活動を行った。タスクごとにグループを入れ替えたが、どの組み合わせでも学生たちは協力し合いながら活動を進めていた。話し合いを丁寧に重ねることで、ユニークな商品や効果的な解決策を考え出すことができていたように思う。

このクラスでは、毎回の授業や、発表の後にフィードバックを行っている。今学期は向上心が強い学生が多く、フィードバックでアドバイスされたことを次の発表に活かそうとする姿勢が顕著に見られた。そうした学生は、学期を通しての口頭表現面における上達が著しかった。

今後も、学生一人一人の成長に結びつくようなフィードバックを心掛けていきたい。

＜秋学期＞（新座）

この授業では、SD 活動のグループをいくつか作り、グループ内やグループ間で互いに話し合ったり、コメントしあったりすることで、学びを深める予定であったが、新座キャンパスのクラスでは受講生が 1 名であったため、グループ活動を行うことがかなわなかった。そこで、活動の際には、教師は相談役、受講生の学生は後輩社員役となって、進めていくこととした。教師は、受講生が各課題を進める中で悩んでいる点について助言や軌道修正を行ったり、悩んでいる点、どう進めればよいかわからない点について受講生自身が内省できるような発問を行ったりして、SD 活動を見守るようにした。

また、受講生は 2 回の SD 活動を 1 人で進めることになったため、プレゼンテーションの資料作成など毎回全て 1 人で行う必要があったが、学生は熱心に取り組んでいた。
ボランティア学生に参加してもらうことも検討したが、学生の遅刻が目立ち協力者を募ることは断念した。今後は受講生が 1 名であった際の方法について、もう少し検討する必要があるのではないかと思う。

＜ビジネスメールと文書＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）泉大輔
　　＜秋学期＞（池袋）泉大輔、（新座）小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期（池袋）18 名、秋学期（池袋）9 名、（新座）1 名 参考教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジネス文書　適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』スリーエーネットワーク 川島冽（2008）『5 分で送信 ビジネスメール速書き文例集』すばる舎

コースの目標

日本語の書き言葉によるコミュニケーションについての理解を深めながら、ビジネスメール、報告書、依頼状などの様々なビジネス文書の読み方、書き方について学び、使えるようになる。

授業の方法

＜春学期＞（池袋）

本授業では、①前回の課題へのフィードバック、②教科書に沿ってビジネス表現の導入および練習、③次回の課題の説明を行った。①では、学生が作成したメールの文面に個別にフィードバックを入れて返却した後、クラス全体でもメールの文面を共有し、良い点と改善点を説明した。②では、教科書に掲載されているビジネス表現を取り上げて説明しつつ、関連する表現にも派生させながら指導を行った。③では、課題であるメールを書く上で設定されているビジネスシーンについてクラス全体で理解を深めるとともに、①～③の指導の際、文法・語彙的な言語面の助言だけではなく、担当教員の企業経験に基づき、ビジネスマナー、日本企業における商習慣、就職活動で使える表現についても適宜説明を行った。

＜秋学期＞（池袋）

本授業の方法は、基本的に春学期と同様であり、1 回の授業内では、①前回の課題へのフィードバック、②教科書に沿ってビジネス表現の導入および練習、③次回の課題の説明を行った（詳細については春学期の「授業の方法」を参照）。春学期の違いは、受講者数が春学期の半分の 9 名であったため、一人一人へのフィードバックの時間、クラス内でのディスカッションの時間を長く設けた点である。

＜秋学期＞（新座）

メイン教材に沿って、ビジネスメールやビジネス文書の書き方や使える表現を学び、実際に作成する、という方法で実施した。各回の授業は、①前回の課題へのフィードバック、②新しい課の状況理解、③使える語彙や表現の説明と練習、④課題作成、という流れで行った。最後の練習問題を宿題とし、期日までに Canvas に提出、次回授業までに教員が採点、添削し、次回授業初めにフィードバックを行った。また、メイン教材のほか、他教材やビジ

ネス関連のサイトを参考にし、敬語やメール事例、表現のバリエーションなども適宜補足した。最終課題では、授業で学んだ場面に即したビジネス場面を設定し、メール文と文書を書いて、実際にメールで提出させた。

結果と課題

＜春学期＞（池袋）

学生が作成したメール・文書に対して個別のフィードバックを行い、全体で共有するという流れを繰り返したため、学期初期と比較すると学期終盤はビジネス表現や文章のポイントに気をつけながら作成できるようになっていった。今学期は敬語、特に謙譲語が苦手な学生が多く、基本的な謙譲語も曖昧であったことから、定期的に敬語の総復習も行った。これに関しては学期末に敬語に対する苦手意識が払しょくされたという声も寄せられた。

課題としては、学生同士の双方向的な活動をあまり取り入れられなかった点が挙げられる。人数が多く、講義形式の授業になりがちであり、時間の制約上、活動を取り入れるのは難しかった。今後はビジネスメールのケーススタディなどを導入できれば、より実践的なビジネススキルを身につけるうえで効果的ではないかと考えられる。

＜秋学期＞（池袋）

基本的な「結果と課題」は春学期と同様であるが、秋学期の「結果と課題」において特徴的な点は以下の通りである。

まず、敬語については比較的得意な学生が多く、春学期ほど基礎的な指導や定期的な復習は行わず、より応用的な敬語表現を積極的に導入・説明をした。これに関しては学期終盤には使用できる敬語表現の幅がかなり広がったように思われる。次に、春学期に比して受講者数が少人数のクラスとなったため、一人あたりのフィードバックにかけられる時間が長くなった。そのため、メールや文書を隅々までクラス内で確認することができ、細かなニュアンスの違い、使用場面や話者の意図などについてディスカッションを取り入れながら授業を進めることができた。特に、教員が会社員だった際の実務経験に基づき、ケース学習を行うことでより真正性の高い事例について学生たちに考えてもらう活動を取り入れた。実際に日本企業への就職を考え、就職活動中の学生も多く、自分が会社員だった場合にどのように対応するのかを実践的に思考する力の涵養を目指した。これについては「各国の企業文化との違いについての理解が深まった」「現在参加している日本企業のインターンシップでメール対応をする際にも役に立った」というような声が寄せられた。最後に、春学期の課題であった学生同士の双方向的なコミュニケーションについても、人数が少なかったため、より活発に行われていたように思われる。

課題については、クラス内でビジネス表現に精通している学生と全くその分野の日本語表現を知らない学生がおり、授業内容が簡単に感じられる学生と難しく感じる学生に分かれていた。少人数の場合はもう少しレベル差を考慮して、より基礎的な復習あるいは発展的

な追加タスクなどを用意できると、学生のレベルに応じてより教育効果が高まったと思われる。

＜秋学期＞（新座）

正規学部生１名という、非常に小さいサイズのクラスであったが、遅刻、欠席をすることもなく、高い意欲を保ったまま、1 学期間学んでいた。日本語力も高い学生であったため、授業内容に関する事項以外にも、ビジネスや就職活動などについて、積極的に質問が上がった。履修者が少ないことで時間的余裕があったため、そういった疑問についても、できる限り取り上げるよう努めた。

課題としては、履修者が 1 名であったことから、ピアによる学びが欠如していた点が挙げられる。できる限り多くのバリエーションを見せるなど、工夫はしたが、限界があった。今後は、履修者の少ないクラスでは、ビジネス経験者をゲストとして招く、日本人学生ボランティアとセッションを行うなど、更なる工夫を検討する必要があるだろう。

2023 年度　Japanese Language and Japanese Culture A、B: Japanese Language and Japanese Society A、B　授業記録

コースの概要

すべての特別外国人学生を履修対象とし、履修のための日本語レベルは問わない。日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例、日本の社会課題や事象を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

＜Japanese Language and Japanese Culture A＞

担当者名:＜春学期＞ 任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 50 名（JL&JC 49 名、GLAP 1 名）
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることを目的とする。

授業の方法

日本の伝統文化から現代文化に至るさまざまなトピックを通して日本語と日本に対する理解を深めることを目的に、今学期は次の 7 つのトピックを扱った。1）年中行事、2）お祭り、3）地理と観光（各地域における地域活性化の取り組みなど）、4）県民性、5）お笑い、

6）アニメとマンガ、7）日本人の大学生活、8）日本人の家族観の変化、9）人間関係の捉え方とコミュニケーションスタイルの関係、である。授業は英語と簡単な日本語で行われた。授業の前半では主に講義を行い、後半では理解の深まりにつながるさまざまな活動を実施した。たとえば、受講生同士のディスカッション、日本人学生ボランティアへのインタビュー調査、Kahoot や Slido を用いたクイズ、ゲームなどである。七夕の前週には短冊に願い事を日本語で書く活動を行ったり、ゲストスピーカーを招いて茶道の体験を実施したりもした。また、受講生がより多角的な視点をもって、日本の文化に触れることを目的に、学期途中で「不思議な日本の文化」というテーマでグループによるミニプレゼンテーションを行った。学期末には、学期中に扱ったトピックを受講生独自の視点から考察した内容でプレゼンテーションを行い、その振り返りに基づき、最終レポートを作成してもらった。

結果と課題

今学期は受講生の人数（50 名、うち GLAP「大学生の日本語」受講生 1 名）が多いだけでなく、ゼロ初級から J8 レベルまで非常に多様なレベルが混在していた。少人数の授業に比べ、教員が受講生一人一人と深くインターアクションをとることが難しく、教員による一方的な説明に終始してしまうのではないかという懸念があった。そのため、日本語のレベルを問わず、受講生が自身の考えや疑問を外言化しやすい空間を構築し、より多くの受講生が積極的、かつ楽しく授業に参加できるようにすることが優先課題であった。その課題のために、1）Kahoot や Slido を用いたクイズ活動を多く取り入れる、2）グループで行うミニプレゼンテーションを実施し、受講生同士が日本語レベルや母語にとらわれず、交流の機会をもつようにする、という 2 点を試みた。その結果、学期末に実施した振り返りシートには、Kahoot や Slido を用いたクイズ活動により、緊張をせず授業に楽しく参加することができ、かつ 100 分集中することができた、といった肯定的な評価が多数みられた。また、クイズやゲームをペアやグループで行うこともあったため、クラスメートとの交流の機会にもなったと評価していた。一方で、グループで行ったミニプレゼンテーションに関しては、発表者の興味関心や発表者独自の視点に基づいていたため、視野が広がったという意見もあれば、負担だったという意見もあった。大人数で 1 つのトピックについて考え、話し合うことに対して負担を感じていたようである。この点に関しては、受講生の人数や受講生の興味関心に応じて、今後再検討をしていく必要がある。

＜Japanese Language and Japanese Culture B＞

担当者名:＜秋学期＞ 任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 35 名（JL&JC 30 名、GLAP 4 名、PEACE 1 名）
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることを目的とする。

授業の方法

日本の伝統文化から現代文化に至るさまざまなトピックを通して日本語と日本に対する理解を深めることを目的に、今学期は次の 10 のトピックを扱った。1）冠婚葬祭、2）日本の小学校、3）日本の伝統的な遊び、4）日本の迷信、5）日本の歴史（明治以降）、6）日本のビジネスと就職活動、7）日本のジェンダー問題、8）日本のスポーツ、9）日本の伝統音楽、10）日本のお正月、である。授業は英語と簡単な日本語で行われた。授業の前半では主に講義を行い、後半では理解の深まりにつながるさまざまな活動を実施した。たとえば、受講生同士のディスカッション、日本人学生ボランティアへのインタビュー調査、Kahoot や Slido を用いたクイズ、ゲームなどである。また、トピック 2）の後半では、日本の小学校の先生を招いて小学校 1 年生が受ける漢字授業の体験を行い、トピック 9）では、箏曲家を招いてお琴の体験を実施した。学期末には、学期中に扱ったトピックを受講生独自の視点から考察した内容でプレゼンテーションを行い、その振り返りに基づき、最終レポートを作成してもらった。

結果と課題

今学期も春学期と同様に、受講生の人数（35 名、うち GLAP「大学生の日本語」受講生 4 名、PEACE8）が多いだけでなく、ゼロ初級から J8 レベルまで非常に多様なレベルが混在していた。また、今学期は受講生の英語レベルもさまざまであり、英語を媒介語とすることが難しい場面も時々あった。そのため、今学期は受講生が言語の壁を感じずに、自身の考えや疑問を外言化しやすい空間を構築することが優先課題であった。その課題のために、1）前学期と同様に、Kahoot や Slido を用いたクイズ活動を多く取り入れる、2）グループディスカッションでの使用言語を受講生に選んでもらう、3）受講生の母語や第一言語の背景にある文化や歴史と、授業で扱うトピックの関連性を問い、受講生が積極的に参加できるようにする、という 3 点を試みた。その結果、1）に関しては、前学期と同様に、日本語力や英語力を気にせずに、楽しく授業に参加できたという肯定的な意見が学期末の振り返りシートに多数みられた。2）に関しては、自信がある言語でディスカッションすることができて嬉しかった、日本語で発言する機会が増えて嬉しかったという意見がある一方で、いつも同じ言語を使用するクラスメートとグループを組むことを課題として挙げている意見もあった。3）に関しては、日本と自国、またはその他の国との関係、類似点や相違点についても考えることができ、多くの気づきが得られたという意見が多数みられた。春学期と同様に、受講生参加型の授業によりトピックへの興味関心がさらに高まることを改めて確認できる

1 学期であったと思われる。受講生の母語や第一言語、文化的背景を考慮しつつも、主に英語で行われるため、日本語のレベルを問わず、誰もが参加できる授業だという本科目の特色をどのようにいかすかについては、さらに工夫が必要である。

＜Japanese Language and Japanese Society A＞

担当者名:＜春学期＞ 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 40 名
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

地域方言、社会方言、名前の変遷、ボディーランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度など、日本語および日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて 5 問ほどの質問を学生に投げかけて考えさせた後、講義を行いながら質問の答えを示すという形式で進めた。授業後半には、各テーマについて日本と学生の国を比較させ、類似点および相違点についてグループでディスカッションさせ発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。また、ビジターセッションを 3 回設けて日本人学生と交流する機会を取り入れた。3 回のセッションでは、授業で扱った「地域方言」「若者言葉」「名前(ファーストネーム)」「教育制度」について日本人学生にインタビューさせ、その結果をワークシートにまとめ提出させた。さらに、ゲストスピーカーとして神主を招き、神道や神社について講義をお願いした。その翌週の授業では、ゲストスピーカー宛てにお礼状を書く活動も取り入れた。期末レポートは、授業で扱ったテーマの中から 1 つ選択させ、日本と学生の国を比較してまとめさせた。コース最後のクラスで期末レポートについて発表させた。

結果と課題

学生の日本語力が入門から初級、中級、上級レベルまでさまざまだったため、授業はすべて英語で行った。履修生 40 名という大変大きなクラスだったため、学期はじめは出席者を把握することにも手間取り、クラスがうまく運営できるか心配であったが、熱心な学生が多く毎回積極的にディスカッションに参加していた。また、授業後に提出させたリアクションペーパーから、いずれのテーマにも関心を持って取り組んでいたことが読み取れた。コース最終日の振り返りからは、学生たちが地域方言、若者言葉、日本人のファーストネームなど、

日本語に関わるテーマに特に興味を持っていたことがわかった。ゲストスピーカーによる神道の講義や龍笛の演奏は学生達にとっては初めての経験で、神主に直接さまざまな質問ができたことが印象的だったようである。さらに、3 回のビジターセッションにおける日本人学生との交流も非常に好評であった。地域方言、若者言葉、日本の教育制度について同世代の日本人学生とやり取りできたことは貴重だったようである。多くの学生が、ビジターセッションで得た日本人学生のコメントに基づいて期末レポートを作成していた。

今学期は履修生が多数だったため、ビジターセッションと学期末の発表にこれまでとは異なる形態を取り入れた。ビジターセッションでは、日本人学生にインタビューする際の使用言語を英語か日本語のいずれかを学生自身に選ばせ、言語に応じてグループ分けを行った。期末レポートの発表では、クラスを 5 つのグループに分け、グループ内で PPT を使って 1 人 15 分ずつ発表させた。特に、期末レポートの発表に関しては、個別の発表に十分な時間が確保できたことで、質疑応答やディスカッションを行い発表の内容を深めることができたとみられる。今後も、履修生の様子をみながら、さまざまな取り組みを試みていきたい。

＜Japanese Language and Japanese Society B＞

担当者名： 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 36 名（PEACE 7 名、他 29 名）
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。テーマは、日本の祝祭日、人称詞、家族と家族間呼称、敬語、短歌・俳句、色・動物のイメージ、日本の食生活、衣生活、住生活、現代日本の社会問題などである。毎回テーマについて講義をしたうえで、クラスでディスカッションや発表をさせて学生の積極的な参加を促した。日本人学生にも 3 回参加してもらい、色・動物のイメージ、呼称や敬語についてインタビューする活動を行ったり、日本人学生に協力してもらい短歌・俳句を作るという体験学習も行ったりした。また、ゲストスピーカーとしてビジネスパーソンを招き、日本のビジネスについての講義をお願いした。期末レポートでは、コースで扱った中から 1 つトピックを選択させ、日本人を対象に調査を行ったり学生の国と日本との比較をさせたりしてまとめさせた。

結果と課題

30 名以上の大きなクラスだったためか、コース途中から出席しない学生、授業には毎回出席するものの態度が悪い学生がいた。ただ、大半は真面目に授業に出席し、質問や発表に積極的であった。授業では日本語や日本社会に関するさまざまなテーマを取り上げたが、リアクションペーパーから、学生がどのテーマにも興味を持って取り組んでいたことが読み取れた。また、コース終盤で提出させた振り返りシートから、敬語や日本の社会問題、ゲストスピーカーによる日本のビジネスに学生たちがとりわけ関心を持ったことがわかった。期末レポートでも、敬語を取り上げ、リサーチクエスチョンを考えて日本人学生にインタビューしたものや、日本と学生の国の社会問題やビジネススタイルを比較したものが目立った。学生の日本語は入門、初級、中級、上級とレベルがまちまちなため講義は英語で行ったが、日本語科目として本コースを履修している初級の学生から、日本語をもっと取り入れてほしいという要望が振り返りシートに記されていた。今後は、各テーマの日本語のキーワードや日本語の表現を導入するなど工夫したい。

2023 年度　日本語演習　　授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習 1 は J2 レベル、演習 2 は J3 レベル、演習 3 は J4 及び J5 レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習 1 では「アニメ／日本の歌」、演習 2 では「映画／まんが」、演習 3 では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習 1～3 の詳細は以下の通りである。

＜演習 1＞

担当者名： 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 4 名、　秋学期 2 名
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることを目的とする。

授業の方法

長編アニメ 1 本を視聴し、毎回タスクシートとディスカッションを行った。また、2 回の

mini 作文と 3 回の発表を課題とした。さらに、ビジターセッションを 3 回実施した。タスクシートは、「見る前に」「見て確認しよう」「話してみよう」「書いてみよう」に分け、「見る前に」では、日本文化に関して今持っている知識で問いに答え、自国の文化と比較した。「見て確認しよう」ではアニメ視聴後、アニメの内容だけではなく、アニメ内の日本文化に関して考えた。「話してみよう」では、あなたならセリフのないシーンにどのようなセリフをつけるか、またどうしてそのセリフを考えたのかなどを話したり、アニメの持つメッセージについてもディスカッションをした。また、「書いてみよう」では、アニメをみて考えたことやその後のストーリーについて書いた。

プレゼンテーションは「私の好きなアニメ」「私の好きなアニソン」について、自分なりの観点から分析をして発表をした。また、最終発表では、「比較」をテーマに 2 つのアニメを取り上げて発表をした。主な使用言語は J2 レベルの簡単な日本語である。

結果と課題

＜春学期＞

受講者は 4 名であった。学生同士の雰囲気も良く、ディスカッションやビジターセッションでは盛り上がりを見せた。授業に積極的に参加し、お互い助け合いながら課題に取り組んでいた。プレゼンテーション後の振り返りでは、クラスメートからプレゼンテーション技術や表現の仕方など多くのことを学んでいること、授業に対する振り返りでは、自分の興味あることを既習の日本語で学習したことに満足感を得ていることがわかった。

今後の課題として、更にディスカッションを活性化するための方法を考えることである。

＜秋学期＞

受講者は 2 名であった。アニメに関する知識も深く、毎回の授業や課題に真剣に取り組んでいた。ビジターセッションでは積極的に交流し、アニメを始め日本文化に関する意見や情報交換を行っていた。また、プレゼンテーションでは、アニメソングを歌って披露するなどアニメ愛の強い学生達であった。授業に対する振り返りでは、春学期同様に、既習の日本語を使って自分の興味のあるアニメについて話せたことに満足感を得ていることがわかった。

今後の課題としては、アニメを通してさらに深く、多方面から日本文化が学べる方法を考えることである。

＜日本語演習 2＞

担当者名：＜春学期＞ 泉大輔
　　＜秋学期＞ 泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 16 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの作品を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

＜春学期＞

授業は、日本の文化社会に関するテーマごとに、事前活動、本活動、事後活動の 3 つを 2〜3 週にわたり実施するという構成で行った。扱ったテーマは、日本の言語、日本の学校生活、日本の食文化、日本の住居、日本の伝統文化、日本のポップカルチャーなどである。

事前活動では、テーマに関するマンガを部分的に読み、背景知識の活性化を行った上で、このテーマについて学習・議論するために必要な語彙・表現を確認する。また、このテーマに関して知っていること、自文化ではどうであるのかについてクラス内で共有をする。必要に応じてテーマに関する文章を読んだり動画を視聴したりしながら、日本の社会文化に関する知識と理解を深めていく。さらに、翌週の本活動に向け、テーマに関する調査・準備を行う。その際、教員は適宜必要な日本語の表現などについてフォローを行う。本活動ではボランティア学生を招き、各学生がテーマに関して、日本と自文化を比較し、そこからわかったことを PowerPoint 資料にまとめて発表を行う。クラスメイトやボランティア学生からの質疑を通して内省を促す。その後、少人数のグループに分かれて発表内容について議論したり、テーマによってはボランティア学生とともに協働タスクに取り組んだりしてもらった。事後活動では、本活動を各々振り返り、教員から個別にフィードバックを行った。

＜秋学期＞

基本的には春学期と同様である。秋学期は春学期よりも受講者数がかなり少なかったため、春学期よりも一人ひとりの学生に意見を話してもらったり、自文化を紹介してもらったりする時間を増やした。

結果と課題

＜春学期＞

春学期は受講者が多く、事前活動、本活動、事後活動のいずれにおいても、グループに分かれた活動になり、クラス全体で共有や議論を行う時間を設けるのは難しかった。しかし、事前活動や課題をしっかりと準備し、本活動ではかなり詳しく調べて考察した内容を発表する学生が多く見られた。日本の社会文化に対する理解が深まるとともに自文化の新たな

一面に気づくことができたという声や、ボランティア学生との交流を通して同じ日本人学生でも社会文化に対する捉え方が異なることがわかったという声が寄せられ、学生が文化を複眼的に見ることができたことがうかがえた。一部、準備や分析が足りず比較が不十分である学生もいたが、既習文法や語彙を用いて積極的に発表しようとする姿勢が見られた。

課題としては、マンガやドラマの取り扱いである。アニメが好きでよく視聴する学生は多いが、マンガやドラマを見たことのある学生は少なく、マンガの読み方（セリフやコマ割りの見方）に苦戦する様子がかなり見られた。これらの取り入れ方についてはより工夫をしていきたい。

＜秋学期＞

秋学期は春学期の約半分以下だったため、事前活動における共有や議論、本活動における発表時間、事後活動における教員からのフィードバックの時間を十分に確保することができた。そのため、学生全員の考え方を聞きながらディスカッションを深めることができた。また、少人数のため、留学生 1 人に対して日本人のボランティアが 1 人以上つくことも多く、より「日本語をツールとして」自己表現に力を入れている様子がうかがえた。当初は 1 人で話すことや、通常の J3/J3S 以上に日本語で話さなければならない環境に緊張している学生もいたが、学期後半にはかなり流暢に自分の考えが伝えられるようになっていた。課題は春学期同様にマンガやドラマの取り扱いである。

今学期もマンガの読み方が難しいという声が寄せられた。また、自文化との比較の際にどのような観点から比較したらよいのかわからず考察が不十分になる学生も見られたため、次学期以降の課題としたい。

＜演習３＞

担当者名： 数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 24 名、秋学期 16 名（PEACE 6 名、他 10 名）
使用教材：『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』アスク出版、 『日本語多読ブックス』大修館書店、『きまぐれロボット』角川つばさ文庫　など

コースの目標

プレイスメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

＜春学期＞

クラスでは短歌、俳句、短編小説を扱った。多読ライブラリーの「かぐやひめ」、「つるの恩返し」、「怪談」、「落語」、「蜘蛛の糸」、「走れメロス」、「高瀬舟」のほか、星新一のショートショートなどをクラス全体で扱った。

短編小説は、指定した読み物を読んだあとで、内容把握のためのワークシートの質問に答えて、グループと全体で確認したが、ワークシートは省略した回もある。残りの時間と授業外の時間を使ってブックレポートを書き、次回のクラスで前回の読み物についてグループでディスカッションをした。ブックレポートには簡単なあらすじ、印象に残った場面、ディスカッションのための質問と自分の答え、コメントを書かせたが、学期末は発表の準備もあったので、あらすじは省略した。読み物は全員が同じ読み物を読んでディスカッションをすることが多かったが、数回、J4 と J5 レベルで別の読み物を読み、同じ読み物を読んだ者同士で内容確認をしたあとで、別の読み物を読んだクラスメートにあらすじを説明するという活動も行った。

学期末には各自が選んだ本を読み、発表原稿を準備して、ビブリオバトル形式で本を紹介した。

＜秋学期＞

秋学期も多読ライブラリー、多読ブックスの「落語」、「鼻」、「日本の神話」、「トロッコ」やショートショートなどの読み物を読んで、内容を確認したり、音読したり、ディスカッションをしたりした。2 つの読み物から自分に合ったレベルの読み物を選んで読み、同じ読み物を読んだ者同士で内容確認をしたあとで、別の読み物を読んだクラスメートにあらすじを説明する活動では、読み物を読んでいない相手や日本語力が低めの学生にも理解してもらえるよう、4 コママンガを描かせ、それを見せながら話をさせた。また、秋学期は短歌、俳句のかわりに川柳と詩を扱い、川柳や短い詩を書いて発表する活動を行った。学期末の最終発表では春学期同様、各自が選んだおすすめの読み物を紹介した。

結果と課題

＜春学期＞

これまで演習 3 の履修者はコロナ前も 10 名程度だったが、2023 年度春学期は倍となる 24 名が履修した。以前は毎回のクラスで担当の学生が読み物について皆の前で紹介したあとで、グループにわかれてディスカッションをしていたが、学生数が多く、学期中に発表させるのは難しかったため、発表は学期末のみとし、代わりに毎回ブックレポートを書かせた。

最終日に感想を聞いたところ、これまで日本語の物語などを読んだことがなかったが、いろいろな話が読めて楽しかった、深い内容の文学作品が読めて面白かった、毎回たくさんディスカッションをしたので友達もでき、話す練習もできた、発表のために長い小説が最後まで読めて嬉しかったというようなコメントが多かった。期末の発表のために角川つばさ文

庫の「君の名は。」「天気の子」「すずめの戸締まり」などの小説や自分で購入した日本人向けの本を読んだ学生は特に達成感を感じたようである。一方で、毎回あらすじや感想を書くのは負担が大きいという声のほか、クラスの学生のレベル差についてのコメントも複数あった。

今後の課題の一つはレベル差の対応である。J4 の中でも日本語力低めの学生からはクラスメートの日本語がわからない、J5 の中でも日本語ができる学生からはもっと難しい本が読みたいというような声があった。最後のプレゼンテーションも J4 の学生にわかるように、なるべくやさしい日本語でと伝えていたが、難しい表現をかなり使って話す J5 の学生もいた。履修者数が増えたこともあり、難しい日本語の発表が続いてしまうと、集中力も切れてしまう。秋学期は、発表で使うスライドの数を増やす、「やさしい日本語」について説明するなどして、発表のしかたも工夫していく必要がある。

もう一つの課題は翻訳ツールや生成 AI などの利用である。日本語教育センターでは日本語でのライティング力向上のために日本語クラスの課題には生成系 AI を使用しない、段落単位で翻訳ツールを使わないといった方針を示し、クラスでも説明をしていたが、日本語力の低い学生が翻訳ツールなどを使って文章を書いてくる場合があった。そのような場合には個別に話したが、対応が難しかった。今後も引き続きよりよい対応を考えていきたい。

＜秋学期＞

秋学期の「演習 3B」には「PEACE 日本語 4,5-C」が併置された。

春学期の課題の一つに、レベル差の対応があった。そこで、秋学期は、１回の授業で２種類の読み物を準備し、自分に合った読み物を読んで、同じ読み物を読んだ学生同士で内容確認やディスカッションをしたあとで、別の読み物を読んだクラスメートにあらすじを説明するという活動を増やした。また、読み物を読んでいない相手にも話がわかるように４コママンガを描かせて、それを見せながらあらすじを伝えさせた。また、最終発表も聞き手を考えて「やさしい日本語」で話すことの大切さを伝え、発表で使うスライドの枚数を増やして絵も多めに入れさせた。絵が理解の助けとなり、春学期に比べると改善された。

春学期からのもう一つの課題、翻訳ツールや生成 AI などの利用は今学期も見られた。これについては引き続き対応策を考えていきたい。

2023 年度　総合日本語４～６　授業記録

コースの概要

J4～J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

＜総合日本語４～６A＞

担当者名： 小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 13 名 使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

「観光地」「祭り」「江戸しぐさ」という３つのテーマを取り上げ、それぞれのテーマに沿った読み物の読解を中心に、内容確認、ディスカッション、発表を行った。読解教材は、同じ内容でレベル別に準備し、各学生が自分のレベルの読解文を読み、質問に答えるというのを宿題とした。また、読解文の内容をベースに発表準備を行い、５分程度の発表を３回行った。それと並行し、「観光地」と「祭り」に関する作文の宿題を課し、いずれか１つの内容について、最終プレゼンテーションとして発表した。毎回の授業には TA が参加し、ディスカッション、作文のフィードバック、学生の個別作業中のフォローなど、授業活動のサポートを行った。

結果と課題

J5 と J6 の学生が履修していたが、お互いに刺激し合い、学び合う、とても雰囲気のよいクラスだった。発言や質問も多く、積極的にインターアクションを取る、意欲的な学生が多かった。クラスメイトの仲もよく、毎回和気あいあいと授業に参加していた。

発表や作文では、教師と TA の双方からコメントやアドバイスをしたが、言われたことを真摯に受け止め改善していこうという姿勢の学生が多く、1 学期を通して実力を伸ばした学生がほとんどであった。中には、発表に難しさを感じる学生もいたが、クラスメイトが温かい言葉をかけ、リラックスした雰囲気の中で発表を行うことができた。

一方で、発表が 3 回、作文が 2 回に加え、最終プレゼンテーションも行ったため、時にスケジュールがタイトになることがあった。もう少し時間に余裕をもって準備、発表を行えるよう、配慮していく必要があったので、今後は改善していきたい。

＜総合日本語４～６Ｂ＞

担当者名： 三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 7 名 使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

本授業は VTR を素材とし、「デジタルリテラシー」「若者の消費行動と価値観」「イクメン」の ３つのテーマから現代日本を考えた。各テーマは３週または４週に１つのペースで学習を進めた。１週目はテーマの導入・ウォーミングアップ→事前に配布した語彙リストの言葉の意味を確認（意味を調べてくるのは宿題）→VTR を視聴→内容確認を行った。VTR は前半と後半に分けられているため、２週目は１週目と同様の流れを繰り返した。３週目はテーマについてディスカッションをしてクラスで意見を共有し、さらに発展的な活動としてプラス α の VTR 教材を視聴したり、作文を書いたりした。各テーマの終わりには学習した語彙や表現を復習するためのプリントを配布した。最終課題のプレゼンテーションは、授業でメインとして扱った３つのテーマの中から関連するトピックを学生が自分で決め、プレゼンテーションを行った。

結果と課題

遅刻や欠席がほとんどなく、熱心に勉強する学生達であった。ペア/グループワークや発表や対人コミュニケーションが苦手な学生もいたが、全体的におおらかな学生が多かったため、互いに理解し助け合いながら、いい雰囲気で授業が進められた。昨年度に引き続き TA が授業に参加してくれたため、学生は教師以外の日本語母語話者と話す機会を多く持てたのも良かったと思う。

昨年度の反省と課題を踏まえ、今学期は課題の量とスケジュールをやや軽めに設定した。また、作文は毎回リライトの機会を設けた。その結果、学生は一つ一つの課題に丁寧に取り組み、納得のいく出来のものを作ることができたと思われる。しかし一方で、課題も見られた。今学期は授業内で準備して発表する、ごく簡単なミニ発表を取り入れたが、最終プレゼンテーションの練習も視野に入れるのであれば、従来のもののように１週間程度の準備期間を与えて、ある程度のボリュームがあるミニ発表を行ったほうがいいと感じた。また、今学期の学生はディスカッションで何をどのように話せばいいのかわからず、戸惑う姿が見られた。そのため、３回目のディスカッションではディスカッションの流れや役割、使える表現を明示的に示した。その結果ディスカッションがスムーズに進んだ。今後は初回から提示したいと思う。より充実したディスカッションにするために、学生にどのよう指導・フィードバックしていくか、いい方法をこれからも検討していきたい。

＜総合日本語４～６C＞

担当者名： 小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

「日本の若者」「日本の外国人」というテーマに沿って、①読み物を読んで発表する、②作文を書くという活動を行った。①では、全員で共通の読み物を読んだのち、短い読み物を分担して読解、各自が読んだ内容を発表するという流れで実施した。②では、2 回の作文を書き、1 回目の作文についてはリライトも行った。1 回目の作文は読み物に対する意見文を書き、2 回目は「日本の外国人」のテーマに関係のあるグラフを 1 つないし 2 つ選び、それについて説明、考察する内容とした。

また、最終発表では、上記 2 つのテーマから学生が 1 つを選んで質問項目を設定し、インタビューを行い、その結果を報告した。

なお、このコースでは、1 名の TA にも参加してもらった。

結果と課題

学期開始当初から 4 名という小さいサイズのクラスであったが、途中で 1 名が出席取りやめ、もう 1 名が連続欠席となってしまったため、最終的には 2 名となってしまった。それでも、レベルが異なる学生同士が互いに助け合い、発言も多い活発なクラスとなった。また、TA に、日本語非母語話者である大学院生が入ってくれたが、日本語学習の先輩としてよき目標となってくれたため、履修学生にとって、大きな刺激となった。

作文や発表といった課題では、自らの日本語レベルよりさらに挑戦した内容を目指しており、教員から見ていても、学期中に大きく成長していく様子がよくわかった。

一方、小さなクラスであったがために、いつも話す相手が限定されてしまったり、当初はグループで行うはずだった発表を個人で行うことになったりと、インタラクティブな活動がやや制限されるという課題もあった。日本人ボランティアを積極的に呼ぶ等、さらなる工夫が必要であると思われる。

＜総合日本語４～６Ｄ＞

担当者名： 三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 6 名
使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

授業では日本の四季と年中行事を題材に、視聴覚教材を中心に関連する語彙や表現を学んだ。視聴覚教材は、NHK の DVD「しばわんこ和の心」を部分的に使用した。授業は 1 課「冬」、2 課「春」3 課「夏・秋」の順に進めた。授業は担当したことばの意味を調べて発表する、グループディスカッションをする、ミニ発表をする、作文を書く等、様々な活動を通して日本語の総合的な運用力が伸ばせるように計画した。各課（1 課～3 課の季節）は 2～4 回から成り、「ことば調べ」の読み確認→担当のことばを調べる（宿題）→調べてきたことを発表→DVD で内容確認→グループディスカッション（その場でフィードバック）→課題（今学期は作文 2 回、ミニ発表 2 回）→復習プリント（宿題）、の流れで進めた。作文はフィードバックの後、書き直しを宿題にして再提出させた。学期末に、授業で扱った内容から学生が自分でテーマを決めて最終プレゼンテーションを行った。

結果と課題

履修者は非常に真面目で、出席率や課題の提出状況が安定していた。昨年度の反省を踏まえて、課題の量とスケジュールを調整したため、履修者にとって無理のないペースで授業が進められたと思う。課題となっていた発表の形式は、今学期はレジュメを OHC に映して発表することを基本とし、必要に応じて PPT やインターネットを使用して写真や動画を見せることを許可した。これにより、履修者が PPT の作成ではなく、発表の内容・構成や日本語に時間をかけて準備することができたと思う。また、作成したレジュメは事前に印刷してクラス内で共有したため、聞き取りや語彙に不安がある履修者にとっては、クラスメートの発表の理解を助けるものとなった。

DVD の視聴する箇所を昨年度よりやや減らし、ディスカッション意見を交換する時間を長くとるようにした。その結果、履修者から話す能力が向上したというコメントがあった。しかしながら、最終プレゼンテーションの発表では、内容は良いものの、話す練習が不足していると思われる履修者もいた。発話の練習とそれに対するフィードバックの方法等、工夫で

きる点が多々あると感じる。今後もより効果的な授業方法を検討していきたい。

2023 年度　漢字　授業記録

コースの概要

どのレベルの学生でも履修することができるクラスである。学生は自分でレベルを選択し、学期中 2 回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：＜春学期＞ 小松満帆
　　＜秋学期＞ 三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期　48 名、秋学期　21 名
使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

授業の方法

＜春学期＞

立教漢字検定のテキスト（初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G）を用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行った。1 学期中に 2 回実施される漢字検定のスケジュールに合わせて授業を進めた。授業では、テキストに沿ったワークシートを中心に個別学習を行った。また、毎回の授業開始時に、前回のクラスで学習した漢字のクイズも実施した。ワークシートの他に、学習した漢字を実際の生活の中で見つけ、クラスメイトに漢字、意味、使われていた語彙や場面を報告する「漢字発見」の活動も行った。そのほか、中間課題として、自分の好きな漢字の意味、用法、理由などをまとめて報告する「私の好きな漢字」、最終課題として、自分の名前を漢字にして、各漢字の意味やその漢字を選んだ理由をまとめる「私の名前の漢字」を課した。クラスには TA も参加し、クイズや教材の配付、および学生の質問への対応を行った。

＜秋学期＞

授業は立教漢字検定のテキストを用いて、各履修者が決めたレベル、分野に沿って学習を行った。テキストは初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業は、(1)前回の FB→(2)クイズ→(3) 協働学習（漢字発見）→(4)個別学習（ワークシート）の順で進めた。クイズは毎回のミニクイズに加えて、テキストが終了した後に実施するまとめクイズがあった。また、「プロジェクト」と称して、履修者は自分が撮った写真に見られる漢字をポスターにまとめて発表した。発表に使用するポスターは授業内で少しずつ作成した。協働学習の「漢字発見」では、履修者は宿題として自身の学習レベルの範囲にある漢字を教室外で見つけて来て、授業内で 3～4 名のグループになって読みかた、意味、用例などを発表した。個別学習は、テキストに対応したワークシートを行った。ワークシー

トはできるだけ授業内で教師が添削するようにし、完成したものを Canvas に提出させた。ワークシートとクイズのための予習・復習を毎回の宿題としていた。授業の最終回は、プロジェクトの発表に加えて自分の名前の漢字を考える活動、2024 年の目標となる漢字を考えて発表する活動と、コースの振り返りを行った。

結果と課題

＜春学期＞

学生が、自分でレベルを選んで学習、クイズを受けるため、48 名という大きなクラスで、各学生への対応が非常に煩雑で、ときに混乱の起きる、運営の難しいクラスであった。途中から TA に入ってもらうことができ、煩雑さは概ね解消したが、学生個々の自立した学習姿勢の求められるコースとなった。

ともすると個人作業が続き、集中力を保つのが難しい漢字学習であるが、クラスメイトと相談し合う、助言し合う等の協働作業も見られ、上手に各自が学習ストラテジーを見つけながら課題に向かっていた。漢字に関する質問やコメントも積極的に出て、大きなサイズのクラスにも関わらず、インターアクションの多い、活発なクラスになった。漢字検定のテキストで扱われる漢字は数が多く、また語彙数も多いため、きちんと積み上げ、検定試験やクイズでよい点数を取るのは難しいといえるが、それでも粘り強く取り組み、高い点数を取り続けた学生が多く、その努力が結果にしっかりと現れていた。また、漢字発見の活動や好きな漢字、名前の漢字でも、自らの課題としてこなすのみならず、共有するクラスメイトを楽しませようと、ユニークな漢字を見つけてくる学生も多くおり、グループ活動でも楽しんで漢字に触れている姿が多く見られた。

一方で、途中で出席を取りやめてしまう学生が一部見られた。特に初級前半の学生においては、漢字テキストに掲載されている例文を読み取るだけでも負担となるため、その旨、学期開始時に学生には周知をしていたが、意欲を継続させることが非常に難しかった。このような学生へのサポートについて、今後も工夫が必要となる。

＜秋学期＞

21 名の履修登録があったが、最後まで出席していたのは 17 名ほどであった。昨年度の課題として、J0～J3 レベルの初級の履修者が授業内容についてこらずに欠席が続いてしまうことが挙げられた。今学期は初回授業のオリエンテーションにて、履修するのに推奨されるレベルや課題の多さ・難しさについてよく説明した。必要に応じて初級の学生には自分のメインの日本語クラスで漢字学習を選択するように助言したが、今学期も数名の初級の履修者がいた。そのうち若干名は数回出席したのみで欠席が続き、成績不良となってしまった。最後まで努力し素晴らしい成績を修めた初級の履修者もいたが、やはりこの授業は初級の学生にはやや難しいと感じる。

履修者のレベルに関わらず、クイズの点数が伸び悩む学生もいた。1 レッスンで扱う漢字

の量は少なくないので、授業内のワークシートのみで学習を完結させることは難しいと感じる。教室外の漢字学習への取り組み方も含めた効果的な指導を、今後検討していきたい。今学期の履修者には、漢字発見やプロジェクト発表、最終回の活動などの学生同士が交流できる活動が好まれていた。学期末の振り返りでは、漢字学習が楽しくなるような活動をさらに実施してほしいというコメントが多かった。今後も積極的に協働的な学びに繋がる活動を取り入れていきたいと思う。また、宿題が多くて大変だったというコメントもあったため、課題の内容と量や頻度のバランスを今後見直したい。

2023 年度　Business Japanese I／Business Japanese A　授業記録

コースの概要

Business Japanese I／A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

＜Business Japanese Ⅰ＞

担当者名： 小松満帆、冨倉教子、沢野美由紀、小森由里、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ
履修者数：秋学期 1 名
使用教材：独自教材

コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

この科目は、将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの 3 本柱で展開した。

本授業の主な流れは、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いたキーフレーズの導入ならびに運用・会話練習、③帰りのロールプレイである。①と③では、出勤・退勤時に同僚と交わされる日常会話を練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で適切に応対できるよう、導入と練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。さらに、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い

分けや非言語行動、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も行った。

学期中 6 回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは録画をし、翌週、フィードバックを行った。

結果と課題

1 名の履修であったが、遅刻・欠席がほとんどなく、学期を通じて学びに対する意欲と集中力を持って毎回の授業や課題に取り組んでいた。また、一つ一つの課題について、よく考えながら学ぶことで、学習内容を自分のものにしていくことができ、限られた時間の中でも、集中して努力を重ねることで、非常にレベルの高い成果を上げることができた。敬語を含む日本語力の向上のみならず、日々の生活等で実際に体験した文化的・社会的要因に対しても疑問を持ち、それを理解しようとする努力や葛藤が見られ、その観点からも幅広く学んでいたといえる。その結果、学期開始当初は不安げだったゲストセッションにおいても、徐々に自信をつけて臨むことができるようになった。6 回実施したゲストセッションでは、学生 1 名に対しゲストの方 2 名、という場面がほとんどで、大きなプレッシャーを感じることもあったと思われ、また、ときにゲストの方から厳しいご指摘をいただく場面もあったが、真摯に受け止め、改善していこうとする姿勢が見られ、実際に大きく成長した。

課題点としては、クラスメイトと共に学んでいく機会が持てなかったことである。履修者が 1 名であったことから、ゲストセッションやテストへの準備を自分のペースで進めるようになってしまった。クラスメイトがいれば、切磋琢磨してさらに力を伸ばすことができたのではないかと思われる。また、ゲストセッションに向け、授業外での練習も必要となるコースであるが、忙しいこともあり、十分とはいえないこともあった。学生の進度や理解度に合わせていくことはもちろん必要なことではあるが、学生のペースが落ちないよう、忙しい中でも復習や練習がきちんとできるよう、配慮していく必要がある。また、このコースは、5 人の教員が担当し、複数のゲストの方にご協力をいただく。そのため、個々の教員の指導内容にズレがあったり、ゲストのコメントにも差が生まれたりすることがあり、学生が困惑する場面も見られた。その点を学生にきちんと説明し、理解を求めていく必要がある。

＜Business Japanese A＞

担当者名： 泉大輔、冨倉教子、沢野美由紀、小森由里、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ
履修者数：秋学期 0 名
使用教材：独自教材

開講なし

2023 年度　大学生の日本語／総合日本語６－８　授業記録

コースの概要

「大学生の日本語」は正規学部生の１年生が大学における学習を日本語で行えるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語 6－8」として特別外国人学生や大学院生も履修可能であり、様々な背景をもつ学生が、共に学ぶ機会を提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

＜大学生の日本語 A6、7、8＞

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

「ニュースの紹介と用語の定義（引用）」、「グラフの説明」、「調査の引用」、「アンケート調査」という4つのテーマで、それぞれ必要な機能表現を導入・練習し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを行った。Zoomの画面共有でスライドを共有して発表を行い、ブレイクアウトルームを活用して発表練習やディスカッションを行う形である。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの１枚分についてはスクリプトも提出させた。また、ディスカッションのための質問も用意させて、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。

テーマ1と3は個人による発表である。グループに分かれて発表とディスカッションをし、自己評価と学生間評価をさせ、後日、教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて、改めて発表をした。テーマ2と4はグループによる発表である。Google スライドを用いてグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。テーマ4ではGoogle フォームを用いてアンケート調査を実施し、その内容を発表した。

上記の発表の他に、即興で短いスピーチをする練習も取り入れた。その場で与えられたトピックについて準備をして、スライドを使うことなく、グループの中でお互いにスピーチをし合うという活動である。また、キャリアセンターと連携し、留学生のための就職ガイドの動画を視聴させて、リアクションペーパーを書く活動も行った。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名： 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 13 名

結果と課題

出席率、課題の提出率が高い履修者が大半であったが、日本語レベルが低い履修者や教師の指示や課題指示とは異なる課題作成をするなど不安な点が見られる履修者も一部いた。そのため、授業中には、学習項目の復習と課題指示を繰り返し伝え、口頭でのフィードバックも丁寧に対応するように心掛けた。また、心配な履修者には個別に対応することもした。授業ではグループ活動を複数回実施したが、日本語レベルや到達度の差に考慮してグルーピングをした。回を重ねるごとに学習した表現や構成、発表の仕方を用いて発表できるようになっていったが、秋学期も適宜、課題指示を繰り返し伝え、課題作成の目標やターゲットになる学習項目を意識化させる必要性を感じる。

[社会・経営]

担当者名： 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 11 名

結果と課題

今学期は「大学生の日本語 A（社・営）」の履修者の他、「総合日本語 6-8A」の NEXUS の学生 2 名が受講した。日本語レベルが低い履修者もいたが、概ね前向きに課題に取り組むことができた。授業では、グループ発表を 2 回実施したが、クラス中で良好であったこともあり、助け合いながら準備を進め、協働をしながら学生間での学びが深まったように感じる。クラスサイズもよく、個別に丁寧にフィードバックできた点もよかった点である。課題としては、聴衆を意識して発表できるようになることである。オリジナルのテーマで、学習した表現を用いて準備することはよかったのだが、発表の際は、スクリプトを見ながらの発表する履修者が多かったため、秋学期は、発表の方法を工夫できるように発表の練習にも時間を割き、聞き手を意識した発表の仕方の指導に力を入れたい。

[経済・理学]

担当者名： 長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 18 名

結果と課題

日本語能力が高くはなく、発表にも慣れていない学習者が多かったため、教える情報を整理し、学習者の理解度を確認しながら授業を進めていく必要があった。様々な工夫をした結果、学習者は発表の基本を身に付けることができた。しかし、クラスメイトとの話し合いや発表後のディスカッションでは、思うように話ができない学習者もまだ多い。今後、正確な語彙や表現を確認すると同時に、話し合いを進めるにはどうすればよいかを考えさせ、日本語で交流する楽しさに気付いてもらえるような時間も可能な限り作っていきたい。

[法学・異文化]

担当者名： 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 27 名（PEACE 4 名、他 23 名）

結果と課題

今学期は 1 名の休学者を含み、履修者数は 26 名であった。授業に参加した学生達は熱心に授業を聞き、この授業で何を学ぶべきかをしっかりと把握し、課題にも真摯に取り組んでいた。学生は日本語での発表は初めてであったが、課題を通して、パワーポイントの作成、表現、ディスカッションの方法等を身に付けることができ、資料の探し方、データの読み取り方等も学び、深く考える力、相手の意見を聴く力、自分の考えを相手に伝える力等も少しずつ養っていけたと思う。

授業後の振り返りをみると、「日本語を学問的に学べた」、「論理的で正しい日本語を使用することができるようになった」、「自ら情報を調べる姿勢が身についた」、「自己評価を通して自分の課題を発見し解決する力がついた」、「発表を通して自信がつき、聴衆の目を見て話すことができるようになった」、「大学生らしい学びが得られた」などの好意的な意見が見られた。

その一方で、グループワークにおいて問題が生じたと回答した学生もいた。そこで、次の課題として、グループワークの方法について考えていきたい。

[観光]

担当者名： 和田晃子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 7 名

結果と課題

7 名のうち、1 名は 2023 年 4 月から休学であり、実質的には 6 名での開講となった。さらにこのうちの 1 名は後半から欠席が続き、最終的には 5 名のクラスになってしまった。

グループ活動での連絡も苦労していたようである。PC の扱い等に問題はなく、発表準備でも時間を有効に使って作業を進めていた。テーマ 1 とテーマ 3 は、グループ内での個人発表であった。クラスの人数が少ないため、2 グループに分けると、2 名でディスカッションをするグループもあったが、熱心に話し合いをしていた。

課題としては、全体的におとなしい学生が多かったので、理解の手ごたえがつかみにくいところがあったことである。都度、確認しながら理解度を把握してきたが、教員の声の掛け方で、もう少し反応も明るくなったのではないかと思っている。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名： 和田晃子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 7 名

結果と課題

時折体調不良の学生はいたが、基本的には元気に授業に参加するクラスであった。開講当初は口の重い印象だった学生が、だんだん話し合いやディスカッションでは大いに議論を行えるようになっていき、それがクラスの雰囲気も明るくしていったと思う。それと同時に、発表も積極的に行えるようになっていった。グループの中で前面に出てくるような学生はおらず、メンバー全員が仲良く課題に取り組む印象であった。ただ、エクセル等の普段あまり使わないソフトに関する PC 操作に関しては、できる学生が限られていて、その人に作業が集中した様子である。

課題としては、仲良く作業を進めるのもいいのだが、率先して先を見られる学生の素質を見定めて、グループの中で適切にそれを使えるようにすればよかったと反省している。

[心理・福祉]

担当者名： 和田晃子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 8 名

結果と課題

議論の好きなメンバーが集まっており、毎回発表後のディスカッションでは、相当白熱した話し合いになったため、何度も持ち時間 10 分を厳守するように伝えたクラスであった。発表時に用意したスクリプトを読むスタイルの学生もいて、普段は饒舌に話せる学生が、スクリプトなしだと言葉が続かない場面も何度かあった。一見日本語能力のやや低い学生が、クイズの回数を重ねるごとに点数が上がり、「機能と表現」をよく勉強していたことが感じられた。グループ内での活動で、母語を使う学生に注意をしたり、日本語学習に熱心な学生

たちであった。

しかし、クラスの人数が少ないため、出身を考慮するグループ分けにすると、いつもリーダーとなってしまう学生が出てしまい、その状態をコントロールしづらかったことが、課題である。

[GLAP]

「大学生の日本語 A」は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

＜大学生の日本語 B6、7、8＞

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

『上級日本語教科書　文化へのまなざし』のうち「国際共通語」、「フリーターと仕事」に関する 2 つのテーマを扱った。資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B から各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を学び、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて「国際共通語」についてのレポートを作成し、リライトをした。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書　文化へのまなざし』、東京大学出版会。

[文学]

担当者名： 武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 13 名

結果と課題

全体的に出席率、課題の提出率はおおむね高く、授業態度も悪くなかった。ただ、数名日本語でのコミュニケーションがうまくとれない、意思表示が上手にできない学生がいたの

が気になった。課題の内容を理解していないと思われる者やこちらの指示が通じていないのかもしれないと懸念される者が数名いたが、概ね指示通りの課題を提出し、回を重ねるごとに改善されていった。直接引用を主に今学期は取り上げて練習したが、間接引用を使って書いている学生もいたが日本語のレベルが高い学生だったので、そのままレポートに使わせたが、全体としてはようやく参考文献や引用箇所の正確な書き方も定着してきたところだったので、これを忘れずに、秋学期の授業につなげてほしい。

[社会・経営]

担当者名： 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 11 名

結果と課題

履修登録者は 11 名だったが、最後まで出席したのは 10 名だった。学生は熱心に課題に取り組んだ。ペア活動やグループディスカッションも円滑に進められた。ほとんどの学生がレジュメ、レポート、リアクションペーパーの作成が初めてだった。レジュメ作成では、1 回目は形式・体裁は整っているものの、読解資料の文章をそのまま抽出して書いたものが多く見られた。しかし箇条書き等の説明・練習をした 2 回目は、資料の内容のポイントを押さえ、箇条書きにしてまとめられるようになった。学生も確かな手ごたえを感じたと思われる。レポート作成では根拠の不足や引用の多用、結論の内容不足などの問題があったが、フィードバックしたあとの修正したものには改善が見られた。リアクションペーパーは 1 回目は指定字数は満たしていたものの、感想文のようなものが多く見られたが、2 回目は読解資料をよく読んで自分の意見がしっかり述べたものになっていた。ただ、レジュメの中には短い文を羅列しただけのものも見られたので、読解資料の内容を過不足なくまとめて箇条書きができるように授業を工夫したい。

[経済・理学]

担当者名： 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 24 名

結果と課題

今学期は「大学生の日本語 B」の履修者の他、「総合日本語 6-8B」の NEXUS の学生 2 名が受講した。1 限ということもあり遅刻者もいたが、出席率、課題の提出率は比較的よかった。一方で、日本語のレベルが低い学生や指示とは異なる課題を作成してしまう履修者もいたため、課題指示や説明を繰り返し伝える必要があった。この一学期で、大学で学習するス

タイルやレポート作成のプロセスにも慣れたと思うので、秋学期は余裕を持って課題作成に取り組んでほしいと思う。今後も、アカデミック・ジャパニーズの獲得のみならず、本科目で学んだことを活かしながら自律的な学習ができるように、指導法を工夫していきたい。

[法学・異文化]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 26 名（PEACE4 名、他 22 名）

結果と課題

25 名（26 名中 1 名休学）の大所帯で、日本語力も学習意欲も学生によって差があったが、大部分の学生は熱心に取り組んだ。

学期の前半と後半で別の資料のレジュメを作成したが、テーマ 1 のフィードバックをよく読んでしっかり書き直した学生は、レジュメとはどのようなものかを理解し、テーマ 2 では資料の大切な部分を抽出して、箇条書きで見やすいレジュメが書けるようになり、教師による添削の時間もテーマ 1 に比べるとだいぶ短縮した。しかし、若干名テーマ 2 でも箇条書きができていなかったり、指示と違うことをしたりする学生がいたため、秋学期にも引き続き指導が必要である。

学期後半のリアクションペーパーの練習では、引用の練習も兼ねて、クラスで読んだ資料を引用するように指示したが、主に 2 つの問題が確認できた。一つは、資料の中の「＜一般論＞。しかし、＜主張＞。」という部分の一般論の部分だけを引用して、「筆者は～と主張している」というような書き方をする学生が数名おり、誤読のために間違った引用をしているということである。もう一つは、筆者の述べていたことをまるで自分の意見のように書いている学生が数名おり、資料に書かれている意見と自分の意見の書き分けができていないということである。自分で調べた資料を使ったレポートの場合には、資料を正しく理解して引用しているか、引用と自分の意見の区別ができているかを教師が判断するのは難しいが、クラスで読んだ資料だけを引用して書かせたことで、これらがまだできていないということがわかった。秋の大学生の日本語 D でも引き続き、練習をしてもらいたい。

[観光]

担当者名： 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 5 名

結果と課題

履修生は 5 名であったが、1 名休学だったため、実質的には 4 名の少人数のクラスであっ

た。学生たちは大変真面目で、課題を常に期日を守って提出した。また、総じて日本語力が高く、大変指導しやすいクラスであった。小さいクラスであったため、レジュメやレポートのフィードバックには個別指導を取り入れた。レジュメは、1 回目の練習では、資料の文をそのまま抜き出したものが目立ったが、文を名詞化する練習をしたため、2 回目は見やすく簡潔にまとめられるようになった。レポートも、事前に提出させたドラフトの内容・構成、引用、日本語について個別にフィードバックした。リライトでは、見出しの書き方などの体裁面や参考文献の書き方に問題の残るレポートもあったが、概ねフィードバックにそって修正されよく書けていた。コースの振り返りでは、学生達から、レポートに関して、日本語で書いたのは初めてだったが、満足できる仕上がりになり自信が持てたという声が聞かれた。今後も、できるだけ個別指導を取り入れ、丁寧なフィードバックを心掛けたい。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名： 三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 8 名

結果と課題

履修者が 8 名で、学生の様子が把握しやすいクラスサイズであった。また、真面目な性格の学生が多かったため遅刻や欠席、課題提出の遅れも少なく、いい雰囲気のクラスだった。学生間の日本語のレベルにはやや差があったが、初年次の学生として、大学で必要な日本語がどのようなものなのか、大学で学ぶということはどういうことなのか、基本的な部分はこの授業を通して全員が理解できたのではないかと思う。学期末に学生からもらったコメントからは、レジュメやレポートが日本語で書けるようになったことや、日本語でディスカッションできたことへの満足感や達成感が感じられた。しかし、日本語力に関しては、最後まで引用や参考文献の書き方の間違いが散見されたため、学生は今後も繰り返し練習が必要だと思う。また、レポートを書くのが初めてだという学生も多く、どのような表現をレポートで使えばいいのか分からない学生もいたため、今後はレポートを書く際の体裁や引用のルールなどに加えて、よく使われる日本語表現も導入していきたいと考える。

[心理・福祉]

担当者名： 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 9 名

結果と課題

履修生は、9 名と比較的少人数で日本語のレベルもほぼそろっており、真面目な学生ばか

りであったため、指導しやすいクラスであった。日本語でレジュメもレポートも書いたことのない学生が大半であったが、レジュメに関しては、コースを通して 2 種類の資料を読み、それぞれの資料に対してレジュメを書く練習ができたため、2 回目のレジュメは 1 回目のものより体裁も整い内容を簡潔にまとめることができるようになった。リアクションペーパーも同様に 2 回練習したため、2 回目には書き方のコツがつかめたとみられる。レポートは、まずアウトラインを作成させ、次にドラフトの作成、さらにリライトをさせるなど段階を経て指導したため、最終版は内容・構成が整ったものが提出された。一方で、引用の仕方や参考文献の書き方などに問題の残るレポートが複数あった。レポートのドラフトの段階で、内容・構成、引用・参考文献、日本語などを自己評価するチェックシートを配付し、学生自身でレポートを見直し修正するように促したが、その効果が十分に認められなかったのが残念だった。

少人数のクラスだったため、レジュメやレポートについて、できるだけ個別指導の時間を取り入れたが、今後は、レポートについて、テーマに適した文献の探し方、引用の仕方や参考文献の書き方、序論・結論で用いる表現などもさらに丁寧に指導できるよう心掛けたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

＜大学生の日本語 C6、7、8＞

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、「聴く」「話す」活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションの仕方を身につけることを目指した。

春学期の機能表現を復習しつつ、比較対照、有識者の見解への同意、部分的な同意と反論などの機能表現を導入し、スライドを用いた 5 分のプレゼンテーションを計 4 回行った。発表スライドにはディスカッションのための質問も入れて、質疑応答の後でディスカッションをさせた。テーマ 1 は、各自がまずスライドを作ってグループの中でお互いに発表の練習をして学生間評価をし、さらに教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて再度グループの中で発表した。テーマ 2 とテーマ 3 はグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。最終課題は個人の発表とし、全員が皆の前で発表した。また、上記のプレゼンテーション以外に、将来の就職活動を見据えて「高校時代に力を入れたこと」というテーマで自己分析をしてグループで共有をし、短い文章にまとめて 1 分程度のスピーチをするという活動も行った。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名： 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 14 名

結果と課題

全員、春学期から継続して学ぶ履修者であったため、プレゼンテーションの基本的な形式や学習のスタイルに慣れていた。そのため、グループ活動では協働している様子が窺え、発表後のディスカッションも、春学期より積極的に参加していたように感じる。課題であった発表時のアイコンタクトは、なかなか改善しない学生もいたが、以前に比べて、意識して発表しようとする学生が増えた。一年間の学習を通して、プレゼンテーションの仕方を習得したように感じた。しかしながら、春学期同様、教師の指示や課題指示とは異なる課題作成をするなど不安な点が見られる履修者もいた。授業では、課題指示を繰り返し伝え、フィードバックも丁寧に対応するように心掛けたが、このような支援が必要な履修者に対するよりよい対応については引き続き課題としたい。

[社会・経営]

担当者名： 武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 10 名

結果と課題

雰囲気は悪くないクラスではあったが、韓国の学生が固まって座る傾向があり、中国とベトナムの学生は近くに座り和気あいあいとしていた。10 名しかいなかったため、個人での発表にもグループ発表にもディスカッションにかける時間を十分にとることができた。その際、質疑応答のやり取りがスムーズな学生と、たどたどしく自分の意見がうまく言えない学生との差が大きいと感じた。書くとまとまった文が書けても、同じようにスラスラと口頭で話せるわけではない学生もいた。発表は聴衆を意識し、アイコンタクトをしながら発表するよう指導したにも関わらず、最後まで、原稿に目を落としたまま発表するという学生がかなりいたのは残念だった。今後も課題となる日本語の正確性、発音・イントネーションについては、個々の努力に期待したい。

[経済・理学]

担当者名： 武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 21 名

結果と課題

履修者のうち実質 18 名が常に出席していた。人数は多かったが、比較的まとまりがよくグループ活動ではどの学生と組ませても協力的に行っていた。積極的にディスカッションに参加し発言する学生はある程度同じ学生ではあったが、自分の関心あるトピックの話し合いや質疑応答には、きちんと反応ができる学生が多かった。日本語力という点では、まだまだ底上げが必要な学生も多く、その点では課題が残るが、発表の回数を重ねれば重ねるほど、指摘した点を改善し、よりよいプレゼンテーションができる学生が多かった。今後も課題となる日本語の正確性、発音・イントネーションについては、個々の努力に期待したい。

[法学・異文化]

担当者名： 数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：32 名（PEACE6 名、 他 26 名）

結果と課題

この科目は「大学生の日本語 C6,7,8（法異）」と「PEACE 日本語 6,7,8D」が併置された科目である。春学期に大学生の日本語 A を履修した学生に、9 月入学生の学生と春 J5 レベルで学んだ学生、計 9 名加わり、32 名が履修登録した。ただし、退学、休学、連続欠席した学生もいたため、学期後半は 28 名が出席した。

秋学期に加わった学生たちにとっては、プレゼンテーションの表現や出典の書き方、参考文献の書き方など新たに学ぶ内容が多かったが、春から学んでいる学生とペアやグループにして、わからない部分は教師が説明するだけでなくグループ内でも説明し合ってもらった。グループ発表は準備や発表の日に欠席してしまう学生もいて、大変なグループもあったが、出席した学生が責任をもってしっかり進めていた。グループ発表の際は 8 グループで、発表後のディスカッションも活発で、聞いている学生の態度もよかった。

しかし、最終課題の個人発表は 2 回の授業で 28 名に発表させたが、人数が多く発表後のディスカッションの時間はとれず、ディスカッションをする代わりに最後にリアクションペーパーを書かせたが、発言の機会がないまま大勢の発表を聴くのはなかなか難しいようで、話を聞かずに別のことをしている学生もいた。今後は最終発表の進め方についても工夫をしたい。

[観光]

担当者名： 斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名

結果と課題

１名が休学で、3 名という小さい規模のクラスであったため、個別の対応ができた。その一方、グループ活動では常に同じ３名のグループになり、学生にとっては他からの刺激を受ける機会が少なかったことは残念であった。授業では春学期に発表の基礎を学んでいたので、本論部分の各テーマ、「比較」、「同意」、「同意と反論」の考察の深め方について注力し、指導することができた。3 名のうち 2 名は非常に真面目に全ての課題に取り組み、その結果、最終発表では、内容、話し方ともこのクラスの目標とするレベルに十分到達できていた。ただ１名は遅刻や欠席が多く、クラスに PC を持ってこないことも多かったため、活動に十分参加できず、最終発表もスライドは提出されたものの、定められた日に発表をすることができなかった。出席や課題提出の期日を守ることの大切さなど自己管理面で指導や支援が必要な学生への対応が今後の課題である。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名： 斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 7 名

結果と課題

学部生６名と特別外国人留学生 1 名で構成されたクラスであった。学生は皆協調性があり、クラスの雰囲気は明るかった。ただ学部生の中でも多少のレベル差があったことに加え、特別外国人留学生１名は日本語レベルが一段階低く、全体のレベル差はかなり大きかった。そのため、前半は春学期の復習も交えながらクラスを運営した。特別外国人留学生は日本語での発表経験がなく、テーマ 1 の個人発表はかなり課題の多いものであった。しかし、その、テーマ 2、テーマ 3 でグループ発表を経験することで、発表の基本的な構成や口頭表現を学ぶことができ、最終の個人発表では発表らしい発表ができていた。クラス全体ではグループ活動において、お互いに気を使うのか、発表の担当箇所以外の部分の問題について、他のメンバーに指摘したり、発表全体の論理展開の一貫性について考えることが十分できていなかったことがように思う。今後はグループ発表で、グループ全員が発表全体をより良くするため貢献する姿勢が学べれば良いと思う。

[心理・福祉]

担当者名： 斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 8 名

結果と課題

おとなしい学生が多かったが、その分、各自が毎回の課題について自分なりに考えを深め、工夫しながら取り組んでいる様子が見られた。春学期に基礎的なことは学べていたので、今期の目標である、各テーマ「比較」、「同意」、「同意と反論」の考察を説得力のあるものにするためどうすれば良いかを考えながら授業を進めることができた。その結果、最終発表では全員が発表の構成や表現が使えていただけでなく、独自の考えを述べることもできていた。グループ活動では、リーダーシップのある学生に他の学生が少し引っ張られる様子がやや気になったが、全体としては協力的に進めることができ、特に分担に不公平が生じるということはなかった。課題は質問への対応である。質問を受けた際、答えが冗長になる傾向があり、質問の要点からずれてしまうということも見られた。質問のポイントをしっかりと把握し、決められた時間内で適切かつ簡潔に答えられるようにしていくことが今後の課題である。

[GLAP]

「大学生の日本語 C」　は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

＜大学生の日本語 D6、7、8＞

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、「読む」「書く」活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な力を身につけることを目指した。

学期の前半は『上級日本語教科書　文化へのまなざし』の「個性と学び」、後半は生教材の「AI」に関する読み物を扱った。学期の前半と後半それぞれ、資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B の読み物を分担して読み、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を指導し、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。春学期の大学生の B では直接引用を中心に学

んだが、秋学期の大学生の日本語 D では直接引用の復習と共に間接引用も扱い、総合的に引用の練習を行った。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書　文化へのまなざし』、東京大学出版会。

新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社。

井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来――2030 年雇用大崩壊』、文春新書。

小林雅一、2017、『AI の衝撃――人工知能は人類の敵か』、講談社。

[文学]

担当者名： 長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 14 名

結果と課題

読み物の読解とレポートの課題を通じて、学習者は一貫性の大切さを徐々に理解し、読み手にとって分かりやすい文章を書くことに意識を向けるようになった。しかし、論点を絞り、アイディアを整理し、引用を交えながらレポートをまとめるという作業は、多くの学習者にとって難しいと感じられている。特に、日本語や文章作成に不慣れな学習者にとっては、資料を引用しながら自分の意見を述べるというレポートの課題が高い難易度となっている。このような状況から、今後は論点の絞り方やアイディアの整理方法についての指導が重要となる。学習者同士で疑問点を共有しながら、段階的にスキルを向上させ、自信をつけるための仕組みを整えることが必要である。

[社会・経営]

担当者名： 井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 11 名

結果と課題

今学期は、大学生の日本語 D6、7 クラスの学生が 9 名、総合日本語 D6-8 クラスの学生が 2 名の合計 11 名がこのクラスを履修した。履修学生は、春学期に「大学生の日本語 B」「総合日本語 B6-8」を履修しており、授業の進め方についてはすでに把握していたので、ペアやグループ活動を多用し、課題に取り組んでいってもらった。学生は、自主的かつ積極的に活動に取り組み、遅れ提出はあったものの、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなして

いった。また、授業運営に協力的であったので、一学期間を通して順調に授業を進めることができた。

レジュメに関しては、正確な日本語でのまとめ方、名詞止めで箇条書きにするなど、まだ課題も見られるが、構成や視覚的な工夫もなされていて、学んだことが活かされていた。レポート作成では、引用の仕方や参考文献の書き方に細かいミスはあるものの、評価項目を何度も確認しながら、自分の意見と他者の意見をしっかり区別することを意識してレポート作成に臨んでいた。しかし、一部の学生のレポートの中には、引用部分と自分の意見の区別はできていたが、なぜその文を引用したのか、自分の意見との関連性が見られない箇所があった。今後はレポート作成の準備段階で学生に意識させたいと考えている。

レジュメや論理的なレポートの作成スキルなど、このクラスの目標は概ね達成したように思われる。今後、様々なクラスでレジュメやレポートの課題が出されると思うが、このクラスで学んだことを活かし、実践を通してレポートのスキルを学生自身で身につけていってもらいたい。

[経済・理学]

担当者名： 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 25 名

結果と課題

今学期は「大学生の日本語 D」の履修者の他、「総合日本語 6-8D」の NEXUS の学生 1 名が受講した。春学期同様、1 限ということもあり遅刻者もいたが、出席率、課題の提出率は比較的よかった。春学期より継続して履修する学生が多かったため、学習のスタイルやレジュメ・レポート作成の基本的なプロセスには慣れていたが、秋学期に学習した間接引用や、図表の引用については、なかなか定着させることができなかった。また、引用を根拠として自分の意見を論述することに苦手意識を持つ履修者もいたため、レポート作成の前段階で意識化させることや繰り返しの練習が必要だと感じた。今後も自律的な学習ができるような指導方法を模索していきたい。

[法学・異文化]

担当者名： 武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 29 名（PEACE 6 名、他 23 名）

結果と課題

総勢 31 名という大所帯であったため、出欠の管理から課題管理まですべてにおいて時間

がかかった。しかしながら、本クラスは優秀な学生が多く、9 割の学生は毎回、遅れずに課題を出し、優秀な成績をおさめている。若干名 D が付いた学生には、欠席が続いたこと、未提出の課題が多いことが店員として挙げられる。もっと早い段階で繰り返し提出を促していれば防ぐことができたかもしれないと心残りがある。一人一人にきめ細かい指導はできなかったが、修正されたレポートやレジュメ、リアクションペーパーなどを見てみるとこちらの意図が伝わって、改善されていることがわかった際は、学生が理解していることを確認でき嬉しく思った。大人数のクラス運営をいかにうまく回していくかは教員自身の反省点として残るところである。

[観光]

担当者名： 森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：秋学期 5 名

結果と課題

今学期は 1 名の休学者を含み、履修者数は 5 名であった。授業に参加した学生達は、基本的なレジュメとレポート作成は概ね理解しており、課題にも真摯に取り組んでいた。レポートの作成では、春学期の学習項目を復習しつつ、さらに、間接引用、接続詞の有効な使い方などを学んだ。レポートのフィードバックに関して、書き方は身についていたので、内容に関するフィードバックを中心に進めた。授業後の振り返りでは、春学期よりレポートを書くスピードが上がったとコメントしていた。また、レポートの内容から客観的な物の見方や批判的なものの見方をしている学生も見られた。課題としては、春学期とほぼ同じスケジューリングで進んでいたため、やや単調に感じてしまった学生もいるようであった。1 年間のクラスにおいて、学生のモチベーションをどのように持続させていくか、今後の課題としたい。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名： 森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：秋学期 6 名

結果と課題

今学期は 6 名全員が春学期からの継続学生だった。全員、春学期に B を終えてからの履修であったため授業の流れは把握しており、レジュメやレポートのピアリーディングも積極的にできていた。レポートの作成では、春学期の学習項目を復習しつつ、さらに、間接引用、接続詞の有効な使い方などを学んだ。レジュメやレポートのフィードバックに書かれて

いるコメントから学んだことをしっかりと活かし、回を重ねるごとにライティング力の向上が感じられた。授業後の振り返りでは、この授業での学びが基盤となり他の専攻科目や教養科目でもレポートの書き方が上手にできるようになった、立教大学に入る前はレポートを書けなかったが 1 年を通じ書けるようになったとコメントしており、書く力を身につけたという実感がモチベーションにもつながっていることがわかった。課題としては、より良いレポート作成に向けたフィードバックの方法について調べ、今後の授業に生かしていきたい。

[心理・福祉]

担当者名： 森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 9 名

結果と課題

今学期は、春学期からの継続学生が 8 名、総合日本語の学生が 1 名、合計 9 名の履修者だった。全体的に毎回のクラス活動に積極的に参加し、各課題に熱心に取り組んだ。読解では 2 つの読み物を扱ったが、レジュメは 1 つ目より 2 つ目の方が全体にまとめ方がよくなっており、内容の要点を押さえることができてきたと感じた。レポートに関しては、まだ引用表現や参考文献の書き方に細かいミスはあるが、全体の構成に注意し、自分の意見と他者の意見を明確に区別するという意識は、身に付いたと思われる。授業後の振り返りでは、リアクションペーパーやレジュメ、レポートの書き方を学ぶことができ日本語能力も向上したなどのコメントがあった。課題としては、表現クイズでは引用表現は理解できていたようであったが、提出レポートでは適切に使えていないものがあった。今後は細かいミスにも注意し、練習を増やすことで定着を図りたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 D」 は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

2023 年度　NEXUS　日本語科目　授業記録

コースの概要

本学では 2022 年 9 月より新しい外国人留学生受け入れ制度「Rikkyo Study Project」を開始し、より多くの外国人留学生を受け入れ、本学内にて一層の国際交流を図ることになった。このうち NEXUS プログラムは、入試時点では日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる日本語能力（日本語能力試験 N3 程度）を目安として求めている。NEXUS 日本語科目は、9 月に入学した正規学部生が 4 月から既存の学部カリキュラム

（日本語による授業）で学べるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。各科目の詳細は次に示す通りである。

＜NEXUS 日本語 A＞

担当者名： 長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

読解教材を中心に、ディスカッション、リアクションペーパー作成、要約、分担読解、レジュメ作成、プレゼンテーション、レポート作成のためのアイディア整理、引用など、様々な練習を行った。具体的な読解教材としては、「若者」、「観光」、「創造性」の記事を使用した。授業では、最初に記事を読む前に関連するトピックについて話し合い、その後、クラス全体でキーワードの確認を行い、各自が読解に取り組む流れで進めた。読解後は、読解内容の確認や前述した様々な練習を通して、読解内容の理解を深め、意見を述べる力に繋げていった。最終テーマである「創造性」の回では、「創造性を育むためにはどのような教育が必要か」というテーマで小レポートを書くことを課し、最終日にレポート内容の発表を行った。

結果と課題

学期の初め、今回の学習者の日本語運用能力に対し、授業で取り扱った教材は難易度が高かったようだ。全ての学習者が非漢字圏の出身者であったことから、新しい漢字の語彙を理解するのに時間がかかっていた。この状況下で読解内容を理解することは一層難しい作業であり、特に未習の語彙が多い中、内容を理解するのに苦労していた。また、理解できたとしても、自分の意見をわかりやすく説明することにも苦戦していた。

しかし、キーワードを事前に確認し、文章構成にも留意しながら読むことで、抵抗なく読解に取り組むことができるようになっていった。授業では、学習者が苦手とする漢字語彙や他の授業で指摘されているポイントにも配慮しながら、苦手な部分が克服できるように工夫した。その結果、学習者は読解や意見を述べる際のコツをつかみながら、限られた時間内で読解内容の要点を押さえ、分かりやすく意見を述べることができるように改善されていった。

他の授業との連携や、授業時間外での主体的な学習が、日本語力向上に効果的であったよ

うだ。今後も学習者の状況を注視し、必要なサポートを積極的に提供していくことが重要だと思われる。

＜NEXUS 日本語 B＞

担当者名： 山内薫

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

資料を読んだり、調査をしたりして、その内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

本クラスでは、近年の消費者行動の話題を軸とし、ディスカッションやプレゼンテーションを行った。具体的には、近年の消費者行動の連載記事について、同一の内容あるいは担当箇所を各自で読解した後、各自あるいはペアで理解を深めながら、スライドを作成した。なお、各自で全体ディスカッションの際の視点を考え、スライドに盛り込んだ。作成後は、一人 10 分程度の発表を行った。また、リアクションペーパーの作成も定期的に行った。

学期中盤には、アンケート調査の活動を行った。まず、近年の消費者行動の話題に関連する各自のテーマを考え、アンケート調査を実施した。その上で、スライドを作成し、日本人学生 3 名の参加のもとで 20 分程度のプレゼンテーション及び質疑応答を行った。また、プレゼンテーション後に、小レポートの作成及びリライトを行った。なお、毎週、担当教師から、プレゼンテーションあるいはリアクションペーパーのフィードバックを受けた。

結果と課題

新学期開始時より 4 名の履修生が全員揃うことが少なく、1 名の学生は学期途中より欠席が続いたため、分担読解及びスライド作成といったペアで取り組む活動がスケジュール通りにいかず、調整を要することが頻繁に生じた。また、クラスには日本語学習力に不安を抱える学生がおり、新学期より定期的に相談を受けた。当該学生においては、日本語学習への真摯な取り組みから、学期中盤には、自身の日本語力の上達を実感し始めたと申告があり、新学期に困難を要していた授業内容の理解も十分にできている様子が窺われた。一方で、日本語力に自信を持っている学生においても、担当教員からのフィードバックを積極的に取り入れ、日本語学習に対する真剣な態度が窺われた。アンケート調査のプレゼンテーションでは、3 名とも聞き手への配慮や伝え方の面が大変よく、ディスカッションにおいても、鋭い観点より意見交換を行うことができていた。一方、リアクションペーパーでは、構成立て

て説明することができていなかったり議論の内容でのまとまりが十分ではないことを理解できていない学生や日本語面で毎回同様の間違いを繰り返す学生などがいた。今後、リアクションペーパーのフィードバックにおける効果的な方法について考えていきたい。

＜NEXUS 日本語 C＞

担当者名： 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

視聴覚教材を視聴してその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

10 分ほどのテレビ番組を視聴覚教材とし、番組内容に関する練習問題をして内容の理解を確認したうえで、ディスカッションを行いリアクションペーパーを作成させた。コースを通して、「市役所の仕事」「高度経済成長」「SDGs」「男女平等」「少子高齢化」「選挙」と 6 つのテーマを取り上げた。「市役所の仕事」と「SDGs」では、ビジターセッションを設け、それぞれのテーマについて日本人学生とディスカッションを行った。「男女平等」では、学生の国と日本を比較して、PPT を用いたプレゼンテーションを行い、小レポートを作成させた。小レポートはフィードバックをして修正稿を提出させた。

結果と課題

履修学生 4 名のうち 1 名は、体調不良のためコース中盤から欠席が続き履修を断念することになったが、3 名は真面目に出席しどのテーマに対しても前向きに取り組んでいた。コースはじめは学生それぞれに日本語力の不足が目立った。10 分間という短時間のテレビ番組でも内容を十分に聞き取ることができなかったり、ディスカッションで長々と話すだけで要領を得ず自分の意見を明確に表現できないことがあった。学生もそれぞれの課題を自覚し、練習を重ねることによって徐々に力を伸ばしていった。聞き取りが苦手な学生は、授業後に自主的に同じテレビ番組を何度か視聴し復習していたようである。また、意見をまとめて発表することが苦手な学生は、ディスカッションで意見を述べたり、ディスカッションの内容をまとめて報告したりするときに、時間を区切って発言させることが簡潔に意見を述べる練習になったようである。リアクションペーパーに関しても、いずれの学生もコースはじめには 3 文程度しか書けなかったが、終盤には十分な長さで構成が整ったものを書くことできるようになった。6 つのテーマに関してはそれぞれの語彙リストを提供し、各自自

習してからクラスに臨むよう指示していたが、3 名の学生全員が語彙リストが非常に役に立ったと振り返っていた。

ディスカッションでは、司会者と報告者を 1 名ずつ振り分けていたが、少人数のクラスのため、1 名欠席すると、2 名のクラスでは司会者と報告者の役割分担がしにくく、教師が司会を務めることが何度かあった。ディスカッションで、意見を述べるだけではなく、司会者として話し合いをリードしたり、報告者として話し合いのまとめをしたりする練習が十分にできなかったことが残念である。今後の課題としたい。

＜NEXUS 日本語 D＞

担当者名： 保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材
NHK 高校講座
NHK for School
菅谷明子(2000)『メディア・リテラシー - 世界の現場から』岩波書店

コースの目標

教材を視聴したり、資料を読んだりして、その内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

視聴覚教材の視聴、ならびに新書の読解を通して、テーマについての知識を身につけ、口頭での内容説明や発表で理解したことを述べる練習を行った。その上で、ディスカッションやリアクションペーパーの作成を通して、自身の考えを形成、表現し、テーマについての理解や考えを深めた。

学期中盤にはメディアリテラシーについてのレポートを 1000 字程度で執筆した。

結果と課題

履修者 4 名であったが、学期中に 1 名が諸事情により出席が叶わず、中盤以降 3 名でコースが進められた。学生は、若干の個人差は見られたものの授業活動や課題に意欲をもって取り組んでいた。

使用教材は上記のとおりであるが、学期開始直後は、難度が高いように思われた。だが、今学期の学生のために語彙リストが用意されたため、学生達はそれを手がかりに、当該テーマについての語彙を理解し身につけ、次第に教材の内容を理解できるようになっていった。学期後半には初めて試聴する内容であっても、大意の把握ができるようになった。この結果

を振り返ると、今学期の学生にとって教材のレベルは適切であったと言ってよい。内容面においても、メディアや都市計画を考える上で適した内容で、学生の興味や必要性とも合致していたと考える。

また、学期を通じてテーマごとにリアクションペーパーを作成したが、回を重ねるごとに、書く内容がアカデミックで充実した内容になり、具体的な記述も増していった。また、表現や語彙の使用も正確性が高まり、新しく身につけた語彙を効果的に取り込む様子も見られた。

一方で、口頭の産出面では課題が残る。学期開始時に比べると、視聴した内容の要約や内容質問への返答は理解しやすくなったが、表現や語彙の使用の不正確さによって、わかりにくく思われることもあった。今後、正確性の強化を図りつつも、即応力も身につけられるような授業を実施していきたい。

＜NEXUS 日本語 E＞

担当者名： 数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

学部の学修のために必要な日本語力、姿勢、行動について理解し、実践することができる。また、所属学部が扱う専門書を活用して日本語学習を行い、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付ける。

授業の方法

この科目は NEXUS 日本語 I クラスと連動する形で進めた。各学部学科が指定する図書を読み進めていくために、学期開始時は、漢字語彙リストの使い方、オンラインツールの利用方法、図書館のデータベースの利用方法、読解ストラテジーなどを指導した。さらに、論理的かつ批判的に考える力が求められること、資料を調べた場合には出典を示す必要があることなど、大学で期待されることを伝えた。

また、自身の日本語学習の課題を明確にし、自律的に学んでいくために、学期開始時に目標と課題を考える時間を設け、学期中盤と最終日にはこれまでにできるようになったことを振り返って、今後の目標と課題を考え、それをクラスで共有させた。

さらに、専門分野の内容について説明したり、意見を述べたりする力を養うために、I クラスの課題図書で学んだことのうち、他の学部の学生に紹介したい内容を発表してディスカッションをするという活動を 9 回行った。そのうち 2 回はボランティアの日本人学生に発表を聴きに来てもらい、ディスカッションに参加してもらった。前年度は学期の後半に E

クラスで課題図書のリアクションペーパーを書かせたが、今年度この活動は I クラスで毎週行った。

冬休みの課題としては、次学期からの講義に備えるために、各学部に関連のある動画を視聴してノートをとり、リアクションペーパーを書かせた。

結果と課題

4 名中 1 名は体調不良で長期欠席となったが、3 名はしっかり取り組んだ。昨年度は 7 回プレゼンテーションを実施したが、今年度は回数を増やし、9 回行うことができた。

各学部学科の課題図書の内容を他の学科の学生に対して説明するプレゼンテーションは、学期前半は説明が不十分で本を読んでいない人には理解が難しかったり、漢字語彙を読み間違えや発音の不正確さてわかりにくかったりすることもあったが、フィードバックと練習を重ねていくうちに、次第とわかりやすい発表ができるようになった。発表後のディスカッションでも、最初はただクラスメートから意見を聴くだけで終わっていたが、学期後半にはクラスメートの意見に対してコメントをしたり最後にまとめたりすることができるようになった。また、昨年度同様、今年度も経済学部、経営学部、異文化コミュニケーション学部の課題図書で環境など同じ話題が異なる視点で論じられることがあり、その回は専門分野の枠を超えて多角的に考えることの大切さを知る機会となった。また、NEXUS の別の日本語科目でも SDGs が取り上げられており、学期終盤のディスカッションではその科目で学んだこととも関連付けながら発言することができていた。ただし、日本人学生といっしょに履修している学びの精神の科目について聞いたところ、プレゼンテーションやディスカッションでは日本人学生からの質問や発言がまだ十分理解できないという学生もいたため、次学期に向けて、日本人の話す自然な日本語にも慣れていく必要がある。

聴解とノートテイキング、リアクションペーパーは、冬休みにそれぞれの学部に関連した動画を 4 つ視聴してノートをとる宿題を課した。昨年度はこれについてクラスで発表する機会が持てずフィードバックだけして、春休みのチューターとの活動で発表をさせたが、今年度は視聴した一つについて H クラスで発表をする機会を設けた。ビデオであればテロップが流れるのでノートもとりやすく、すでに課題図書で学んだ内容であれば難しくないということだが、新しいテーマになると、一度に理解するのはまだ難しいようだ。今後も練習を重ねてもらいたい。

＜NEXUS 日本語 F＞

併置科目の J5、6 文法を参照

＜NEXUS 日本語 G＞

担当者名： 任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 4 名 使用教材：独自教材

コースの目標

漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業の方法

今学期は NEXUS プログラムが学部への着地を目標としていることを意識し、学部で出会う可能性が高い漢字語彙を学習内容とした。具体的には、1）シラバスの漢字語彙、2）専門図書に書かれている漢字語彙、3）NEXUS 日本語科目の漢字語彙、の 3 つを扱った。1）に関しては、NEXUS 日本語科目のシラバスに繰り返して登場する漢字語彙（履修、単位など）を初回から紹介し、読み方を確認した。また、翌週には読みの問題を出題し、学部生活に欠かせない漢字語彙は必ず覚えるように指導した。2）に関しては、4 名の所属学部（異文化コミュニケーション学部、経営学部、経済学部）が指定する専門図書に書かれている漢字語彙の読み方を覚えてもらうように、毎週、各自の専門図書を 1～2 ページ程度音読してもらった。読み間違えた漢字語彙はその場で指摘し、正しい読み方が確認できるようにした。その後は、特に覚えたい漢字語彙を選んでもらい、読み方、筆順、例文を調べてもらった。他のクラスメートにも覚えてもらい漢字語彙は板書してもらい、例文とともに紹介をしてもらった。3）に関しては NEXUS 日本語科目 C と D の語彙リストを使い、毎週クイズを実施した。C と D クラスで動画を視聴して内容を理解する上で必要な漢字語彙を優先に出題し、主に読み方と意味を確認した。また、クラスで取り上げられた漢字語彙はいつでもどこでも復習ができるように、Google ドキュメントに記録をしてもらった。

結果と課題

漢字の読み書きを自身の課題として認識しており、授業内外の漢字学習に熱心に取り組んでいる学生が多かった。毎週実施したクイズ（読みの問題 10 問）では、満点に近い点数を得る学生がほとんどだった。授業で行う音読に関しては、時々準備不足の学生もいたが、全体的に予習、復習をしっかりしており、読み間違えた漢字はメモをし、その場で読み方と筆順を覚えるといった積極的な態度が見られた。

今学期は非漢字圏が多く、全体的に漢字を読む力が弱かったため、主に読み方の暗記を優先課題としていた。その結果、最終日の振り返りで、漢字の読みには自信がついたが、手で書くことはまだ自信がないということを課題として挙げている学生が多かった。学部ではリアクションペーパーなど、漢字を手で書く機会が多いので、そのためにはさらなる練習が必要だということであった。また、今学期は、学部への着地を意識したあまりに、日常生活でよく使う漢字は取り上げることが少なかった。その結果、日々の生活でよく目にする漢字

についても学びたかったということが振り返りに書かれていた。今後の課題としては、漢字の読み書きをバランスよく指導すること、受講生が日本で留学生活を送るうえで必要不可欠な漢字をより楽しく学べるようにさまざまな活動を工夫すること、の 2 点が挙げられる。

＜NEXUS 日本語 H＞

担当者名： 小林千種

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活と大学生活における聞く力、話す力、書く力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。適切な待遇表現を用いたコミュニケーションをすること、プレゼンテーションをして小レポートを書くことができるようになることを目指す。

授業の方法

授業は学生生活で実際に必要と想定される場面で、尋ねる、誘う、依頼するなどの機能表現を含む聴解とロールプレイ、及びそれと並行してメールを書く、インタビュー音声を聞きとる、グループディスカッションをするなどの活動を組み合わせる形で行った。学期の中盤からは学生自身がテーマを決めたインタビュー調査を実施し、結果をまとめて発表と小レポートの形で報告するプロジェクトにも取り組んだ。プロジェクトではインタビューのテーマや質問内容の検討、インタビュー結果のまとめ、スライド作成と口頭発表、まとめのレポートの作成など一連の作業を通して、大学で求められる目的ごとの表現技術を身につけられるよう、演習を行った。

結果と課題

学生は意欲的で、毎回の様々な課題の提出もほぼ滞ることがなかった。授業での集中力も高く、その結果、毎回の授業で学んだことを確実に身につけていった。授業内外での日本人学生との接触や、授業での練習の成果が少しずつ積み重ねていく様子が窺えた。
課題としては発表の際の語彙の選択、複雑な場面での婉曲表現、漢字の読みなどが挙げられる。今後は日本人の学生等と交流し、なるべく多くの場面で積極的に聞き取りと発話の機会を持てるといいのではないかと思った。

＜NEXUS 日本語 I＞

担当者名： a クラス：数野恵理、 b クラス：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：秋学期 a クラス 2 名、b クラス 2 名 使用教材：独自教材

コースの目標

所属学部が扱う専門書を活用して日本語学習を行い、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付ける。

授業の方法

この科目は、各学生の所属学科指定の図書を 1～6 冊扱い、チュートリアル形式で進めた。今年度は 1 クラス 2 名だったため、毎回 50 分ずつ教員と学生が 1 対 1 で会ってチュートリアルを行なった。教員とのチュートリアルを行わない 50 分間は、その週に学んだことや考えたことをリアクションペーパーに書いてもらい、Canvas に提出してもらった。

授業の前に、学生は漢字語彙リストを活用しながら課題図書を読んでワークシートの質問に答え、学部のチューターの日本人学生 1 名に 100 分間の学習支援を受けた。チューターとの活動では、読んでわからない部分を確認したり、ワークシートの確認をしたり、図書の内容や学生生活に関するディスカッションをしたりさせた。授業では、前の週に提出したリアクションペーパーのフィードバックを行ったうえで、主に、1）わからない部分はないか、2）何が書いてあったか、3）最も印象に残った内容は何か、3）チューターとの活動でどのようなディスカッションをしてどのような気付きを得たかを話してもらい、その週の目標が達成できたかを確認した。また、次回までの準備や活動意図についても確認をして、より積極的に取り組むように促した。なお、最終週はチュートリアル形式ではなく、a、b クラス合同で最終発表をした。発表では、課題図書で学んだことのうち他の学科の学生に紹介したい内容を紹介して、考察を述べたあと、ディスカッションをリードさせた。

結果と課題

（a クラス）

昨年度は今後の課題として各学科で扱う課題図書の進度とワークシートの見直しを挙げたが、a クラスの履修者は昨年度 NEXUS プログラムの学生と同じ学科であった。そこで、一つの学科については、抽象度の高い章は学期後半に扱うなど、順番を変えた。もう一つの学科も、2 冊目の課題図書の難易度が高かったため、1 冊目は 1 回で扱う量を増やしてペースを上げて、2 冊目にかける時間を増やすことができた。

読解については、2 名それぞれに課題があった。1 名は予習の段階で抽象度・難易度の高い節があるとそこに時間をかけすぎて、時間が足りなくなり、最後まで読めずに授業に来ることがあった。次の節に進めば、もう少し具体的でわかりやすい内容になっていることも多いため、どうしてもわからない場合は、一旦その部分を飛ばして、先に進むように指示した。

次第と、わからない部分がある場合もまずは先を読んでみて、わからないところについては後からまた考えるということができるようになった。また、質問の内容もより高度なものとなっていった。もう 1 名は、課題図書は毎回しっかり指定範囲を読んでワークシートにも取り組んできていた。しかし、ワークシートの質問には答えられていても、実は表面的に文字だけを追っていただけで、それが何を意味するのか正しく理解していなかったり、誤読していたりすることがたびたびあった。チュートリアルの時間に確認ができたのはよかったが、今後は、ワークシートも単に情報を抜き出すだけでは答えることができない質問を増やすなど工夫をしていきたい。

昨年度は E クラスの学期後半に I クラスの課題図書に関するリアクションペーパーを数回書かせたが、今年度は I クラスのチュートリアルの待ち時間 50 分を使って学期を通して毎回リアクションペーパーを書かせたことで、この力はかなり伸びた。リアクションペーパーには今回学んだことと考えたことを書くように指示していたが、最初の頃は本に書いてあったことをまとめるだけでごく短い意見しか書かれていなかった。しかし、毎回のフィードバックにより、母国での状況を説明したり、課題図書を読んで考えたことを詳しく書けるようになっていった。また、1 名は最初のころは話題があちこちに飛んで一貫性のない文章を書いていたが、一つ話題に絞って、流れを考えながら読みやすい文章が書けるようになっていった。

（b クラス）

b クラスでは、異文化コミュニケーション学部に入学する予定の 2 名の学生と「異文化コミュニケーション領域」「言語研究領域」「通訳翻訳領域」「グローバル研究領域」「国際協力領域」という 5 つの領域に関する 6 冊の専門図書を読み、内容確認と議論を行った。b クラスの 2 名とも昨年度まで特別外国人留学生として日本語科目を受講していたため、日本語で書かれている文章を読むことには慣れていた。しかし、漢字語彙や抽象的な概念が多い専門図書を読むうえではいくつか課題を抱えていた。

2 名の学生が専門図書を読むときに感じる難しさとして挙げていたことは、1）漢字語彙を調べるのに時間がかかり、内容理解に至らない時がある、2）抽象的な概念は辞書を調べても理解ができない、3）ヨーロッパ出身であるため、アジア諸国、特に日本の社会的、文化的背景に関する理解が足りない、という 3 点であった。1）に関しては、「漢字語彙リスト」の活用や G（漢字）クラスでの活動への積極的な参加を促した。また、部首や知らない漢字語彙の前後の文脈などから意味を推測する力の重要性を伝えることで、「すべての漢字を調べないと専門図書が読めない」という先入観をなくすことができたと思われる。2）に関しては、母語や他の外国語で当該概念について検索をした上で、自分自身にとって分かりやすいことばでチューターや教員に説明をし、フィードバックをもらうことを提案した。その結果、難しいと諦めていた学生が積極的な態度で抽象的な概念と向き合うようになり、図書の内容も以前より深く理解できるようになった。3）に関しては、無料公開されている動

画（NHK 高校講座や小中学生向けに作られた個人 Youtube など）や時代劇などを紹介し、日本という国について楽しく学べるようにアドバイスすることで、ある程度課題を解決することができた。

このように、b クラスでは日本語（特に漢字）だけでなく、背景知識の不足が専門図書を読むうえでの困難点につながることが多々あった。授業外で容易にアクセスできるリソースを紹介するなどといった工夫を重ねてきたが、受講生の興味関心から離れている分野を扱う場合、文脈を理解する上で必要な背景知識を調べようとする態度が学生から見られない時もあった。学部での学びは、日本語だけでなく、日本という社会や国についての理解も不可欠であることを意識してもらうためにはどのようなアドバイスが必要なのか、そのためにチュートリアルを担当する教員はどのような役割を果たすべきかについては、今後さらに考えていく必要がある。

＜NEXUS 日本語 J＞

担当者名： 黄慧

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

独自の教材を使用し、学期を通して各回異なるテーマに焦点を当てた文章を読んだ。最初に、事前に提示された「読む前に」の設問に関する個々の見解を提示し、ディスカッションを行った。その後の読解活動では、精読、輪読、分担読解、ジグソーリーディングなど、様々な方法を使用し、文章を読み解いた。読み終わった後、読解に関する質問への回答時間を設け、各自が自らの考えを記述した後に確認作業を行った。最後に、読んだ内容に基づくディスカッションを行い、その内容をまとめ、リアクションペーパーを書いた。

結果と課題

学生たちは学期を通して、読解文を読むスキルがアップし、ディスカッションする際に自分の意見をしっかり述べられるようになった。また、リアクションペーパーも構成に従って正しい日本語を使って書けるようになった。学期途中からコーネーターの先生から音読の指示があったため、授業中に輪読を取り入れたが、音読を行うことで分からない語彙や文型が再確認でき、非常に有意義であった。学生たちは学習意欲が高く、前向きに授業に取り組

み、自律的に学んでいく姿勢を見せていた。自分の意見を伝えるだけでなく、ほかのメンバーの意見を真剣に傾聴してから、自分の意見を言うようにするなど、コミュニケーションの仕方も学べたように感じた。

今後の課題としては、次のような点があげられる。 1)複雑な文章を読み、その内容を的確に要約することは、高度な読解力を要求されるスキルである。リアクションペーパーを書く際に非常に大事なスキルであるため、要約のスキルアップを目指す必要があると思われる。 2)リアクションペーパーを書くスピードをアップさせることが大きな課題となっている。授業中は 15～20 分ほどリアクションペーパーを書く時間を設けているが、時間内に終わらないときがあった。 3)このクラスは読解の授業であったため、勉強した新しい語彙や文型について特に復習を求めることもなく、定着を図るクイズなども実施していなかった。学生たちがこれから大学で学んでいく際に必要な語彙や文型であるため、簡単なクイズを実施するなどして定着を図る必要があったのかもしれない。

2023 年度　NEXUS プログラム　学びの精神科目　授業記録

コースの概要

NEXUS プログラムの学生向けに 2022 年度秋学期に立ち上げた科目である。NEXUS プログラムの学生が、大学で学び始めるにあたり、大学で学ぶこと、また立教大学という場で学ぶことの意味を理解することを目標とする。

＜多文化共生社会と大学―やさしい日本語でともに学び、ともに生きる―＞

担当者名： 任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

多文化共生社会とはどのような社会かを自分の言葉で説明することができる。また、日本が目指している多文化共生の形や実現のための方法をヨーロッパやアメリカ、アジアの国々と比較し、それぞれの特徴を知ることによって、日本に暮らす多様な人々が真の意味で共生していくことを可能にするためには、日本に暮らす一人ひとりがどのような態度を持ち、どのように行動していくべきかについて考え、自分の言葉で表現することができる。そして、そのような日本の多文化社会の実現のために、日本の大学は何をすべきかについて考え、自分の言葉で提案することができる。

授業の方法

授業は全学共通科目（多彩な学び）「多文化共生社会と日本―やさしい日本語でともに学

び、ともに生きる―」（以下、「多文化共生社会と日本」）と一体的に運営した。「多文化共生社会と日本」の履修生 10 名と NEXUS Program の学生 4 名、教員 2 名、TA1 名で、週 2 回、やさしい日本語による講義、協同学習（ディスカッション）、個人及びグループ発表などの活動を行った。

結果と課題

2023 年度秋学期に入学した NEXUS Program の学生は 4 名だった。2 名は昨年度まで特別外国人留学生として本学で日本語科目を受講していた学生で、2 名は昨年度まで母国で高校生活を送り、今学期来日した学生である。

本科目の目標は、1）日本における多文化共生について理解を深めること、2）大学で学ぶ力を身につけることである。その目標を達成するための活動として、講義内容のノートテイキング、リアクションペーパーの作成、グループディスカッション、個人及びグループ発表、レポート作成、資料の読解など、種々の課題が出された。日本で日本語を母語や第一言語とする学生と一緒に日本語で講義を受けたことがない 4 名が上記の課題に取り組むためには、日本語能力（特に、アカデミック・ジャパニーズ）だけでなく、日本の社会的・文化的背景、日本の大学での学びに対する理解も必要であるため、全員が負担を感じていたようである。特に高校を卒業したばかりの 2 名の学生は、日本語能力の問題以前に、大学での学びについて不安を抱いていた。

学生の不安を解消するために、今学期は、次の 3 つを試みた。1）昨年度と同様に、授業後に提出するリアクションペーパーに関しては、「日本語相談室」の学生アドバイザー枠で確認をしてから提出するようにし、授業中に配布された資料の内容理解や発表の準備などにおいても積極的に学生アドバイザー枠を活用するように勧めた。2）授業前後の時間などを活用し、講義や活動の理解確認を行い、困っていることや不安に思うことはないかを確認した。3）毎回の講義の内容をまとめ、Canvas にアップロードし、自身のメモと照らし合わせながら復習できるようにした。また、学生が当該内容を理解するうえで必要な背景知識に関する NHK 動画（中高生向け）のリンクなども共有した。

その結果、学生がより積極的かつ意欲的に授業活動に参加するようになった。たとえば、最初はグループディスカッションに消極的だった学生が自ら手を挙げ母国の例を紹介したり、「多文化共生社会と日本」の受講生に対して疑問を提起したりするようになった。また、講義の内容のまとめのみだったリアクションペーパーが、学生の気づきや疑問点なども含まれるようになった。ただし、ノートテイキングについては、大きな変化はみられなかったと思われる。教員が毎回の授業後にメモを共有していたことが、かえって学習意欲を低下させてしまったのではないかという懸念が残る。この点に関しては、学生の学習スタイルや来日前の学習経験などを考慮しつつ、来年度以降、さらに工夫を重ねていきたい。

2023 年度　国際的協働のための国内インターンシップ　授業記録

コースの概要

教室での学びと就業体験を通して、自分と社会とのつながりを意識する。

＜国際的協働のための国内インターンシップ＞

担当者名：丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 9 名
使用教材：独自教材

コースの目標

就業体験を通して、大学 4 年間の学びの先にあるキャリアプランを考えるとともに全学での学び、また所属学部での学びがどう社会と結びついているのかを知る。教室での学びだけではなく、教室外での経験を通して、自分と社会とのつながりを意識するようになる。

授業の方法

事前学習、インターンシップ、事後学習の 3 部により構成する。具体的には春学期中に履修者の選考及び事前研修を経て、夏季休暇中に各企業にインターンとして派遣する。外国人入試による入学者は日本での就業体験、それ以外の学生は日本語非母語話者との協働体験が可能な日本での就業体験を予定している。派遣期間は 10 日～14 日で、秋学期に事後研修を実施する。

結果と課題

9 名の学生が履修し、計 5 社でインターンシップを行った。留学生は、そもそも働くこととはどのようなことなのかを知りたい、自助努力ではなかなかインターンシップの機会の機会を得ることができないため、日本で働くことに関心があるなど履修動機が様々で、日本語が母語の学生は「国際的協働」に魅力を感じて本科目を履修した。留学生の就職支援の専門家をゲストスピーカーとして、事前学習と事後学習に各 1 回招いた。インターンシップ先での経験から働くことについて積極的なイメージを持つようになり、全体として事前学習および事後学習での学生の取り組みは大変積極的で、協働学習の質も高かった。昨年度の振り返りで課題に挙げた、「与えられた仕事をする」以上の姿勢でインターンシップに迎えるような事前学習については改善ができた。その結果、将来に向けて努力をしたいと考えるようになったケースが出るなど、科目の目標はおおむね達成できたと考える。一方で、当該科目の目標への理解が行動につながらず、事前・事後学習の取り組みが芳しくないケースがあった。次年度からは、これまでの評価内容を踏まえつつ、評価方法を変更し、改善を図る予定である。

2023 年度　PEACE プログラム 日本語科目　授業記録
＜PEACE 日本語 1＞

コースの概要

日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。なお、J1 のコースに準拠する。

コースの目標

日本語を学習した経験のない者、およびそれに準ずる者を対象とする。PEACE1 コース全体の目標は、日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することである。

PEACE 日本語 1A：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

PEACE 日本語 1B：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

PEACE 日本語 1C：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

PEACE 日本語 1D：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

PEACE 日本語 1E：読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

PEACE 日本語 1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	・Exchanging greetings ・Learning some survival expressions ・Learning the writing system of Japanese language ・Learning basic numbers ・Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) ・Learning basic words(Date、Time expressions)
1	・Noun sentence ～は～です

	・Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど ・Noun modification(kinking nouns) ～の ・Particle “also、 too” ～も ・Particle(question marker) ～か ・Interrogatives なに・だれ・どこ ・Pronominal “one” ～の ・”please give me ---“ ～をください ・Counterword ① ～円、個、才、ひとつ ・Sentence ending particles ～よ、ね
2	・Polite speech and casual speech ・い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 ・Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも ・い／な Adjectives as noun modifiers ・Interrogatives どんな、どう
3	・Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 ・Adverbs indicating ‘degree’ ・Explaining reasons ので、から
4	・Verb groups、 dictionary form of verbs ・Polite and casual verb sentences ・Particle を(Object marker) ・～は～を V sentences ・Particle で(Location marker) ・Particle で(Instrument marker) ・Particle に／で(Destination/direction marker) ・Mimetic words ① Eating、drinking
5	・Giving and receiving something ① ・～は Space/area/pass を V(motion verbs) ・て form of verbs ・Making requests ～てください／～ないでください ・の：Noun equivalent marker ・V て、V て、V。 ・Asking permission/Giving permission/prohibition ～てもいい／～てはいけない ・Mimetic words ② Watching、seeing、speaking

6	・～は Object に V sentence ・Topic は V(Intransitive verbs) ・Particle に(Time marker) ・～から～まで ・Duration on time ～間 ・Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい ・Time expressions まえに、あとで、てから ・～と思う ・～だろう／だろうと思う ・Mimetic words ③ Condition of the body
7	・Sentence of existence and locatives いる、ある ・Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 ・だけ／しか ・N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、neither) ・N1 は A、N2 は B(Contrast は) ・Noun と／や、Noun/adjective/verb て form、V-たり V-たり Adjective/verb し ・～かもしれない
8	・V-ている(Continuous action、state) ・Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する ・が used to describe a condition、 scene before one's eyes ・～中(during、 while、 through) ・もう／まだ ・～ませんか、～ましょう ・Questions word ＋ か／も ・～んです ①
9	・Giving advice ～たほうがいい ・Particle に(amount of frequency per time unit) ・Adverbial usage of adjectives ・Noun になる ・Conditional ①：と ・Chang of state、 condition(adjective + なる) ・Mimetic words ④ Pain
10	・に(final destination)／を(point of departure) ・V-たことがある(experience) ・Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain

	・Third person's emotion/feeling/pain/desire ・Conditional ②：たら ・Even if　～ても

＜PEACE 日本語１A＞

担当者名：＜春学期＞ 保坂明香
　　＜秋学期＞ 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 1 名、秋学期 2 名 使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

J1 の文法と語彙の教科書に沿って、文法項目を導入した。導入後は基礎的な活用練習や変換練習を行い、理解の定着を図った。J1 で宿題として使用されている語彙の練習問題は授業内課題として扱い、授業中に解答をさせた。解答後に語彙クイズを実施した。

＜秋学期＞

進め方としては、毎回語彙の宿題確認とクイズを実施後、テキストに沿って文法事項を確認していった。例文で導入を行い、その後フラッシュカードや絵カードを用いた口頭練習をし、最後に短文作成などの産出練習を行った。

結果と課題

＜春学期＞

PEACE プログラムの学生 1 名のクラスである。当該学生は、新規事項の理解が速かったため、文法学習はスムーズに進んだ。今学期の全ての授業に出席し、意欲と目標をもって取り組んでいたが、教員との一対一の授業は負担が大きかったことが推測される。学生数が少ないケースを想定し、PEACE 日本語 1 の授業時間帯や配置も考慮に入れ、授業内容や活動を調整する必要がある。

＜秋学期＞

本科目を通して、使用できる文法や単語が増え、表現に幅が出たと感じられる。今後の課題として挙げられるのは、いかに学習者のモチベーションを維持していくかという点だと思われる。

学習者によっては、あまり学習に身が入らない日もあったため、その際は気分転換でアクティビティを取り入れる、現実で使える場面を提示する、などの工夫も必要であった。学習

意欲は学習者によってさまざまであるため、人に合わせて、学習意欲に寄り添っていく姿勢が重要だと感じた。

＜PEACE 日本語１B＞

担当者名：＜春学期＞ 冨倉教子
　　＜秋学期＞ 井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 1 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

学期開始後まもなく、コースの内容およびスケジュールが変更された。変更後は大学指定の文法の教科書をベースに新しい文型を導入し、その文型の意味、使い方などを学ぶと共に、簡単な口頭練習などを行なった。今学期カバーする予定の 10 課分をそれぞれ他の曜日と分担しながら、文法項目を学んだ。一回のクラスでは PPT などでターゲットとなる文型や表現の入った例文や、会話を提示。そこで何が行われているかを考えながら、文法項目の使い方などを確認。全体の概要を捉えてから、活用や助詞の使い方など細部を学習。練習としては学んだ文型を使用して質問に答えてもらったり、文を口頭で作ってもらったりした。またクラスでは毎回文作を行い、既習文法や語彙を使用して書く練習も実施。書くことにより文型や助詞などの細部にも着目することができ、正しい使い方を再度確認すると共にその正確性の向上を図った。一方、毎回様々なトピックについてフリートークも行い、学習者は自分の意見を表現しながら、既習単語、表現、文型の使用を確認し、さらには新しい語彙、文型などを学んだ。

＜秋学期＞

授業開始時に課の語彙クイズを実施した。クイズの後は、新出語彙を使った文作練習の宿題を一緒に確認していった。文法はテキストに沿って説明を行い、補足説明が必要な場合は、パワーポイントを使用した。テキストにある例文を確認し、パターンプラクティスを中心にした練習を行った後は、その課のターゲット文法を使って、日常生活や自分のことを話してもらい、文法の定着を目指した。

結果と課題

＜春学期＞

学習者は日本語教歴ゼロからのスタートであったが、回を重ねるごとにその成長は伺えた。ひらがな、カタカナの習得は早く、単語、文型に至ってもその意味や使い方などは容易

に理解していた。産出に関しては、特に文章などの場合では単語の濁点や長音などのミスが確認され正確性に欠いているところがあった。また助詞の使い方、活用などもさらなる復習および学習が必要である。ただし語彙、表現、文型に関して大枠は捉えており、実際にフリートークなどで、日本語で自分の言いたいことを表現できる長さと正確さは確実に上がってきていた。

今学期学習者 1 名だったためペアワークや協同学習ができず、また学習者も大変だったと思われるが、日本語習得に対するモチベーションは持続していたようである。

＜秋学期＞

今学期の履修者は 2 名と非常に小さいクラスであった。履修学生のこれまでの日本語学習背景が異なっていたため、同じペースで学習することが難しい場合は、教師が間に入り、3 人で練習や活動を行った。また、両者が会話の中に入れるよう、教師が中心となって会話を回したり、雑談を入れたりする等、日本語で話しやすい雰囲気作りに努めた。

学生は新しい文型項目の理解が非常に早く、すぐに応用できたため、授業を順調に進めることができた。出席率、宿題の提出率、語彙クイズの点数も非常に良好であり、その結果、優秀な成績を修めることができた。

課題点を挙げるとするならば、正確性を上げ、定着化を図ることであろう。特に活用や助詞などのミスが、会話練習や文作練習で起こることがあった。学生の意欲を削ぐことなくミスを訂正する指導の工夫、また、学生に意識化させることでミスを減らす指導の工夫が必要なのではないかと考えている。今後の課題としたい。

＜PEACE 日本語 1 C＞

担当者名：＜春学期＞ 小森由里
　　＜秋学期＞ 三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 1 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

コース前半は、平仮名と片仮名の導入・練習を行った。毎週 1 課ずつ進んだため、授業冒頭に Comprehension Check Sheet を用いて、その課で導入された文法項目の確認をした。コース前半は Comprehension Check Sheet を宿題としていたが、学生の負担を考慮し、コース中盤以降は授業中に練習問題として Check Sheet を扱った。また、絵教材などを活用し、ターゲットとなっている文型や文法項目を用いた簡単な会話練習をした。聞き取りの練習は、市販の聴解教材を使用して行った。学期末には、聴解の期末テストを実施した。

＜秋学期＞

文法の授業で学習した項目を中心に、市販の聴解教材を適宜使用しながら、聴解練習を行った。また、学習した項目が日常生活で使えるようになることを目標にした会話練習や、場面を設定したロールプレイを行った。文法の宿題は授業内で解答を確認・解説した。クラス内タスクとして、ほぼ毎回の授業でテキストのディクテーションと、質問を聞き取って自分の答えを記述する Q&A を実施した。さらに学期中にビジターセッションを 2 回行った。履修者はビジターに対して日本語で自己紹介し、趣味や自分の町、大学生活などの身近な話題についての会話活動をした。

結果と課題

＜春学期＞

履修生が 1 名だったため、その学生に合わせて授業の進度を調整した。これまで全く日本語を勉強したことのない学生ではあったが、平仮名・片仮名は短期間に習得し、新しい文法項目はすぐに理解することができ、コース前半は日本語を身に着けたいという意欲が感じられた。ただ、5 限目の授業ということもあり、コース中盤から疲れが見え始め、教師に背を向けたり机に突っ伏したりという態度をとるようになった。コーディネーターに注意されたことを契機に、コース後半には授業態度は改まり、真面目に授業に取り組むようになった。学生は、聴解は得意で、市販教材を使った練習ではたいてい 1 度聞いて正しく答えることができた。聴解の期末テストも大変よくできていた。会話は、相手が教師であるためか、興味のある話題の場合は積極的であったが、それ以外のトピックについては必要最低限のことしか話さず、まとまりのある会話をするのが困難であった。履修生が 1 名であっても、実践的な会話練習ができるように話題や練習方法を工夫することを今後の課題としたい。

＜秋学期＞

履修者が 2 名と少なかったが、どちらも欠席することなく授業に参加した。学習意欲に関してはやや波が見られたが、概ね真面目に授業に取り組んでいた。普段は英語開講の授業に出席することが多い履修者にとって、多くの聴解・会話練習に加えて、ビジターセッションという実践練習の機会を取り入れられたことは、履修者が日本で生活していくうえで自信に繋がったと思う。文字に苦手意識があった履修者もいたが、ディクテーションやＱ＆Ａでは学期の初めは聞き取った音と文字が一致しないこともあったものの、学期の後半はかなりの正確性とスピードをもって書けるようになった。両名とも日本語能力が大きく向上したと思う。

今学期は履修者間の日本語の知識や学習経験に差があったため、レベル差を考慮した授業を組み立てるのが難しかった。今後もレベル差のある履修者が同じクラスにプレイスされることがあり得るため、柔軟な対応を心がけていきたい。一人一人の弱点を把握し補いな

がら、生活のための日本語能力をのばすために、履修者がより実生活での使用をイメージできるような活動や練習を、今後さらに取り入れていきたい。

＜PEACE 日本語１D＞

担当者名：＜春学期＞ 保坂明香
　　＜秋学期＞ 保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 1 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

学習項目を実際使用する総合的なタスクやロールプレイを行った。また、聴解や読解（精読・速読・多読）の練習も適宜取り入れた。そして、学期中盤にボランティアを交えた授業活動を行い、学期後半にはプロジェクトを実施した。プロジェクトではスピーチ原稿とスライドの作成を段階的に進め、最終クラスでプレゼンテーションを行った。この発表は録画をし、PEACE のコーディネーターならびに担当教員がフィードバックを与えた。

＜秋学期＞

授業前半に学習項目の復習をし、後半には 4 技能の総合的な練習を行い、項目の定着と運用力の向上を図った。多くの場合、文章の読解から始め、読む練習とタスクの設定を合わせて行い、その後当該タスクに合った内容の作文を執筆させた。作文の修正後は口頭練習を経て発表を行う流れをとり、ピア間でフィードバックをしたり聞き取ったことを調べたりする活動に繋げた。

学期中盤にはボランティアを交えた授業活動を行い、学期後半にプロジェクトを実施した。プロジェクトではスピーチ原稿とスライドの作成を段階的に進め、最終クラスでプレゼンテーションをした。この発表は録画をし、PEACE の担当教員に視聴とフィードバックを依頼した。

結果と課題

＜春学期＞

履修者が 1 名で、インターアクションが教員に限られていたため、ボランティア参加のクラスは、日本語に触れ、学習の成果を振り返る機会が得られたという点で、実施の意義があった。履修者数が少ない場合は、ボランティアを交えた活動を積極的にコースに取り入れていくとよいかもしれない。プロジェクトも学生自身の工夫によって自主的に進められる内容であったため、今学期のコースに合っていたと思う。また、日本語でのアカデミックプ

レゼンテーションの基礎を学ぶことができたという点でも意義が認められる。総合スキルのクラスでは、PEACE 日本語のコース目標に適したタスクを設定し、一連の活動の中で日本語を使用したり新たに学んだりできるように、授業活動の検討をしていきたい。

＜秋学期＞

履修者 2 名は日本語の面において異なる能力を持ち合わせていたが、互いに助け合い、意欲をもって日本語学習に取り組んでいた。ただ、より多くの日本語のインプットを得るために、ボランティアを交えた活動をもう少しコースに取り入れてもよかったかもしれない。今学期はスケジュール上、ボランティア参加型の活動を 1 回しか実施できなかったが、今後はより積極的な取り入れと効果的な活用方法を検討したい。

PEACE のコースは今後も様々な能力の学生が共に学ぶコースになることが想定される。総合スキルのクラスでは、このような多様な学生達の能力やニーズに合った授業内容を検討したい。その検討に際し、国内で英語で教育を受ける学生達にとって必要な日本語力が何かを考え、能力育成に効果的なタスクや総合的な活動を実施していきたいと考える。

＜PEACE 日本語１E＞

担当者名：＜春学期＞ 武田聡子
　　＜秋学期＞ 武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 1 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

J1 の教材を使用して、作文と読解の授業を実施。家庭学習の宿題は出さず、基本的に授業中に実施することとした。作文は、書き直しを授業中に実施、読解は授業内ですべて終えるようにした。

＜秋学期＞

J1 の教材を使用して、作文と読解の授業を実施。授業内で書き直しの時間があるときはその時間を設けたが、時間が無くなった場合、宿題として課した。読解は授業内ですべて終えることができた。

結果と課題

＜春学期＞

終始一人のみの授業であったため、該当学生の特徴に合わせて授業を行った。大変優秀

であったため、授業内容や進捗に困ることはなかったが、5 限目という性質上、かなり疲れた状況であった。そのため、授業が単調にならないような工夫をしたり、休憩を適宜いれたりするなど、学習者の体調や気分を見ながら授業を進めることも多々あった。課題やテストの結果は非常に良く、期待以上の習得が見られた。

＜秋学期＞

2 人の学習者の得意、不得意が異なっていたため、お互いが教え合える、ピア学習をできるだけ取り入れた。1 名は、漢字にかなり苦手意識があったため、漢字に関心をもてるよう工夫を試みたが、一朝一夕にはいかなかった。ただし、日本語を幼少期から過程で使っていたため、自然な会話ができる。その点で、もう一人の学習者は全くのゼロからスタートしたが、文法や語彙を着々と習得し、正確さや文字や語彙のバランスは、この学習者の方が伸びたと言える。今後は、それぞれの弱点を補いながらバランスよく日本語力を伸ばしていくことが課題である。

＜PEACE 日本語 2＞

コースの概要

PEACE 日本語 2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。週 5 日、毎日スキル別（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には PEACE 日本語 2A で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。なお、J2 コースに準拠している。

コースの目標

PEACE 日本語 2A：様々な接続語や接続助詞や文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることである。

PEACE 日本語 2B：様々な接続語や接続助詞や文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることである。

PEACE 日本語 2C：PEACE 日本語 2A で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること、未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身に付けることである。

PEACE 日本語 2D：PEACE 日本語 2D で習った文型や語彙を正確に運用できるようになること、未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけることである。

PEACE 日本語 2E：PEACE 日本語 2B で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、簡単な日本語の文章が読めるようになることである。

文型リスト

PEACE 日本語 2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	6. Review (J1 sentence patterns) 7. Speaker's Volition: I think I will ～ Volitional form と思う 8. Speaker's Intention： I intend to ～ ～つもりだ 9. ～んです② 10. Mimetic words ⑤ Laughing、 Crying、 Anger
2	8. Can; indicating one's ability ～ことができる・可能形 9. Verb/Adjective すぎる：Overdo～/Too～ 10. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「～て」 11. Anything、 Anyone、 Anytime、 Anywhere、 Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 12. Particle で: indicating required cost、 required time 値段・時間内の「で」 13. のに: Although、 Even though ＊Review のに、が／けど、ても 14. Mimetic words ⑥ Feelings
3	8. V-方 How to V 9. V ながら V：Doing two things simultaneously 10. Have something with/on、 possession、 own ～がある 11. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない／なくてはならない 12. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくてもいい 13. By (time)：までに ／ Until (time) まで 14. Mimetic words ⑦ Weather
4	4. When～: ～とき～ 5. Noun が要る・役に立つ 6. Comparative constructions 比較 A は B より・A のほうが・A ほど・～のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	1. Try doing something and see: ～てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 5. Noun modifiers 名詞修飾 6. Mimetic words ⑧ Nature
6	1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. V て ある 6. Intransitive V ている vs Transitive V てある

	7. Mimetic words⑨：Sleeping 8. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	7. V て おく 8. ～が V みえる・きこえる・する 9. Giving and Receiving (favors、 some acts) ～てあげる・もらう・くれる 10. Want someone to do some action: V てほしい・もらいたい・いただきたい 11. ～が・けど（けれども） 12. Imitative words：Caught a Cold ?
8	7. あいだ VS あいだに 8. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る 9. い-adjectives derived from verbs Vにくい／Vやすい 10. Expressing Purpose: ために・ように 11. Review: Various expressions for purpose 12. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	8. 伝聞 Hearsay、 Conveying information getting from another person、media ～そうだ・ということだ・とのことだ 9. V てしまう 10. Review: V ている、V てある、V てみる、V おく、V てしまう 11. [Question words] か / ～かどうか 12. V1 ないで V2 without doing V1、 do V2 13. Imitative words：Hitting、 Breaking 14. Compound Verbs ③Vなおす・Vかえす
10	5. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ 6. Decisions: ～ことにする・～ことになる 7. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている 8. 比ゆの表現 Expressing Resemblance、Figurative expressions ～ようだ・みたいだ 9. V-て いく・くる do V and come/go 10. Imitative words：Animals、Birds

＜PEACE 日本語２A＞

担当者名：＜春学期＞ 小松満帆
＜秋学期＞ 山内薫

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 0 名、秋学期 2 名 使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

本クラスでは、文法 1 を実施した。具体的には、まず各自で Vocabulary の復習を行いながら、Vocabulary sheet ①に取り組んでもらった。次に、Canvas 上で Vocabulary Quiz ①を実施し、必要に応じて解説を行った。そして、教科書の各課に沿って、文法項目の導入、各項目を用いた練習問題を扱った。また、口頭練習なども行った。

結果と課題

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

継続生 1 名、新入生 1 名の計 2 名のクラスであったが、協力的で雰囲気がよいクラスであった。一人は週末明けの月曜のクラスであったためか睡眠不足であることが多く、またもう一人は風邪気味が続いており、毎週、疲れている様子が窺えた。しかし、二人とも授業態度がよく、各自での練習問題の取り組みにおいても、ペアワークでの口頭練習や意見交換においても、終始和やかな様子で、笑顔で行っていた。一方、教科書の文法項目の導入の際には、翌日の文法 2 の授業で復習を行ってもらうと理解ができておらず、文法 2 の担当教員が再度、文法 1 で導入した文法の説明をすることが度々あった。複数の意味を有する文法の使い方、あるいは類似する文法の意味の違いや使い方を一度で理解することが困難であることは否めないが、理解できていなかった要因として、「自己学習により、すでに大体理解できている」という思い込みから、導入の際に十分に聞いていないことが挙げられる。理解度を測るために、練習問題を行う際に文法の説明をし直してもらうなどの工夫を行ったが、学期末まで、文法 2 の授業において文法 1 で学習した文法項目の確認をすることが続いた。今後は、効果的な導入の方法や理解度の確認方法を考えていきたい。

＜PEACE 日本語２B＞

担当者名：＜春学期＞ 泉大輔

＜秋学期＞ 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 0 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

文法教科書の１つの課の文法項目・文型を日本語 2A クラスと連携して導入し、毎週１課ずつのペースで進めた。PPT を用いて文法や文型を説明し口頭練習を行ってから、Comprehension check sheet を使用し文法・文型の理解を促した。各課の新しい語彙の定着を図るために、毎回 Canvas 上で語彙クイズを実施した。また、授業内課題として新しい文法・文型を取り入れた文をディクテーションさせた。学期の半ばで中間テスト、学期末に期末テストを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

学生 2 名は、一度も欠席することなく真面目に授業に出席した。宿題にしていたわけではないが、1 名の学生は毎回自主的に教科書を読み込み新しい文法項目を理解した上で授業に臨んでいた。もう 1 名は日本語が継承語だったため、正確さに欠ける面はあるものの多少の日本語の知識を有していた。そのため、文法・文型はスムーズに導入することができた。語彙クイズ、ディクテーションのいずれも 2 名とも毎回高得点だった。

1 名の学生は春学期も担当したが、春学期は 1 名だけのクラスだった。秋学期はもう 1 名学生が増え、コースが進むにつれ徐々に学生同士が親しくなり、和やかな雰囲気の中でクラスを運営することができた。文法のクラスだったため、教師の説明が主になってしまったが、学生が 2 名という点を活かしもう少し学生同士の活動を取り入れると、より活発な授業展開ができたのではないかと考えられる。今後の課題としたい。

＜PEACE 日本語２C＞

担当者名：＜春学期＞ 三浦綾乃

＜秋学期＞ 嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 0 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

授業は大きく三つに分けて進めた。まず語彙のワークシートにより、各課で使われる語彙を使って短文を書かせ、その意味や使い方を確認した。続いて会話活動として、ターゲットとなる文型を用いた変形練習とロールプレイなどの応用練習を行った。最後に聴解教材を用いて、ターゲット文型が使われているモノローグやダイアローグを聞き、聴解の練習をした。

結果と課題

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

二人とも日本語学習に前向きで能力も高かったので、ときに難易度の高いタスクを課すなどして、学習のモチベーションを失わせないような授業運営に努めた。結果として、会話能力と聴解能力に、学期を通して伸長が見られたと感じている。課題としては、学生が同じコースの二人のみだったので、お互いの背景や大学生活についてすでに多くを共有しており、自由会話などの活動がしづらかったことが挙げられる。そのような受講生であっても意味のある活動を増やしていくことが、担当教員としての課題である。

＜PEACE 日本語２D＞

担当者名：＜春学期＞ 鹿目葉子

＜秋学期＞ 小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 0 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

毎回の授業では、①文法事項の復習、②Comprehension Check Sheet（PEACE 日本語

2B クラスで終わらなかった箇所)、③文法クイズ、④文法事項を使った活動を行った。④では、文型を使った会話練習や短文作成練習等、学生の理解度に合わせて行い、必要な場合には文法の補足説明も行った。また、それと並行して、インタビュープロジェクトを行った。インタビュープロジェクトは、テーマを決め、質問事項を考え、日本人ボランティアとの質問練習を行った後、キャンパス内で日本人学生にインタビューを行い、その結果を報告する、という流れで実施した。

結果と課題

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

2 名という小さいサイズのクラスではあったが、学生の仲が良く、声を掛け合い、助け合いながら授業を進めることができた。文法の理解度が高く、語彙も豊富であったため、このレベルの日本語にとどまらず、積極的に持っている日本語力を駆使して、活動やボランティアとのセッションに臨んでいたのが印象的であった。

インタビュープロジェクトでは、初級というレベルでありながら、知らない日本人学生に積極的に話しかけ、日本語のみでインタビューを行うことができた。その結果をまとめた発表でも、非常に内容の練られた、レベルの高い報告がなされ、有意義な活動となった。

一方、履修者が 2 名ということもあり、ときに緊張感が薄れ、会話練習などではやや中だるみするような場面もあった。日本人学生ボランティアとの活動を増やす等、人数の少ないクラスであっても、より多彩な活動を盛り込み、メリハリのある授業を展開していく工夫が必要である。

＜PEACE 日本語２E＞

担当者名：＜春学期＞ 栃木亜寿香

＜秋学期＞ 冨倉教子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 0 名、秋学期 2 名
使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

授業では読解と作文の日が交互に設けられ、それぞれ５課ずつ全１０課をカバーした。読解、作文ともにそれぞれ違ったトピック、内容、構成（作文）の教材を扱った。読解に関しては読み物の前に、漢字、文節分けなど、言葉の練習を行ってから、教材の読み物を読んで読解問題を行った。最後にその内容に関しての意見や読み物に似た話などをクラスで共有してもらった。作文の方はまず作文のトピックに沿った質問をお互いに口頭で聞き合い、各自書く内容のイメージを膨ませた。また多くの場合、そのトピックに関する色々な意見や体験談、事例などが共有された。それらの意見交換を経て、最終的にその課ごとに提示された構成に従って各自作文。読解はクラス全体で、作文は個別およびクラス全体で、いずれも即時にフィードバックされた。

結果と課題

＜春学期＞

開講なし

＜秋学期＞

本クラスは金曜５限に実施され、同日４限から２時間連続の日本語のクラスであったが、学習者は学期当初から最後まで熱心に授業や課題に取り組んでいた。課題の問題や内容など学習者同士で協力して回答を導き出そうとしていたところもあった。読解の内容は細部を読み取れないところは時々あったようだが、毎回、ほぼ問題なく理解はしていたようである。読解の読み物は今回の学習者には少し易しいところもあったかもしれない。読んだ後の意見交換では、自分の体験談や自国の状況などを共有し、クラスで話が盛り上がっていたことも少なくなかった。作文では語彙、文法、表記などは今後もさらなる練習が必要ではあるが、いずれも内容を妨げることは少なく、概ね自分の意見を上手に日本語で表現していた。長さも毎回十分あり、内容的には例を提示したり、詳しく説明したり、かつ独自性のある興味深いものが多かった。毎回十分な時間が取れず、書いた作文を共有する時間などがあるとよりお互いの学習が広がったように思われる。作文前のトピックに関する話し合いでは二人とも積極的に意見交換を行なっていた。

＜PEACE 日本語 4-8＞

コースの概要

PEACE の学生がレベル（J4～J8）によらず１つのクラスで学ぶ科目である。口頭表現、読み書きの能力など、個々の学生のレベルにあった活動をすることにより、個々の学生の日本語力を高める。

＜PEACE 日本語 4-8A＞

担当者名：＜春学期＞ 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：12 名 使用教材：独自教材

コースの目標

プレイスメントテストで J4-J8 レベルにプレイスされた学生を対象とする。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業の内容を理解し、日本の様々な事柄への理解を深めることを目指す。

授業の方法

日本社会や日本文化に関連するトピックを選択し、それに関する記事を読解したり、映像教材を視聴したりした。教材から学んだことをもとに、ディスカッションをしたり、ミニ発表などを行ったりし、最後のまとめとして授業テーマに関連した最終プレゼンテーションを行った。

結果と課題

本科目では 4 つのトピックを選定した。その 4 つは、①観光、②食文化、③テクノロジー、④少子高齢化社会である。

各トピックを 3 週にわたって取り扱った。基本的には第 1 週目に、そのトピックに関連する記事の読解を行った。2 週目では、トピックに関するニュース映像を視聴し、その内容について話し合う形式で、最後の 3 週目には学習者が当該トピックに関するミニ発表を行うというものであった。どのトピックでも、興味を持って課題に取り組んでいる様子であった。ただし、課題や宿題などの提出状況が学生によってまちまちだったため、きちんと提出すよう学生には何度も促す必要があると感じた。

＜PEACE 日本語 4-8B＞

担当者名：＜春学期＞ 井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 12 名 使用教材：独自教材

コースの目標

プレイスメントテストでJ4-J8レベルにプレイスされた学生を対象とする。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業の内容を理解し、日本の様々な事柄への理解を深めることを目指す。

授業の方法

＜春学期＞

このクラスでは、グループプロジェクトワークを採用した。まず、学期の前半は、新聞記事を読んでのディスカッションや、PPT の作り方やプレゼンテーションの練習をすることで、プレゼンテーションに必要な基礎固めを行った。学期の中盤には図書館オリエンテーションをお願いし、レポートやPPT作成に必要な資料集め等、大学生活で必要となる図書館のリソースを活用した講習会を受講してもらった。学期の後半は、履修者自身が問題を見つけ、その問題をグループ内で解決する能力を身につけることができるよう、プロジェクトベース学習を採用した。発表の準備の進め方としては、グループ内での話し合いと、教師からのコメントを受けての再検討を繰り返し行うことを基本としたが、他のグループの進捗状況の把握や、他のグループの学生との話し合いが自由にできるように、意見交換の場を設けることもあった。

結果と課題

＜春学期＞

このクラスは、J4からJ8レベルの学生が一緒になったクラスである。今学期は、J4からJ7の学生が履修した。このクラスではテーマを各グループで決めてもらい、発表の準備を進めていったが、特にJ4、J5レベルの学生にとっては、先行研究の資料集め、資料の読み込み、PPT 作成、発表に必要な日本語表現の獲得等、非常にチャレンジングな授業内容だったと思われる。履修学生には難しい内容のものを要求したが、このクラスで行っていることは大学生活で必要なスキルであることを学生たちも理解しており、課題を最後までやり遂げた。この経験は、履修者にとって今後の大学生活を送る上で大きな自信となったのではないかと思う。

グループの決め方は学生に任せたが、学期の前半に欠席した学生については、グループ内の人数調整もあって、教師が決めたグループで活動するように指示した。欠席が続いていたことで、グループ内のプロジェクトにほとんど関わっていなかったため、途中、活動がうまくいかないグループが出てしまった。発表の日も迫っており、1人での発表を認めたが、そのまま継続してグループでの活動を模索すべきであったとも考えている。このクラスでは、グループ内での問題解決能力の養成を目標としているため、クラスの目標を何度も学生たちと共有すべきであったのではないかと考える。授業への出席が大前提であるということを履修者に認識させると共に、履修者の関係性の構築についても、教師側が学期の前半にも

う少し時間をとってケアすべきだったように思う。

＜PEACE 日本語 4-8A＞

担当者名：＜秋学期＞ 数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：＜秋学期＞12 名
使用教材：独自教材

コースの目標

プレイスメントテストで J4-J8 レベルにプレイスされた PEACE プログラムの学生が「道具」として日本語を用いることによって、授業の内容を理解し、日本の様々な事柄への理解を深めることを目指す。

授業の方法

＜秋学期＞

学期前半は近年の消費者行動、学期後半はジェンダー格差のテーマを扱った。授業ではこのテーマに関する新聞の連載記事を分担して読み、同じ記事を読んだ学生同士で音読や内容確認をし、その記事についてレジュメを作成して発表の練習をした後で、別の記事を読んだクラスメートとペアになって、お互いの記事を発表し合い、グループやクラス全体でディスカッションをしたり、リアクションペーパーを書いたりした。また、前半で扱ったテーマについて、インタビュー調査をした。記事の内容と関連させて、調査目的と質問を考え、日本人学生 1 名にインタビュー、録音をし、それについてレポートを書いた。レポートの「はじめに」では、J4、5 の学生には直接引用で記事の内容を紹介させ、J6 以上の学生は間接引用も用いて記事の内容を紹介してから目的を述べさせた。フィードバックをもとにレポートを書き直した後で、プレゼンテーションをした。また、ジェンダー格差については、ジェンダーギャップ指数に関する短いニュースや NHK for school の男女平等に関する番組も視聴し、ノートを取る練習や聞いてわかったことを伝える練習もした。

結果と課題

＜秋学期＞

PEACE プログラムは入学時の日本語能力を求めず、専門科目を英語による授業のみで履修できるプログラムである。秋学期は 12 名の登録があったが、1 名は休学中だったため、出席したのは 11 名で、内訳は J4 が 1 名、J5 が 4 名、J6 が 2 名、J7 が 3 名、J8 が 1 名であった。J5 以下と J6 以上ではコミュニケーション力にもかなりの差があった。J4、5 の学生は語彙数も限られ、基本的な話す力を伸ばす必要があったが、J7、8 の学生もいるため、それぞれのニーズに合った授業をするのが難しかった。幸い J4、5 レベルの学生は全員中

国の学生で、漢字語彙の意味は理解できたため、ふりがなを振った文章を準備することで、身近なテーマの新聞記事を読み、簡単な意見を述べることができた。また、J7、8の学生など、作業が早く終わった学生には別のことを追加でやらせるなどしたが、どうしても、J4、5レベルには難しめで、J7、8には易しめとなってしまう部分があった。ただし、インタビュー調査ではそれぞれ日本人と話し、それをレポートにまとめて発表するということを各自の日本語力に合わせて行うことができたのがよかった。

2023年度　法政日本語　授業記録
＜法政リーディング＆ライティング＞

コースの概要

法学部での学びに関連した内容の文章を読み、その内容を自分の言葉で説明する。また、理解した内容を基礎として、自分なりの意見をまとめて書くことにつなげる。「書く」ことに関しては、①読んだ内容をふまえ、さらに文献などを調べて、レポートにまとめる、②読んだ内容を理解し、出された問に文章で制限時間内に回答する、という２つのスキルに焦点をあてて扱う。さらに、日本語で書くために必要な語彙や文型についても扱う。授業後半には、専門科目でのレポートや試験を想定した筆記テストを行い、法学部での学びに十分な日本語力が身に着いたかを各自が確認する。

担当者名：＜春学期＞ 鹿目葉子
　　＜秋学期＞ 鹿目葉子

授業コマ数：週１コマ
履修者数：春学期　11名、　秋学期　3名
使用教材：参考図書ならびに独自教材

コースの目標

法学部の学生が、法学部における講義の理解に必要な日本語のリーディングスキルを身に着ける。また、法学部におけるレポー ト作成、試験問題への回答などのために必要なライティングスキルを身に着ける。

授業の方法

授業は「日本語で書くために必要な語彙や文型」練習と「読んで書く」練習の2部構成で進めた。前者においては、アカデミックライティング用のフレーズ練習を用い、後者においては、法学部での学びに関連した内容の文章を読ませ、その内容について、①説明する、②論じる、③意見を述べる、に分けて、「書き方」を身に付けさせた。また、毎回、「書く」課題を提示した。さらに、後半ではレポートの書き方と試験を想定した筆記テストを行い、最終日はテストのフィードバックを行った。

結果と課題

＜春学期＞

9 名の学部生と 2 名の大学院聴講生のクラスであり、真剣に授業と課題に取り組んでいた。授業はスケジュール通りに、円滑に進めることができた。受講者の内 1 名は休学のため参加せず、また 1 名は途中から連続欠席となったものの、学部生の 7 名は学期を通して欠席も少なく、大学院生 2 名も法学部の授業が重ならない限り出席し、参加意欲の高さが窺えた。

今学期から初めて開講された科目のため、手探りで授業を進めたが、学生から論理的に文章を書くためのスキルが学べたという声が聞かれた。

今後の課題としては、更にレポートを書く時間を増やし、また、説明の仕方にも工夫をしたい。

＜秋学期＞

春学期の課題をもとに、スケジュールを再度修正し授業を構築した。当初、3 名の学部生が登録をしていたが、授業が始まり 1 名は退学、1 名は休学となった。残りの 1 名は、当初、真剣に授業に参加して課題に取り組んでいたが、後半は欠席が続いた。

今後の課題としては、修正した授業をもとに、新たな練習問題を考案していきたい。

2．　2023 年度 Placement Test 実施報告

23 年度は新型コロナウィルスの影響から脱し、特別外国人学生、正規留学生ともに通常通り対面での実施となった。

【春学期】

2023 年度春学期　日本語プレイスメントテスト受験者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	新入生	在学生	
3 月 27 日 特別外国人学生 正規院生対象	-	-	155	1	12 ※1	12	0
3 月 29 日 正規学部生 対象	68	1	-	-	-	-	-
4 月 4 日 (特別措置)	4	0	5	0	0	1	-
全受験者数　259 名							

※1：正規大学院生（履修希望新入生）12 名のうち、ビジネスデザイン研究科 6 名

春学期プレイスメントテスト対象者　レベル判定結果　（特別外国人学生・正規大学院生）

J0	65			
J1	11			
J1S	13			
J2	5			
J2S	7			
J3	6			
J3S	13			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	9	9	11	11
J5	17	10	15	15
J6	20	17	20	15
J7	13	12	13	20
J8	8（うち条件付き 4 名）			

＜春学期総評＞

新型コロナウィルス感染症の影響から脱し、対面での実施となった。日本への留学者数も戻り、250 名を超える学生が対象であったこと、対面での実施が数年ぶりだったことからしっかりと事前に準備をして臨んだ。

結果として、すべての学生のレベル配置は問題なく実施できた。

【秋学期】

2023 年度秋学期　日本語プレイスメントテスト受験者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	新入生	在学生	
9 月 6 日 9 月入学者 正規学部生 特別外国人学生 継続正規院生対象	11	0	167	0	0	1	1
9 月 13 日 新規正規院生 特別措置	0	0	3	1	10	0	0
全受験者数　194 名							

秋学期プレイスメントテスト受験者　レベル判定結果　（特別外国人学生・正規大学院生）

J0	56			
J1	14			
J1S	10			
J2	14			
J2S	6			
J3	16			
J3S	5			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	17	17	17	17
J5	16	16	16	16
J6	12	12	12	12
J7	11	11	11	11
J8	5 名			

＜秋学期総評＞

秋学期は、Web テストの実施に際して、予期しなかったトラブルが発生したが、現場の教職員の尽力により、無事にプレイスメントテストを終えることができた。次年度の実施に向けて、メディアセンター、ソフトウェア開発者とも協議を行い、トラブル回避に向けて検討を行った。

2023 年度の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。（履修者数は、継続生も含む。ここでいう「継続生」とは、前学期に日本語科目を履修した者。継続生は日本語プレイスメントテスト対象者には含まない。）

	【2023 年度春学期】		【2023 年度秋学期】	
	国　　籍	人数	国　　籍	人数
特別外国人学生	アイルランド	2	アイルランド	1
	アメリカ	47	アメリカ	25
	イギリス	12	イギリス	9
	イタリア	5	ウクライナ	2
	ウクライナ	5	オーストラリア	6
	オーストラリア	10	オーストリア	2
	オランダ	13	オランダ	3
	カナダ	6	カナダ	7
	韓国	23	韓国	10
	ギリシャ	1	シンガポール	1
	シンガポール	11	スイス	3
	スイス	3	スウェーデン	2
	スウェーデン	2	スペイン	10
	スペイン	8	スロベニア	3
	スロベニア	1	タイ	1
	タイ	4	台湾	11
	台湾	13	中国	15
	チェコ	2	ドイツ	14
	中国	27	日本	4
	ドイツ	18	ニュージーランド	1
	トルコ	1	フィンランド	5

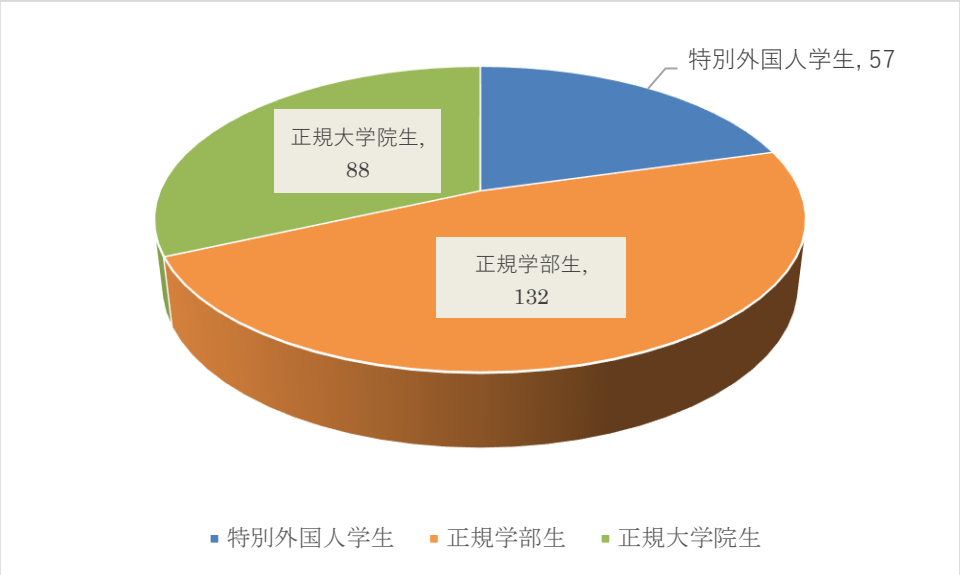
	日本	4	フランス	13
	ノルウェー	3	ブルネイ・ダルサラーム	2
	ハンガリー	1	ベトナム	1
	フィリピン	2	ベルギー	1
	フィンランド	9	ポーランド	2
	フランス	33	ポルトガル	1
	ブルガリア	1	マダガスカル	1
	ブルネイ・ダルサラーム	3	マレーシア	2
	ベトナム	3	メキシコ	2
	ベルギー	3	モンゴル	1
	ポーランド	2		
	マダガスカル	1		
	マレーシア	1		
	メキシコ	2		
	モロッコ	1		
	ルーマニア	1		
特別外国人学生合計		284		161
正規留学生（大学院）	アメリカ	1	アメリカ	1
	エジプト	1	エジプト	1
	カナダ	1	カナダ	2
	ケニア	1	ケニア	1
	コートジボワール	1	コートジボワール	1
	スロベニア	1	スロベニア	1
	中国	13	中国	13
	フランス	4	フランス	2
	ホンジュラス	1	ポーランド	1
			ホンジュラス	1
正規留学生（大学院）合計		24		25
日本語履修者合計	2023 年度春学期	308	2023 年度秋学期	186

＊本学では正規留学生は在留資格「留学」を有している者としているが、日本語教育センター科目は、正規大学院生は、特に日本語学習の必要性が認められれば履修を認めているため、上表に記載する。

3．　2023 年度日本語相談室実施報告

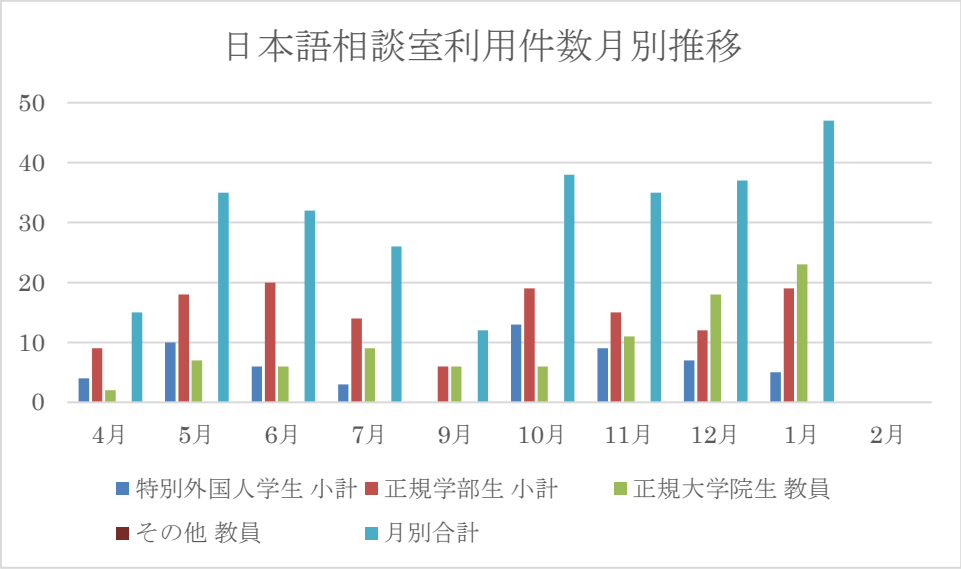
2023 年度　日本語相談室利用状況（2023 年 4 月 11 日～2024 年 2 月 5 日）

【相談者所属別利用件数】



【月別推移】

相談者属性	予約枠	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	合計
特外	教員	4	10	6	2	0	7	8	4	5	0	46
	学生アドバイザー	0	0	0	1	0	6	1	3	0	0	11
	小計	4	10	6	3	0	13	9	7	5	0	57
学部	教員	8	17	15	13	4	10	6	5	14	0	92
	学生アドバイザー	1	1	5	1	2	9	9	7	5	0	40
	小計	9	18	20	14	6	19	15	12	19	0	132
大学院	教員	2	7	6	9	6	6	11	18	23	0	88
その他	教員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月別合計		15	35	32	26	12	38	35	37	47	0	277



【所属別利用件数】

				キャンパス		オンライン（教員）	
		実質利用人数	合計利用回数	池袋	新座	教員	学生アドバイザー
特別外国人学生		22	57	45	0	1	11
正規学部生	文学部	3	8	6	0	1	1
	異文化ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学部	11	43	17	0	23	3
	経済学部	4	25	1	0	6	18
	経営学部	2	20	1	0	6	13
	理学部	0	0	0	0	0	0
	社会学部	2	7	1	0	1	5

	法学部	5	13	5	0	8	0
	観光学部	2	11	8	2	1	0
	ｺﾐｭﾆﾃｨ福祉学部	1	2	1	1	0	0
	現代心理学部	1	3	0	0	3	0
	GLAP	0	0	0	0	0	0
	ｽﾎﾟｰﾂｳｪﾙﾈｽ学部	0	0	0	0	0	0
正規 大学院生	キリスト教学研究科	0	0	0	0	0	
	文学研究科	5	24	5	0	19	
	異文化ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究科	5	19	3	0	16	
	経済学研究科	1	3	3	0	0	
	経営学研究科	1	1	0	0	1	
	理学研究科	0	0	0	0	0	
	社会学研究科	2	2	2	0	0	
	法学研究科	1	4	3	0	1	
	観光学研究科	3	15	1	6	8	
	ｺﾐｭﾆﾃｨ福祉学研究科	0	0	0	0	0	
	現代心理学研究科	0	0	0	0	0	

	ﾋﾞｼﾞﾈｽﾃﾞｻﾞｲﾝ研究科	3	10	1	0	9	
	21 世紀社会ﾃﾞｻﾞｲﾝ研究科	3	8	0	0	8	
	人工知能科学研究科	1	2	0	0	2	
	ｽﾎﾟｰﾂｳｪﾙﾈｽ研究科	0	0	0	0	0	
	特別外国人学生　計	**22**	**57**	**45**	**0**	**1**	**11**
	正規学部生　計	**31**	**132**	**40**	**3**	**49**	**40**
	正規大学院生　計	**25**	**88**	**18**	**6**	**64**	
	その他　計	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**
	合 計	**78**	**277**	**103**	**9**	**114**	**51**

【曜日・時限別　利用件数】

2023 年度春学期

●池袋キャンパス

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限	8	8	6	2	2
3 限	1		3	3	5
4 限			4		

●新座キャンパス

	火
1 限	
2 限	
3 限	3
4 限	0

●オンライン（教員）

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限	5	3	2	14	5
3 限	4	1	4	3	5
4 限		5	3		

●学生アドバイザー

	月	火	水	木	金
1 限-2			0	0	
2 限-2	2				
3 限-1		1	6		
4 限-1		0			0
4 限-2		0			

2023 年度秋学期

●池袋キャンパス

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限	14	3	3	7	5
3 限	2		9	7	10
4 限	2				

●新座キャンパス

	火
1 限	
2 限	
3 限	3
4 限	3

●オンライン（教員）

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限	2	6	9	4	6

3 限	3	4	4	5	3
4 限	1	12			

●学生アドバイザー

	月	火	木	金
1 限-1			1	
1 限-2	11		0	
2 限-1				3
3 限-1	1	11		6
4 限-1			4	5

【2011 年度―2023 年度　利用件数推移】

	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42	63	5	2	38	57
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92	126	153	180	175	132
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304	205	167	177	179	88
その他	0	0	0	1	8	0	2	0	0	2	0	0	0
合　計	144	153	181	237	424	428	407	438	394	327	359	392	277
増　減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2	273.6	227.1	249.3	272.2	192.4

日本語相談室担当者コメント

日本語相談室担当者コメント

今年度の日本語相談室は、昨年度に引き続き、教員枠の他、学生アドバイザー枠を設けて開室した。学生アドバイザー枠とは、本学の大学院生と学部生の学生アドバイザーが担当する枠である。教員枠は基本的に日本語を母語としない学部生と大学院生を対象とし、さまざまな相談を受け付けているが（日本語科目の宿題についての相談は大学院生のみ)、学生アドバイザー枠は日本語を母語としない学部生のみを対象とし、相談できる内容は日本人と一緒に授業を受けている正規科目のレポートと発表、リアクションペーパー、日本語資料の内容確認、スピーチコンテストのための準備、日本語クラスの宿題に限定されている。なお、日本語資料の内容確認の相談は 2023 年度春学期から、日本語クラスの宿題に関する相談は 2023 年度秋学期から新たに相談を受け付けたものである。開室形態は、教員枠はオンラインと対面で開室し、学生が選択できる形態にした。学生アドバイザー枠は、オンライン相談室として開室した。

以下、教員枠、学生アドバイザー枠の利用について、順に見ていく。

＜教員枠＞

【相談内容内訳】

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	81
就職活動（エントリーシート等）	41
レポート（授業、ゼミ等）	32
奨学金関係（申請書類、面接練習等）	21
学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）	20
スピーチコンテスト	20
発表指導（授業、ゼミ等）	3
学会発表・予稿集・投稿論文	1
その他	7
合計	226

【稼働率】

春学期

	4 月	5 月	6 月	7 月	計
相談件数	14	34	27	24	99
相談枠	66	110	104	102	382
稼働率（%）	21.2	30.9	26.0	23.5	25.9

秋学期

	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	計
相談件数	10	23	25	27	42	0	127
相談枠	36	105	99	95	105	8	448
稼働率（%）	27.8	21.9	25.3	28.4	40	0	28.3

全体の利用件数は、昨年度の 368 件から大幅に減少し、226 件となった。相談内容で最も多かったのは「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」で 81 件、次いで、「就職活動（エントリーシート等）」41 件、「レポート（授業、ゼミ等）」32 件であった。

昨年度の相談内容と比較すると、増加したのは、28 件から 41 件に増えた「就職活動（エントリーシート等）」と、17 件から 20 件に増えた「学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）」である。全体の相談件数が大幅に減少している中、就職活動に関する相談件数が増加した背景には、新型コロナの 5 類への移行によって、有効求人倍率が回復傾向にあることが挙

げられると考えられる。また、学習方法指導については、継続的に需要があるといえる。

一方で、全体の相談件数が大きく減り、また特に論文やレポートに関する相談が減少した原因として、生成系 AI の存在があるのではないかと推察される。実際に相談室に持ち込まれたレポート等を見ても、その影響が垣間見える原稿もあった。この影響から、リアクションペーパーや短いレポートなどに関する相談件数が減少したのではないかと考えられる。また、相談室を開室している時間帯に授業が入っているなど、学生が利用しづらい時間割となっていた可能性も挙げられる。一方で、全体の相談件数は減少しているものの、論文の提出が近い時期には相談が集中した点についても触れておく。

今後は、なぜ相談件数が減少しているのか、その原因をさらに分析し、より広く学生に利用してもらえるよう、そして、学生が真に必要としているサポートができるよう、今後の相談室の新たな可能性を探っていく必要がある。また一方で、予約とキャンセルを繰り返したり、期日を過ぎて事前資料を提出する学生も複数見られたため、利用方法や事前提出の日程等のルールについても、引き続き周知する必要がある。

＜学生アドバイザー枠＞

【相談内容内訳】

相談内容	件数
リアクションペーパー	18
レポート	11
発表指導	8
スピーチコンテスト	5
日本語クラスの宿題	6
日本語資料の内容確認	3
合計	51

【稼働率】

春学期

	4 月	5 月	6 月	7 月	計
相談件数	1	1	5	2	9
相談枠	21	32	35	32	120
空き時間研修	20	31	30	30	111
稼働率（%）	4.8	3.1	14.3	6.3	7.5

秋学期

	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	計
相談件数	2	15	10	10	5	0	42
相談枠	13	32	25	27	23	5	125
空き時間研修	11	17	15	17	18	5	83
稼働率（%）	15.4	46.9	40.0	37.0	21.7	0	33.6

2022 年度に開始した学生アドバイザーによるオンラインの日本語相談室は 2 年目となった。学生アドバイザーは毎学期、事前研修を受けたうえで日本語相談室を担当し、学期中の中間報告会２回、学期終了後の事後研修にも参加し、振り返りを行っている。

2022 年度は学生アドバイザー2 名による週 4 枠の体制だったが、2023 年度は 4 名週 8 枠へと拡大した。4 名のうち 2 名は前年度から担当していた大学院生で、2023 年度の春・秋学期と継続した。2 名は新たに加わった学部生である。秋学期は学部生の 1 名が継続できないということで、2022 年度春学期に担当して留学から戻ってきた学生と交代した。

利用者を増やすため、2023 年度春学期から「日本語資料の内容確認」、秋学期から「日本語クラスの宿題」の相談も受付を開始し、相談件数は 2022 年度の 26 件から 51 件に倍増した。ただし、相談受付枠自体も倍になっているため、稼働率は昨年度とほぼ同じである。

学期ごとに見ると、2022 年度は春学期 0 件、秋学期 26 件、2023 年度は春学期 9 件、秋学期 42 件であった。2022 年度も 2023 年度も秋学期は NEXUS プログラム 1 学期目の学生の利用があること、秋に実施されるスピーチコンテストの相談があることから利用者が多くなっている。今後も春学期の利用者を増やすことが課題である。

4. 2023 年度立教大学漢字検定試験実施報告

	試験日	申込締切日	申　込		受　験		合　格	
第1回	5月31日(水)	5月4日(水)	特別外国人学生	52 名	特別外国人学生	45名	特別外国人学生	36名
			上級	3 名	上級	3名	上級	3名
			中級	28 名	中級	24名	中級	20名
			初級	21 名	初級	18名	初級	13名
			正規学部生	2 名	正規学部生	2名	正規学部生	2名
			上級	1 名	上級	1名	上級	1名
			中級	1 名	中級	1名	中級	1名
			初級	0 名	初級	0名	初級	0名
			正規大学院生	0 名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名
			上級	0 名	上級	0名	上級	0名
			中級	0 名	中級	0名	中級	0名
			初級	0 名	初級	0名	初級	0名
			申込合計	54 名	受験合計	47名	合格合計	38名
第2回	7月12日(水)	6月14日(水)	特別外国人学生	44名	特別外国人学生	37名	特別外国人学生	24名
			上級	2名	上級	2名	上級	1名
			中級	27名	中級	23名	中級	18名
			初級	15名	初級	12名	初級	5名
			正規学部生	0名	正規学部生	0名	正規学部生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	0名	中級	0名	中級	0名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	0名	中級	0名	中級	0名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			申込合計	44名	受験合計	37名	合格合計	24名
第3回	11月22日(水)	10月25日(水)	特別外国人学生	25名	特別外国人学生	20名	特別外国人学生	17名
			上級	1名	上級	1名	上級	0名
			中級	15名	中級	14名	中級	12名
			初級	7名	初級	5名	初級	5名
			正規学部生	1名	正規学部生	1名	正規学部生	0名
			上級	1名	上級	1名	上級	0名
			中級	0名	中級	0名	中級	0名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			正規大学院生	1名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	1名	中級	0名	中級	0名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			申込合計	25名	受験合計	21名	合格合計	17名
第4回	1月17日(水)	12月20日(水)	特別外国人学生	24名	特別外国人学生	17名	特別外国人学生	13名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	18名	中級	14名	中級	10名
			初級	6名	初級	3名	初級	3名
			正規学部生	0名	正規学部生	0名	正規学部生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	0名	中級	0名	中級	0名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	0名	中級	0名	中級	0名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			申込合計	24名	受験合計	17名	合格合計	13名

漢字クラスの履修者が適正な数になったこともあり、秋学期は適切な数で推移した。来年度は、さらに漢字クラスの履修資格が正式に変更になるため、より改善されると思われる。

今後は、漢字クラスを履修していない学生に対して、受験を促していくことも課題である。

５．留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2023年度は、11月25日に「第12回立教大学留学生による日本語スピーチコンテスト―セントポールライオンズクラブ杯」を対面で実施した。当日は、初級から上級まで16名の学生が参加した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ

https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/12th.default.aspx　を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第12回　立教大学留学生による日本語スピーチコンテスト－東京セントポールライオンズクラブ杯－スピーチ文集』を刊行した。

６．　日本語教育センターシンポジウム実施報告

23 年 7 月 8 日に「正規学部留学生受け入れの新時代２―21 世紀を変えていく人材を立教大学から世界へ―」というテーマで実施した。立教大学がスタートさせた新しい外国人留学生受け入れ制度「RIKKYO STUDY PROJECT（RSP）」について、RSP の理念や目指すところ、留学生を受け入れる学部のもつ期待などを共有し、NEXUS プログラムの学びに焦点を当てて全体討議などを行った。

登壇者は松井秀征氏（国際化推進機構長、法学部教授）、荒川章義　（経済学部教授、経済学部長）、池田伸子氏（異文化コミュニケーション学部教授）、NEXUS 学生のアドバイザー、チューターなどを務めた西山花音氏　（法学部法学科 3 年）、大橋勇斗氏　（経済学部経済学科　3 年）、そして NEXUS の 1 期生であるフレルホヤグ・ビルグーン氏　（経済学部経済学科 1 年）、チュオン・ロン・キム氏　（経済学部ファイナンス学科 1 年）、ナム・フォン・ミン氏　（社会学部メディア社会学科 1 年）、ヴー・チャン・ゴック・イェン氏　（経営学部国際経営学科 1 年）であった。

また、NEXUS に学生を推薦する指定校からガルバドラッハ・トゴス氏（新モンゴル小中高一貫学校　専務理事）、ナサンバヤル・ボロルマー氏（新モンゴル小中高一貫学校　キャリア開発センター長）、ブ・ティ・ザン氏（ハノイ国家大学外国語大学附属外国語英才高等学校）をコメンテーターとして迎え、全体で意見交換を行うことができた。

シンポジウムの詳細は、日本語教育センターホームページ

https://cjle.rikkyo.ac.jp/symposium/default.aspx　を参照されたい。

また、当日の成果は冊子体『シリーズ　新しい日本語教育を考える 13』として刊行（オンライン）した。

https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=100&sort=custom_sort&search_type=2&q=2496

7.　日本語教育センターニュースレター発行報告

昨年度にひきつづき「日本語教育センターニュースレター」を発行した。今年度は、学生が利用する図書館などについて情報を発信した。

詳細は日本語教育センターホームページ

https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/default.aspx　を参照されたい。

8. 短期日本語プログラム報告

今年度は、新型コロナウィルスの影響はほぼなくなっていたが、オンラインなら参加できるという学生も一定数いることから、夏についてはオンライン、秋と冬については対面という形で実施した。結果として、夏のオンラインプログラムの参加者が非常に少なくなってしまったため、次年度以降はすべて対面にすることとした。

【春学期】

1　プログラム概要

1）開催期間

2023 年度夏期①【オンライン】7 月 10 日(月)～7 月 19 日(水)

2023 年度夏期②【オンライン】7 月 24 日(月)～8 月 2 日(水)

2）開催場所

【オンライン】: Zoom 方式

3）コースデザイン

【オンライン（夏期①②)】

単位数：1 単位（1,500 分）

＊単位数内訳：日本語科目 1 単位(1,500 分) 50 分×30 回

4）開講クラス

【オンライン（夏期①)】

2 クラス(入門 Beginner Class 漢字語圏・同 非漢字語圏)

【オンライン（夏期②)】

2 クラス(入門 Beginner Class・初中級 Elementary Class)

2　実施詳細

【オンライン（夏期①）】

1）参加学生　2名　　協定校の区分は 2023 年 9 月現在

	大学間協定校	GLAP
授業料免除枠（1名）		ヴァージニアウェスレヤン大学　1名
私費（1名）	華東師範大学　1名	

補足）リヴァプール大学からも授業料免除枠で 1 名が参加予定だったが、システムトラブルのため開始当日に辞退。

2）学内の協力

クラスボランティア	文学部　1名、法学部　1名、現代心理学部　1名　計 3 名
事務	国際センター、教務事務センター、人事部、財務部、メディアセンター

【オンライン（夏期②）】

1）参加学生　2名　　協定校の区分は 2023 年 9 月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免除枠（1名）	リヴァプール大学　1名	
私費（1名）	華東師範大学　1名	

2）学内の協力

クラスボランティア	文学部　1名、観光学部　1名、コミュニティ福祉学部　1名　計 3 名
事務	国際センター、教務事務センター、人事部、財務部、メディアセンター

3　成果

・本学への留学パターンの多様化の促進

・協定校とのインバランスの解消、関係強化

・多様な日本語レベル及びバックグラウンドに対する柔軟な受け入れ態勢

・本学学生との国際交流の促進

国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。
各イベントの参加者数は以下の通り。

【オンライン（夏期①）】

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数*	合計参加者数 (延べ人数)
Tanabata (Star Festival) With Rikkyo Students （7 月 13 日実施）	2	6	8
参加延べ人数	2	6	8

*インターンの学生 1 名を含む

【オンライン（夏期②）】

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
Japanese Festivals and 2.5-dimension musicals （7 月 27 日実施）	1	3	4
参加延べ人数	1	3	4

4　今後の課題

・プログラム案内周知、広報の強化（授業料免除枠の有効活用）
・立教生への短プロ周知強化（クラスボランティア、イベント案内等）
・オンラインプログラムへの参加ルールの事前確認・周知
　（接続やシステム要件の確認、受講環境等）
・Zoom ログイン（V-Campus ID 使用）の簡略化
・電子教科書利用手続きの簡略化

5－1　授業（夏季①）

日本語クラス 1 （入門）

担当授業者名：川野、小森、高嶋、任
履修者数：2 名
使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』、独自教材

日本語クラス 2 （入門）

担当授業者名：嶋原、野尻、野口、三浦、小林
履修者数：1 名
使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』、独自教材

春学期の短期プログラム（夏 1）は、オンラインで実施し、3 名が登録し、実質 2 名が受講した。日本語クラスは 2 クラス体制で 8 日間の短いコースで行われた。

2 クラスとも日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、電子テキストを使用した。『まるごと<入門 A1>』のテキストでは、トピック 2「わたし」と 3「たべもの」を扱い、日常会話の指導を行った。また、独自教材を用いてひらがなの導入を行った。

最終発表では、1，2 クラス合同で行った。クラス 1 は自己紹介を行うとともに、私の家族、私の好きな物、私の好きな場所の 3 つのトピックの中から 1 つ選びスピーチした。

なお、プログラム 8 日間のうち 3 日に日本語ボランティアの参加があり、立教生と交流もでき、受講生も満足できたと思う。

Zoom への接続が上手くいかない学生もいたが、少人数だったこともあり、個別対応も可能であり予定したプログラムを全て行うことができた。ただ、学生に安定した通信環境の確保が重要であることを意識してもらうための方法については、検討をする必要がある。

5－1　授業（夏季②）

日本語 1 クラス（入門）

担当授業者名：嶋原、川野、野口、三浦、小林
履修者数：1 名
使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』、独自教材

日本語 2 クラス（初級）

担当授業者名：三浦、小森、高嶋、任
履修者数：1 名
使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<初級 1 A2 りかい>』、独自教材

春学期の短期プログラム（夏 2）も、オンラインで実施し、2 名が受講した。日本語クラスは夏 1 と同様、2 クラス体制で 8 日間の短いコースで行われた。夏 1 の課題を改善すべく、今回は、オリエンテーションの段階で、安定した通信環境の確保が授業の質の向上において重要であることを伝え、全日 Zoom 接続に関するトラブルなく実施できた。

クラス 1 は、日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、1 名のクラスで行った。『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』の電子テキストでは、トピック 2 と 3 を扱い、日常会話の指導を行った。また、独自教材を用いてひらがな未習の学生にはひらがなの導入を行った。

クラス 2 は、既習者で、1 名が受講した。『まるごと―日本のことばと文化―<初級 1 A2>』の電子テキストを用いて、指導を行った。テキストは、トピック 1 と 3 を扱い、日常会話の指導を行った。

両クラスの最終発表は、自己紹介を行うとともに、私の家族、私の好きな物、私の好きな

場所の 3 つのトピックの中から 1 つ選びスピーチした。日本語ボランティアは 8 日間のうち 3 日間参加し、スピーチのサポートなど多いに活躍した。

受講生が両クラスとも 1 名のみだったため、日本語ボランティアとの会話練習などの一部の活動は合同で実施し、受講生同士が交流の機会を持つようにした。日本語レベルは違ったものの、合同で実施した活動がお互いの学習意欲に対して肯定的な影響を与えたようである。

【秋学期】　（秋期プログラム）

1　実施の概要

1）プログラム期間

2023 年 11 月 28 日（火）～12 月 15 日（金）

チェックイン：2023 年 11 月 27 日（月）、チェックアウト 12 月 16 日（土）

2）開催場所・宿舎

新座キャンパス、池袋キャンパス（※1 日のみ）デイリーホテル新座店、デイリーホテル志木店

3）コースデザイン

単位数：4 単位（4,300 分）

＊単位数内訳：日本語科目 2 単位（2,800 分）50 分×56 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位（1,500 分）50 分×30 回

4）開講レベル及びクラス数

2 レベル 3 クラス

（入門 Beginner Class： 2 クラス、初級 Elementary： 1 クラス）

5）日本文化社会講義（実施順）

① Small business in Japan　（経済学部 小澤康裕先生）

② Tourism in Japan　（観光学部 韓志昊先生）

③ The Psychology and Socioecology of Japan / The Syncretic Religious Environment in Japan　（現代心理学部 カヴァナ・クリストファー先生）

2　実施詳細

1）参加学生　シドニー大学 40 名　（※シドニー大学が学内選抜を実施）

2）学内の協力

学部（日本文化社会講義）		経済学部、観光学部、現代心理学部
学	住み込みアルバイト	文学部(5)、経済学部(2)、理学部(1)、社会学部(1)、観光学部(5)、異文化コミュニケーション学部(1)、コミュニ

生		ティ福祉学部(2)、経営学部(1)、現代心理学部(1)、GLAP(1) 【計 20 名】
	イベントサポーター(キャンパスツアー実施、図書館オリエンテーション補助、フィールドトリップ同行)	文学部(1)、経済学部(1)、法社会学部(4)、学部(1)、観光学部(4)、コミュニティ福祉学部(1)、経営学部(1)、現代心理学部(2) 【計 15 名】
	日本語授業ボランティア	文学部(3)、経済学部(2)、社会学部(1)、観光学部(6)、コミュニティ福祉学部(1)、現代心理学部(1)【計 14 名】
事務・運営補助		教務事務センター、国際センター、財務部、人事部、図書館、保健室、メディアセンター

3　成果

・本学への留学パターン多様性の促進

・多様な日本語レベル及びバックグラウンドに対する柔軟な受け入れ態勢

・本学学生の国際交流の促進(国際センター協力のもと、グローバルラウンジ企画と連携して以下を実施。)

イベント名称／実施日	短プロ生参加者数	立教生参加者数	参加者数合計(延べ人数)
Origami Daruma / 12 月 4 日(月)	25	13	38
Japanese Café / 12 月 8 日(金)	17	12	29
Japanese Card Game / 12 月 11 日(月)	11	12	23
Rikkyo Christmas Party / 12 月 12 日(火)＊	17	27	44
参加延べ人数	70	64	134

＊ 他に本学留学生の参加者もあり

4 今後の課題

・協定校との連携、運営スケジュール(募集・採用・支払・査証手続き)管理

・立教生への短プロ周知強化(特に日本語授業クラスボランティア及びイベントサポーター)

・使用教材(印刷・電子各媒体の利便性)の再検討

5　授業

日本語クラス１（入門１）

担当授業者名：佐々木、野尻、藤田、高嶋、瀧澤 履修者数：16 名 使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』、独自教材

日本語クラス２（入門２）

担当授業者名：野尻、長谷川、武田、任 履修者数：16 使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』、独自教材

日本語クラス３（初級）

担当授業者名：川野、末松、野口、藤田、斉藤、小林 履修者数：8 名 使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<初級 1 A2 りかい>』、独自教材

クラス１と２は入門で、各 16 名が受講した。授業では、独自教材を用いた文字学習と、『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』の電子テキストを用いた表現練習を行った。毎回、前日に学習したひらがなを五十音表に書いてもらい、受講生が日々の成長を感じることができるようにした。その後、テキストを用いて語彙や文型の導入、日常会話や作文などの練習を行った。秋学期には、トピック 2「わたし」、3「たべもの」、4「いえ」、5「せいかつ」を扱った。

最終発表では、日本語による自己紹介と、英語による文化社会講義のトピックの発表をペアで行った。自己紹介の部分では、多くの受講生が授業で学んだ語彙や文型を適切に活用し、自分自身についてわかりやすい日本語で発表をしていた。また、一部のペアは文化社会講義のトピックについても、簡単な日本語で発表をするなど、全体的に非常に積極的で意欲的な学生が多かった。ただ、体調不良などにより欠席している学生とペアを組んでいる場合、授業時間内に実施した発表の準備を一人で進めなければならず、負担を感じていたようである。一方で、担当教員からは授業内に実施する発表準備の時間を増やしてほしいという意見もあった。最終発表の形態及び準備時間の確保については、次回の受講生の人数などを考慮しつつ、検討していきたい。

クラス３は、既習者の 8 名が受講した。『まるごと―日本のことばと文化―<初級 1 A2>』の電子テキストを用いて指導を行った。テキストは、トピック 3「私の町」、4「出かける」、5「外国語と外国文化を扱い、会話や聴解、文作などの指導を行った。各トピックが終わる

ごとに宿題とクイズを課したが、宿題の提出率はよく、クイズも高得点であった。学習意欲が高く、授業にも大変熱心に参加するクラスであった。課題としては、レベル差が大きなクラスであったため、日本語力が低い 2 名のサポートをしながら授業を展開したこともあり、他の学生には、やややさしめの内容になってしまったことが挙げられる。また、日本文化社会講義をテーマとした最終発表では、各自がアカデミックな内容を目指したことにより、自己の日本語レベルより高い表現を使用したため、クラスメートには理解が難しい内容になってしまった発表が一部あった。次回に向けて、レベル差のあるクラスの運営方法やクラスメートにも伝わる日本語での発表準備の仕方について検討する必要がある。

日本文化社会講義

担当授業者名：佐々木、野尻、藤田、高嶋、長谷川、武田、川野、野口、斉藤、瀧澤、末松、小林、任
履修者数：40 名
使用教材：独自教材

2023 年度秋学期の日本文化社会講義は、テーマ 1「Small business in Japan」（経済学部、小澤康裕先生）、テーマ 2「Tourism in Japan」（観光学部、韓志昊先生）、テーマ 3「The Psychology and Socioecology of Japan」「The Syncretic Religious Environment in Japan」（現代心理学部、カヴァナ・クリストファー先生）の 3 つのテーマで行われた。3 つのテーマに対する理解を深めることを目的に、本学の学部教員による講義とフィールドトリップの前後に事前学習と事後学習を行った。フィールドトリップとして、テーマ 1 は浅草、テーマ 2 は神田川クルーズ、テーマ 3 は明治神宮を訪問した。事前学習、講義、事後学習では、授業での気づきや疑問点などをリアクションペーパーに英語で書くという課題を課した。気づきなどを言語化するという活動が、学生のより積極的な授業参加を促したと思われる反面、課題もみられた。各担当教員のリアクションペーパーの捉え方の違いにより、リアクションペーパーの作成に与えた時間が異なっていたため、文字数にばらつきがあった。それにより、リアクションペーパーの作成そのものに負担を感じた学生もいたようである。リアクションペーパーを作成する本来の目的を見失わないようにするためには、課題指示の仕方について検討をしていく必要があると思われる。

また、秋学期は日本語クラスを超えた学生の交流を目的に、合同クラスではなく、A,B,C クラスの 3 クラスで開講した。テーマごとにクラスを編成したため、日本語レベルに捉われず、学生間で活発に交流できたようだ。一方、教師の毎回の授業記録は、テーマごとにクラスメンバーが異なったため、少々煩雑になったことが課題として挙げられる。

今後は、今学期行った新たな試みを再検討し、学生及び担当教員が負担を感じず、楽しく文化社会講義に参加するためにはどのような運営方法がより適切か、工夫を重ねていく必

要がある。

【秋学期】　（冬期プログラム）

1　実施の概要

1）プログラム期間

2024 年 1 月 9 日（火）～1 月 26 日（金）

チェックイン：2024 年 1 月 8 日（月）、チェックアウト 1 月 27 日（土）

2）開催場所・宿舎

新座キャンパス、池袋キャンパス（※2 日間のみ）デイリーホテル新座店

3）コースデザイン

単位数：4 単位（4,300 分）

＊単位数内訳：日本語科目 2 単位（2,800 分）50 分×56 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位（1,500 分）50 分×30 回

4）開講レベル及びクラス数

3 レベル 3 クラス　（入門 Beginner Class、初級 Elementary、
初中級 Pre-intermediate）

5）日本文化社会講義（実施順）

① Early History of the Japanese Archipelago - An Archaeological View　（文学部 長谷川修一先生）

② Sport in Japan. Between Traditional Japanese & Western Sports　（スポーツウエルネス学部 ライトナー・カトリン先生）

③ Social Engagement of Japanese Companies　（経営学部 村嶋美穂先生）

2　実施詳細

1）参加学生：　25 名

（応募者:35 名、採用者:30 名、不採用者:5 名、辞退･未入金:5 名）

	大学間協定校	GLAP	学部間協定
授業料免除枠 （4 名）	マードック大学（2）	ユニバーシティカレッジユトレヒト(1)、ランドルフメーコン大学(1)	

一般枠 (21 名)	RMIT メルボルン校(5)、ウェリントンヴィクトリア大学(3)、聖公会大学校(3)、ライデン大学(3)、ニューサウスウェールズ大学(2)、ラドバウド大学(2)、シンガポール国立大学(2)	ランドルフメーコン大学(1)	シドニー大学(1)

2)学内の協力

学部(日本文化社会講義)		文学部、経営学部、スポーツウエルネス学部
学生団体		体育会テニス部
学生	住み込みアルバイト	文学部(4)、経済学部(1)、社会学部(1)、観光学部(1)、コミュニティ福祉学部(1)、現代心理学部(1)、異文化コミュニケーション学部(1) 【計 10 名】
	イベントサポーター (キャンパスツアー実施、フィールドトリップ同行)	文学部(2)、社会学部(1)、観光学部(5)、コミュニティ福祉学部(3)、経営学部(1)、現代心理学部(2) 【計 14 名】
	日本語授業ボランティア	文学部(1)、経済学部(1)、社会学部(1)、観光学部(7)、経営学部(1)、現代心理学部(1) 【計 12 名】
事務・運営補助		教務事務センター、国際センター、財務部、人事部、図書館、保健室、メディアセンター

3 成果

・協定校とのインバランス解消

・多様な日本語レベル及びバックグラウンドに対する柔軟な受け入れ態勢

・本学のプレゼンスの強化

・本学学生との国際交流の促進

国際センター協力のもと、グローバルラウンジ企画と連携して以下のイベントを実施。参加者

数は以下の通り。

イベント名称／実施日	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	参加者数合計 （延べ人数）
Rikkyo Tennis Club Event ／ 1 月 13 日（土）	10	5	15
Japanese New Year's Game Fest ／1 月 15 日（月）	20	9	29
Japanese Café ／ 1 月 18 日（木）	13	7	20
Japanese Culture Presentation and Social Event ／ 1 月 22 日（月）	11	3	14
参加延べ人数	54	24	78

4 今後の課題

・協定校との連携強化、授業料免除枠の有効活用

・立教生への短プロ周知強化（クラスボランティア、イベントサポーター等）

・文化イベントの実施時間の検討

5 授業

日本語クラス１（入門）

担当授業者名：野尻、武田、藤田、高嶋
履修者数：10 名
使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<入門 A1 りかい>』、独自教材

日本語クラス２（初級）

担当授業者名：川野、嶋原、高嶋、野口、東平、任
履修者数：10 名
使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<初級 1 A2 りかい>』、独自教材

日本語クラス３（初中級）

担当授業者名：佐々木、野口、長谷川、斉藤、小林
履修者数：5 名
使用教材：『まるごと―日本のことばと文化―<初中級 A2/B1>』、独自教材

クラス 1 は入門で、10 名が受講した。最初の 2 日間の授業では、日本語での挨拶や教室で必要となる表現、自己紹介の表現に焦点を当て、表現練習を行った。3 日目からは、独自教材を用いた文字学習と、『まるごと—日本のことばと文化—<入門 A1 りかい>』テキストのトピック 3「たべもの」、4「いえ」、5「せいかつ」を用いた表現練習を行った。毎回、前日に学習したひらがなを五十音表に書いてもらい、受講生が日々の成長を感じることができるようにした。その後、テキストを用いて語彙や文型の導入、日常会話の練習や作文などの活動を行った。また、3 週間の間に各トピックが終わるごとに、日本語ボランティアとの会話を取り入れ、学んだ表現をアウトプットする機会を設けた。最終発表は、秋学期に挙げられた課題の改善のために、個人で行い、発表の準備時間を増やした。発表内容は、秋学期と同様に、日本語による自己紹介と、英語による文化社会講義のトピックについてであった。今学期は日本語の学習が初めてであるゼロ初級の学生が少なく、学習意欲が高い学生が多かったため、順調に発表準備が進み、全員が非常にわかりやすい発表をすることができた。ただ、英語による文化社会講義の発表に関しては、英語力の問題で発表に負担を感じる学生もいた。日本語クラスでの学習内容のみを成果発表の対象とすべきかに関しては、過去の経緯を踏まえ、慎重に検討を行っていく必要があると思われる。

クラス 2 は、既習者で、10 名が受講した。最初の 2 日間の授業では、日本語クラスを受けるうえで必要な表現の確認と自己紹介の練習、発表を行った。3 日目からは、『まるごと—日本のことばと文化—<初級 1 A2>』テキストのトピック 3「私の町」、4「出かける」、5「外国語と外国文化」を扱い、日常会話の練習や作文、聴解などの活動を行った。3 週間の間に各トピックが終わるごとにワークシートを宿題として課し、漢字や表現についてクイズを実施した。クイズ実施後は全体で確認をしながら復習をした。また、日本語ボランティアを招き、学んだ表現をアウトプットする機会を設けた。受講生 10 名のうち 3 名は、初日にクラス 3 への参加を悩んでいたため、学習意欲が低下してしまうのではないかという懸念があったが、常に積極的に授業に参加し、クラスメートを引っ張ってくれた。そのため、レベル差を感じることなく、終始良い雰囲気の中で授業を進めることができた。個人による最終発表は、すべて日本語で行った。発表内容は、日本文化社会講義のトピックから選んだ 1 つのテーマについて、RQ を設定し、考察結果と自身の考えを述べることであった。学生の負担を減らすために、PPT のスライドは画像や動画のみを掲載し、発表は簡単な日本語で行うようにした。また、授業内に実施する発表の準備時間も秋学期より増やし、導入の日から 2 回目の準備時間まで十分にテーマや構成について考えることができるように設計した。しかし、多くの学生がスクリプトの作成だけでなく、スライドにも日本語の語句や文を掲載し、非常に難易度の高い発表を目指していたため、発表の時間を増やしたにも関わらず、発表スライドやスクリプトの作成に非常に時間がかかった。学生は日本語でスライドを作成し、日本語で発表できたことに達成感を感じていたようだが、発表で使われた語彙や文型が非常に難しかったため、学生同士のディスカッションはあまり活発に行われなかった。（そのため、一部の発表では、ディスカッションのみ、英語で行った。）冬は、秋の反省点

を踏まえ、最終発表の準備時間やスライドに掲載する内容に関して改善を試みた。学生からの振り返りアンケートをみると、発表の準備に負担を感じた学生はいなかったようであるが、発表の完成度に関して大きな効果が得られなかった。最終発表のイメージと評価の観点をより明確に示す必要があったと思われる。発表の難易度を調整することは、学生の短期日本語プログラムへの満足度にもつながる重要なことである。次学期に向けて、評価観点の示し方やスライドの例の示し方など、改善をしていく必要がある。

クラス３は、既習者の 10 名が受講した。最初の 2 日間の授業では自己紹介の活動や滞在中に遭遇しそうな場面の生活会話の練習をした。3 日目からは『まるごと―日本のことばと文化―<初中級 A2/B1>』を使用し、トピック 3「ほっとする食べ物」、4「訪問」、5「ことばを学ぶ楽しみ」、8「旅行中のトラブル」の 4 課を扱った。3 週間の間に各トピックが終わるごとに例文づくりの宿題を課し、漢字や表現についてのクイズを実施した。既習者であっても、会話や作文などの産出は苦手な学生もいたため、レベルとしては合っていたと思われる。学習意欲が高く、丁寧に課題に取り組む学生が多かった。最終発表では、日本文化社会講義のトピックから自分で調べて発表した。日本語でのプレゼンテーションが初めての学生が多かったが、全員十分に準備して発表することができ、達成感があったと思われる。秋のプログラムで課題であった「クラスメートに伝わる日本語」の意識化については、常に強調して発表準備を進めたため、各自レベルに合った日本語で発表を実施することができ、ディスカッションも活発に行うことができた。引き続き、学生のレベルに合わせた発表準備の仕方を工夫していきたい。

日本文化社会講義

担当授業者名：野尻、武田、藤田、高嶋、川野、嶋原、佐々木、長谷川、斉藤、東平、小林、任
履修者数：25 名
使用教材：独自教材

2023 冬の日本文化社会講義は、2023 冬の日本文化社会講義は、テーマ 1「Early History of the Japanese Archipelago - An Archaeological View」（キリスト教学研究科、長谷川修一先生）、テーマ２「School Sport Clubs in Japan」（スポーツウエルネス学部ライトナー・カトリン先生）、テーマ３「Social Engagement of Japanese Companies」（経営学部、村嶋美穂先生）の 3 つのテーマで行われた。

3 つのテーマに対する理解を深めることを目的に、本学の学部教員による講義とフィールドトリップの前後に事前学習と事後学習を行った。フィールドトリップとして、テーマ 1 は東京国立博物館、テーマ 3 はパナソニックセンターを訪問し、テーマ 2 は本学の体育館で和太鼓ワークショップを行った。秋学期の反省点を踏まえ、事前学習、講義、事後学習で課すリアクションペーパーについては、3 クラスともに指定した文字数（200 字）と作成時間

（10 分）で実施するように統一した。また、学生全員が授業時間内に提出するように徹底した。その結果、どのクラスの学生も同様の条件でリアクションペーパーを作成することになり、文字数や提出時間のばらつきが目立たなくなった。

また、冬も日本語クラスを超えた学生の交流を目的に、A、B、C クラスの 3 クラスで開講した。毎回の記録が煩雑で、記入漏れが起こりやすいという秋学期の課題を改善するために、テーマごとにクラスを移動することはなるべく避けるようにし、各クラス内でグループ編成を工夫するようにした。さらに、テーマごとではなく、日付ごとに記録するように変えるなど、記録シートの改善も試みた。その結果、記入の誤りが減少した。

リアクションペーパーの実施方法を徹底し、記録シートの改善を試みた結果、秋学期に挙げられていた課題は改善されたように思われる。一方で、今後に向けてさらに検討する必要がある課題もみられた。文化社会講義は事前学習から事後学習までの活動を主に英語で行っているが、今回は英語でのやり取りが難しく、ディスカッションへの参加や講義の聞き取りなどに負担を感じる学生がいた。学生同士によるサポートや教員からのサポートなどで、活動には参加できていたが、文化社会講義のトピックについての発表の準備は大変だったようである。文化社会講義は、日本語のレベルに捉われず、日本の文化や社会に対する理解を深めることができるという特色がある。学生全員がこの点を理解した上で参加しているため、一部の学生だけを配慮することは公平性に損なうことである。ただし、最終発表のテーマが十分に理解できないという課題に直面している学生がいる場合、教員は具体的にどのようなサポートを行う必要があるだろうか。この点は、学生の短期日本語プログラムに対する満足度にもつながるため、重要な課題であると思われる。今回に限ってのケースかもしれないが、プログラム質の向上のためにも、教員側からの適切なサポートの仕方については、さらに検討を重ねていく必要がある。

【春学期】超短期プログラム

ベトナム国家大学ハノイ社会科学人文科学大学　日本文化体験プログラム

コース概要

日本語の学習経験がなく、初めて日本語や日本文化を楽しむベトナム国家大学ハノイ社会科学人文科学大学の学生を対象とした 10 日間の短期プログラムである。

担当者名：＜夏期＞　嶋原耕一、長谷川孝子、鹿目葉子

授業コマ数：5 コマ
履修者数：夏期 10 名
使用教材：独自教材

コースの目標

①自己紹介ができる

②日本を観光する際に使える簡単な日本語を学ぶ

③自国の観光地について、簡単な日本語で紹介できる

授業の方法

自己紹介や日本を観光する際によく出会う場面で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。また、自国の観光地を紹介するための表現や語彙も学習した。

授業では、名詞文や形容詞文を学習し、場面で必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習や会話練習を行った。

上記の内容以外に、交流活動として日本人学生のボランティアに参加してもらい、自国の文化や趣味などについて会話練習を行った。また、プログラムの最終日には、このコースで学習した文型や語彙を用いたプレゼンテーションを行った。プログラムの内容は下記のとおりである。

1 回目	自己紹介・基本的なあいさつの練習 Noun は Noun です。（趣味は／好きな食べ物は／好きなアニメは）
2 回目	Noun は adj.です。（おいしい／まずい／やすい／たかい／いい／ちかい　など） 数字の言い方など プレゼンテーションの説明と例の提示、役立つ表現練習。担当する観光地決め。
3 回目	１日目の内容に加え、新しい表現を学習。 プレゼンテーションのスライド作成と日本語でセンテンスを考える作業。 教室やレストランで使える表現練習など
4 回目	自己紹介の復習と練習。発表の準備。デモ発表など。
5 回目	日本人学生と交流活動。 自国の観光地についてのプレゼンテーション。

結果と課題

＜夏期＞

日本語学習経験がない学生達であったが、日本語に対する興味を持ち、熱心に授業に取り組んでいた。また、質問も多く、理解の早い学生達であった。明るく積極的な性格の学生が多く、日本人学生とも楽しく交流をしていた。最後のプレゼンテーションでは、会話形式を入れたり、劇のような一幕を見せるなど、工夫を凝らしたユニークなプレゼンテーションで

あった。

本プログラムは、参加した全学生に好評であり、日本語学習や日本文化への興味を持ったようである。楽しい体験となったようで、ベトナムでも日本語学習をしてみたいと言った学生もいた。

今回、プレゼンテーションの時間が十分ではなかったため、スケジュールの組み方を工夫していきたい。

【春学期】超短期プログラム

タマサート大学教養学部日本語学科 日本文化体験プログラム

授業担当者名：泉大輔、鹿目葉子、高嶋幸太、小森由里
履修者数：10 名
使用教材：独自教材

授業の方法

受講者の大学での日本語学習歴は 1～2 年で、受講者によっては高校入学以前に日本語を学習していた者もいる。レベルは JLPT N2 が 1 名、N3 が 6 名、N4 が 3 名であった。タマサート大学教養学部日本語学科の『Japan Today JP356』という科目との単位互換科目である。当該科目は戦後から現代までの日本の政治、経済、社会、文化に焦点を当てた授業であり、本学の短期プログラムにおいては特に現代日本の経済、文化、社会について種々のトピックを取り上げ、立教大学の日本人学生ボランティアとの交流・議論を通して現代日本に対する理解を深め、自身の関心のある現代日本の経済・文化・社会に関するテーマについてタイとの比較・考察した内容について発表することを学習目標としている。プログラムは 2023 年 7 月 4 日（火）、5 日（水）、6 日（木）、10 日（月）、7 月 11 日（火）の 5 日間にわたり 1 日 100 分×2 コマの計 10 コマ行われた。最初の 3 日間ではそれぞれ現代日本の経済・文化・社会に関連する資料を取り上げ、日本人学生との交流・議論を行いながら、タイとの比較を行った。4 日目には最終発表の準備、5 日目には日本人学生に対して自分の関心のあるテーマについてタイと比較しながら考察した内容について PowerPoint を用いて発表を行った。

結果と課題

現代日本に関する異なる複数のトピックを扱い、タイ人学生が普段なかなか交流の機会を持てない日本人学生と議論できる時間を長めに設けたことで、日本・日本語に関するインプットとアウトプットがバランスよく可能となり、短期間のプログラムでありながら、現代日本に関する知識の体得、これまで学んできた日本語の実践が十分にできたという声が寄せられた。特に日本人学生との交流・議論においては、日本語でタイについて説明しなければならず、母国であるタイについての内省が促され、日本と比較することで自文化を相対

的・複眼的に捉えようと努力していた様子がうかがえた。課題としては、ごく一部の日本人学生が教員の指示に従わないことがあり、あらかじめプログラムの目的・概要や授業中で求められている役割について説明が必要だったかもしれない。

【春学期】超短期プログラム

中山大学 日本語体験プログラム

授業担当者名：小松満帆
履修者数：20 名
使用教材：独自教材

観光学部が受け入れた中山大学の大学生を対象に、土曜日の 1 限から 4 限までの 4 コマを使い、日本語体験クラスを実施した。一部の学生を除き、大部分の学生が日本語を全く勉強したことのない学生だったため、日本語体験として、自己紹介の表現、日本の文字（ひらがな)、数の数え方、ファストフード店での買い物で使える表現を扱った。その際、立教大学日本語教育センター・J0 クラスで使用している教科書からの一部抜粋と、独自教材を用いた。4 限目には観光学部の立教大学の学生にボランティアで参加してもらい、自己紹介、買い物のロールプレイに加え、自由に質問し合う時間を設けた。また、TA 2 名にも参加してもらい、サポートをお願いした。

日本語を学習したことのない学生がほとんどであったことから、4 時限連続で、一度に多くの情報を盛り込むことにやや不安を感じていたが、非常に優秀な学生たちで、理解が早く、意欲も高かったことから、準備していた内容を全て行うことができた。日本語や日本に関する質問も積極的に行われ、4 時限を通して、明るく楽しい雰囲気で活動を進めることができた。立教大学の学生とのセッションには、立教大学で学ぶ中国からの留学生も参加してくれたが、日本で学ぶことや日本での生活についても多くの質問がなされ、非常に活発な活動となった。1 日だけの短い体験クラスではあったが、充実した内容で進めることができ、参加学生も満足している様子であった。

9. センター員活動報告

日本語教育センターセンター員　教育研究業績一覧

池田伸子

研究論文

1. **「国際共修授業の可能性と課題 ― 連想法による授業評価からの検討― 」『日本語・日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育センター、2024 年、1－20 頁**

研究助成

1. 2021 . 4 ～至現在　科学研究費助成金（基盤研究（ C ））「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成：発展的評価を実践できる日本語教師への研修」（研究分担者）（課題番号： 21K0063 ）

丸山千歌

図書

1.『新界標日本語　第 2 冊 改訂版』(徐敏民との共同主編)、復旦大学出版会、2024 年

研究論文

1.「大学における留学生のキャリア教育 ― 多様な留学生とつくる豊かな学びの場 ― 」（寄稿論文)、『日本語教育』184 号、日本語教育学会、2023 年、34－48 頁

2.「「日本で」ではなく、日本や日本語とつながって生きる選択肢 ― 5　人の元留学生へのインタビュー調査から― 」『日本語・日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育セン ター、2024 年、21－34 頁

研究発表

1.Utilizing AI in Education to Foster Future Talent: Opportunities and Challenges - Case Studies of Japan and Rikkyo University, Language Education-International Conference III IKIP SILIWANGI “Digital Technology in Language and Literature Education”, 20th September 2023（オンラインによる招待講演）

2.「教室活動と言語評価 ― 日本語学習の環境の変化と評価について考える」（池田伸子との共同発表）― 『2023 年度　　第 20 回マレーシア日本語教育国際研究発表会』、2023 年 10 月 7 日、於マラヤ大学（オンラインによる招待講演）

3.「成長しつづける日本語教師 ― 聴解編」（数野恵理との共同発表)、『AGBJI The 3rd Safari Education International Seminar and Workshop 』、2023 年 10 月 25 日（オンラインによる招待講演）

4.「日本語学習と異文化コミュニケーション」『異文化理解のためのワークショップ』、於華東師範大学（中国)、2023 年 11 月 4 日（招待講演）

その他

1.「日本留学経験者のキャリアの発達と日本語教育」（小澤伊久美との共著)、『MHB 紀要』特別号、(印刷中）

2.「日本語教育へのアプローチ」、インドネシア教育大学、2023 年 9 月 8 日、(オンラインによる招待講義）

研究助成

1. 2020 . 4 ～現在　科学研究費助成金（基盤研究（ C ））「「日本とつながって生きる」選択から見える日本語教育の新時代」（研究代表者）（課題番号：20K00707 ）

2. 2021 . 4 ～　科学研究費助成金（基盤研究（ C ））「大学日本語教育質保証を担う

評価人材育成：発展的評価を実践できる日本語教師への研修」（研究分担者）（課題番号：21K0063 ）

任ジェヒ

研究論文

1.「日本語教育においてバリエーションを扱う必要性の再検討 ― 社会言語能力と語用論的能力に注目して― 」『日本語・日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育センター、2024 年、53－67 頁

2.「待遇コミュニケーションにおける「丁寧さ」に関する考察」（蒲谷宏、アドゥアヨム･アヘゴ希佳子、徳間晴美との共同執筆）『待遇コミュニケーション研究』第 21 巻、待遇コミュニケーション学会、2024 年（印刷中）

その他

1.ウェブ版日本語読解教材「日本語を読みたい！」
https://www.nihongo-tai.com/japanese/yomu/about.php

研究助成

1. 2020 . 4 ～至現在　科学研究費助成金（若手研究）「日本語学習者の多様な言語生活に対応したバリエーション教育開発のための基礎研究」（研究代表者）（課題番号：20K13092 ）

2. 2022 ～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（B ））「聴解コーパスの構築による日本語学習者の聴解困難点と推測技術の実証的研究」（研究協力者）（課題番号：22H00669 ）

数野恵理

報告

1.「大学入学後一学期目の集中日本語科目とチューター制度 ― 発展的評価と改善の取り組み― 」『日本語・日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育センター、2024 年、107－ 122 頁

研究発表

1.「ハンガリーの日本語学習者が書いたナラティブ作文の評価 ― 上位群と下位群の比較から― 」（影山陽子･坪根由香里･トンプソン美恵子との共同発表）、第 26 回 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム ゲント大学 ベルギー 2023 年 8 月 20 日

2.「成長しつづける日本語教師 ― 聴解編」（丸山千歌との共同発表）、『 AGBJI The 3rd Safari Education International Seminar and Workshop 』、Zoom によるオンライン開催、 2023 年 10 月 25 日（招待講演）

その他

1.「ナラティブ作文の評価を考える ― フローチャートの活用 ― 」（坪根由香里･影山

陽子･トンプソン美恵子との共同発表)、『ハノイ日本語教師会 特別セミナー』、リキ日本語センター会議室、ベトナム、2023 年 3 月 4 日

2.「ナラティブ作文の評価を考える ― フローチャートの活用 ― 」(坪根由香里･影山陽子･トンプソン美恵子との共同発表)『フエ大学外国語大学セミナー』、フエ大学外国語大学、ベトナム、2023 年 3 月 6 日

3.「Narrative Writing 日本語のナラティブ作文評価のための支援ツール」(坪根由香里･影山陽子･トンプソン美恵子との共同作成) https://narrativewriting20 . wixsite.com/home 2023 年 8 月公開

研究助成

1. 2019 . 4－2023 . 8 科学研究費助成金（基盤研究（ B ）「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」(研究分担者)（課題番号：19H01274 ）

小林友美

研究論文

1.「母語場面と接触場面の初対面会話における相互作用と参加意識の分析 ― 異学年大学生の会話を対象に― 」『日本語･日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育センター、2024 年、35－51 頁

研究発表

1.「母語場面と日韓接触場面の異学年大学生による初対面会話の分析 ― 参加者間の相互作用に着目して― 」、企画発表、韓国日本言語文化学会 2023 年度秋季国際学術大会、全州大学、2023 年 11 月 4 日

研究助成

1. 2020 . 4 ～至現在 科学研究費助成金（若手研究)「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」(研究代表者)（課題番号：20K13089 ）

泉大輔

著書

1.『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』(単著)、ひつじ書房、2024 年 2 月

2.「新しい言葉ってどうやってできるのですか」(単著)『日本語の大疑問 2 』(国立国語研究所編)、幻冬舎、2024 年 1 月

研究発表

1.「相互行為における逸脱的な造語と名づけ」、LC 研究会、2023 年 10 月 29 日（招待発表）

その他

1.インターネットメディア
記 事 名 「新しい言葉ってどうやってできるのですか」(2023 年 8 月 8 日公開)
発 行 元 国立国語研究所　掲 載 誌 『ことば研究館』掲載箇所 「ことばの疑問」
2.ラジオ番組出演
特 集 名 「国語世論調査から見る新しい日本語の広がり」(2023 年 9 月 29 日放送) 放 送 局 NHK ラジオ第 1 放送　番 組 名 『N らじ』
3. 新聞
特 集 名 「新しい言葉どんなときにできる？」(2023 年 11 月 30 日付) 発 行 元 朝日学生新聞社　新 聞 名 『朝日小学生新聞』掲載箇所 1 面
4. 新聞
特 集 名 「新語･流行語 未知の世界への入り口に」(2023 年 11 月 30 日付) 発 行 元 朝日学生新聞社　新 聞 名 『朝日小学生新聞』掲載箇所 3 面

研究助成
1. 2022 . 8 ～至現在　科学研究費助成金（研究活動スタート支援）「現代日本語における逸脱的な造語の成立基盤に関する研究」(研究代表者)(課題番号 : JP22K20017)
2. 2022 . 11 ～至現在　国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」(研究代表者 : 小磯花絵)
3. 2023 . 4 ～至現在　科学研究費助成金（研究成果公開促進費（学術図書)）「現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究」(研究代表者)(課題番号 : JP23HP5050)

鹿目葉子

報告
1.「タイの大学における社会人基礎力育成に向けた教材開発の可能性を探る ― BTS メンバーの発言に焦点をあてて― 」(清水慶子、大橋真由美との共同執筆)『日本語･日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育センター、2024 年、137－153 頁
2.「グループ発表におけるチームワークの構築に向けた指標シートの一案 ― BTS メンバーのチームに対する考えに焦点をあてて― 」『タイ日研究ネットワーク Thailand 研究論集 5 』、2024 年（印刷中）

研究発表
1.「日本語授業におけるリーダーシップ発揮のためのグループワーク ― 韓国アイドルグループ Stray Kids を事例に― 」第 1 回タイ国日本語教育国際シンポジウム、2024 年 3 月 9 日発表予定

その他
1.「日本語教育と社会人基礎力 ― 新時代に向けたビジネス日本語教科書の提案― 」日本語教育学会 2023 年度春季大会（賛助会員ブース _ オンラインセッション）2023 年 5 月 27 日

小松満帆

研究論文

1.「『アテレコ･ワークショップ』の試み ― アニメを活用した授業の一案として ― 」、『日本語教育方法研究会誌』Vol.29 No.2、日本語教育方法研究会、2023 年、120－121 頁

2.「役割語を取り入れた授業活動の実践報告 ― 日本語レベル混合クラスにおけるアニメ･アテレコ活動― 」、『小出記念日本語教育研究会論文集』32 号、小出記念日本語教育学会、2024 年（印刷中）

3.「漫画『SPY × FAMILY 』の登場人物に見る言葉づかいの切り替わり」『日本語･日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育センター、2024 年、69－85 頁

研究発表

1.「役割語を取り入れた授業活動の実践報告 ― 日本語レベル混合クラスにおけるアニメ･アテレコ活動― 」、口頭発表、小出記念日本語教育学会第 32 回年次大会、於国際基督教大学（オンライン）、2023 年 6 月 24 日

保坂明香

報告

1.「夏期日本語教育報告　交流プログラム報告」『ICU 日本語教育研究』第 19 号、国際基督教大学グローバル言語教育研究センター、2023 年、124－131 頁

研究発表

1.「日本語の表記システムと送りがな」、口頭発表、日本語と言語運用研究会 2024、於専門学校 湖東カレッジ、2024 年 3 月 11 日

研究助成

1. 2020 . 4 ～至現在　科学研究費助成金（基盤研究（ C ））「認知特性により学習に困難を示す日本語学習者への支援体制構築に向けた基礎的研究」（研究分担者）（課題番号：20K00703 ）

10.　2023 年度ＦＤ記録

１．FD 委員会の開催日

第１回	７月	21 日	第２回	９月	４日
第３回	２月	16 日	第４回	２月	29 日

２．2023 年度の課題の達成状況

課題１：PEACE 日本語プログラム

23 年度 4 月には、RSP 入試で入学した PEACE 学生、法学部グローバルコースの留学生（書類選考）で全カリの言語履修については PEACE プログラム学生と同様の対応となる学生が入学してきたため、PEACE プログラム用の日本語科目の運用がスタートした。

春学期：PEACE 1~3 のうち、PEACE 1 のみ開講（履修者 1 名）。2 及び 3 については、履修者がいなかったため不開講となった。また、日本語力が J4 以上の学生が複数いたため、特別外国人学生用の日本語科目との併置としたほか、足りないコマについては PEACE4～8 という J4 から J8 までの学生が同じクラスで学ぶコマを 2 つ設置して対応した。

秋学期：PEACE1，2 を開講。J4 以上の学生に対しては春学期と同様の対応となった。

第 1 回及び第 3 回で 23 年度を通した PEACE 日本語プログラムについて共有されたのは、以下の通り。

①PEACE1～3 について、当初は J1～J3 の科目内容を踏襲する形を考えていたが、履修者の置かれた状況（英語トラックの学生であり、専門科目の履修もかなり大変であること）が明らかになったことから、タスクベースの内容に変更したほうがよいことが見えてきたことから、24 年度は、PEACE1~3 の内容をタスクベースを基本として組みなおすこととなった。まずは PEACE2，3 が先行する形で進め、PEACE1 もそれに倣っていく方向。

②日本語力が中級以上（J4 以上）の学生については、現在、緊急対応として特別外国人学生用の科目と併置させることで対応しているが、PEACE（及び法学部グローバルコース）は英語トラックであることから、現在のような対応は適切ではないこと、今後は、J4 以上の学生については、全カリ言語 A を英語、言語 B を日本語とし、週に 2 コマの日本語履修とすることが望ましいことを確認した。これについては、すでに日本語教育センターとしての意見を全カリ、国際化推進機構に共有しており、今後の対応が望まれる。

上記①については、第 4 回の拡大 FD で 24 年度に PEACE 日本語科目を担当する教員間で共有し、授業実施に向けて意見交換を行った。

課題２：NEXUS 日本語プログラム

23 年度秋学期に NEXUS プログラムの学生として入学したのは 2 名（モンゴル、ベトナム）であったが、ウクライナからの学生 2 名が加わり、4 名体制で NEXUS 日本語プログラムが運営された。

22 年度の実施を踏まえ、より学部での専門科目履修を意識したアカデミックなプログラムとして実施したため、一部の学生にとっては少し難易度が高いプログラムとなっている。また、日本語能力試験を受けるための勉強に集中し、NEXUS 日本語の勉強がおろそかにな

る学生も見られたため、次年度に向けて、NEXUS プログラムに合格した学生に対して情報を提供してもらうこととなった。

NEXUS プログラムとして入学した 2 名の学生、ウクライナからの 1 名の学生については、大変ながらもプログラムを修了し、4 月から専門の勉強に入っていけることとなったが、ウクライナからの 1 名は、精神的な不適合のため、再度 24 年度にプログラムを履修することとなった。

第 1 回、第 3 回の FD において、さらにプログラムについて充実させていく方向で話し合いがもたれた。また、第 2 回の FD においては、NEXUS 日本語科目を担当する教員で情報共有を行い、効果的なプログラム実施に向けて話し合いを行った。

課題３：日本語相談室拡充

TGU 展開に伴う留学生増に対応すべく、2022 年度より日本語相談室の相談員として学生アドバイザーの活用が始まっている。なかなか学生アドバイザー枠の利用が増えないことから、利用できる内容について FD を通して話し合いを行い、さらに活用できる幅を広げることとした。

また、これまでは、教員枠、学生アドバイザー枠の運用率に対して意識的に目を向けてこなかったため、第 3 回の FD において、個々の相談室枠の運用率を共有し、運用率の低い枠を今後どうしていくかについて意見共有を行った。また、これを踏まえて、24 年度においては、毎月、それぞれの枠の利用率を共有し、さらにどんな学生がどんな目的で利用しているかの情報を収集することで、さらに学生の活用しやすい仕組みを構築していくこととした。

３．2024 年度の課題と計画

課題１：PEACE 日本語プログラム

24 年度には、2 学部 1 プログラムに学生が入学してくる予定であり、PEACE１から PEACE３まで展開することが可能であると思われるため、1～3 の完成形を見たうえで、さらにコース改善につなげたい。また、日本語力がある学生（J4 以上）の日本語履修について、引き続き関係部局と調整を進めたい。

課題２：NEXUS 日本語プログラム

3 年目も継続して当該プログラムを取り上げる。

課題３：日本語相談室拡充

3 年目は、教員枠も含めた「利用率」を正確に把握すること、利用している学生のステイタス、目的を把握することによって、より効果的な相談室体制を構築すべく話し合いを重ねる。

2023年度　日本語教育センター運営体制

運営会議

センター長	：池田　伸子	（異文化コミュニケーション学部教授）
副センター長	：石川　巧	（センター長指名による、文学部教授）
運営委員	：浅妻　章如	（全学共通カリキュラム運営センターコア会議から法学部教授）
運営委員	：シュロスブリー　美樹	（国際センターから外国語教育センター教授）
運営委員	：舛谷　鋭	（総長指名による、観光学部教授）

実務委員会

センター長	：池田　伸子	（異文化コミュニケーション学部教授）
副センター長	：石川　巧	（文学部教授）
センター員	：丸山　千歌	（異文化コミュニケーション学部教授）
センター員	：数野　恵理	（特任准教授）
センター員	：小林　友美	（特任准教授）
センター員	：任　ジェヒ	（特任准教授）
センター員	：小松　満帆	（教育講師）
センター員	：鹿目　葉子	（教育講師）
センター員	：泉　大輔	（教育講師）
センター員	：保坂　明香	（教育講師）
事務局	：澤村　亜生津	
事務局	：佐野　美奈子	
事務局	：鶴見　佳積	
事務局	：宮本　杏子	

兼任講師

井上　玲子	栃木　亜寿香	佐々木　瑛代	平山　紫帆
小澤　雅	冨倉　教子	沢野　美由紀	三浦　綾乃
川野　優希	長島　明子	嶋原　耕一	森井　あずさ
黄　慧	野口　聡恵	末松　史	森山　仁美
小林　千種	長谷川　孝子	高嶋　幸太	山内　薫
小森　由里	長谷川　美佳	瀧澤　あゆみ	和田　晃子
斉藤　紀子	東平　福美	武田　聡子	

2023年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	14	第1回実務委員会
	19	第1回運営委員会
5	19	第2回実務委員会
	24	第2回運営委員会
6	16	第3回実務委員会
	21	第3回運営委員会
7	21	第4回実務委員会
	26	第4回運営委員会
9	22	第5回実務委員会
	27	第5回運営委員会
10/11	10/27	第6回実務委員会
	11/8	第6回運営委員会
12	8	第7回実務委員会
	13	第7回運営委員会
1	26	第8回実務委員会
2	16	第9回実務委員会
	21	第8回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員 、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、 事務局（陪席）

2023年度日本語教育センター活動報告
CJLE Program & Activity Reports (2023)
2024年3月発行

編集兼発行者　日本語教育センター
発行責任者　池田伸子
発行所　立教大学日本語教育センター
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel: 03-3985-4202